IS〈インフィニット・ストラトス〉　シン・アスカの激闘

ちくわヘルシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉　シン・アスカの激闘

【Ｎコード】
Ｎ１５２４Ｖ

【作者名】
ちくわヘルシー

【あらすじ】
メサイア防衛戦にて、激闘の末アスランに敗北したシン。幻想の中ステラと『明日を見て生きること』を約束したシンが目を覚ませば、そこは見知らぬ倉庫のような場所。奥に進むとそこには、鎧のような『何か』があった……
色々あってシンが入学したのは『女子しかいない（他一名除く）』とんでもない学校だった！　果たしてシン・アスカの明日はどこに向かう！？
戦闘あり！　ラブコメあり！　『ＩＳ〈インフィニット・ストラト

ス〉』と『機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹ』の夢のクロスオーバー、ここにあり！

……ってな感じのモノが書けたら良いなあ。

プロローグ『加速する明日』（前書き）

※以下の事にご注意ください。

・この作品は『シン・アスカ』を主役に据えています。彼が嫌いな方は回れ右してください。

・『シン・アスカ』は原作……もとい高山版を『ベース』にしています。全て設定が高山版通りではないので、ご了承ください。

・原作双方の雰囲気が壊れているかもしれません。

・〇〇は俺の嫁！という方、ご注意ください。あなたの嫁はシン・アスカに取られるかもしれません。

最後に、このような形で失礼ですが、既に同発想でＳＳを書いていられる作者様方に心よりの敬意とお礼を申し上げます。

プロローグ『加速する明日』

ねえ、ステラ。君は今の俺を見たらどう思うかな？　怒るかな？
それとも笑うかな？
あ、いきなりこんなことを聞いてゴメン。つい……

大丈夫。約束は、忘れてないから。君の言ったとおりに、俺は前を見て、明日を生きている。それが君との約束だから。
ううん、君だけじゃない……父さん、母さん、マユにレイの分まで……みんなの分まで明日を生きるって俺は決めたから。
過去に囚われるなって、アスランは言った。確かに俺は、過去に縛られていたかもしれない。けど、失った過去を守ることが間違いだなんて、俺には思えない。だって、君やレイ達と過ごした時間は……俺にとって大切なものだったから。それを切り捨てることなんて、できない。
アスランも、きっと分かってくれると思う。あの人だって、大切なものを守りたかったわけだし。それに……なによりあの時、俺を止めてくれた。過去に囚われるだけで、憎しみで戦うことは間違いだって、俺に教えてくれた。
俺は過去を放ってはおかない。ちゃんと失った過去を背負って、それから、前を……明日に目を向けるんだ。今度こそ、大切なものを守るために。誰かにすがって、答えをもらうなんてことはしない。
だから、安心して、ステラ。振り返りながらかもしれない。時々、足を止めることもあるかもしれない。けど、俺は歩き出すことを決めたんだ。
大丈夫さ。だって――

――生きている限り、明日はやって来るから。

……うん、ステラ、ゴメン。たった今、大丈夫だって、言ったばかりなのに……

俺は、真っ直ぐ前を見つめることができてない。うつむいたままだ。

足も全く動かせていない。立ち尽くしている。歩き出せていない。

目の前には、学校の校門がある。俺はそこをくぐることができないでいる。

どうしてかって？　周りを見てくれれば、分かるはずだ。

俺は顔を上げて、周囲を見渡す。そこには――

校門の前にたたずむ俺を、好奇の目で見ながら抜き去っていく、制服姿の女子、女子、女子女子女子女子女子女子……男子は一人もいない。女子だけだ。

ある女の子は、何も言わずにこっちを見つめ……別の女の子は、友達らしい子と手を取り合って、キャッキャとはしゃぎながら……さらにまた他の子は、携帯のカメラをこっちに向けている……やめてくれ、フラッシュをたかないでくれ。

ああ、きっと動物園のパンダはこんな気分だったんだろうな。マユ、今度動物園に行く時は、ちゃんとパンダに挨拶しような。「今から写真撮りたいんだけど、良いですか？」って。何も言わずにシャッターを切るのは失礼だ。よく分かった。

……ゴメン、話がそれた。ええっと……とにかく、数えてもキリがないぐらいの女の子が俺の周りにいる。敵機としてアーサーに報告したら、多分卒倒するぐらいに。それがいっせいに、こっちを見

ているんだ。その視線に圧倒されて、情けない話だけど、俺は動けないでいる。
逃げられたら良いんだけど、そういう訳にもいかないんだ。なにせ、今の俺が着ている服も、周りと同じような白地に赤いラインの入った制服。つまりは、そういうことだった。

今日この学校は入学式で、今日から俺はこの高校に通うことになっていて、ついでにこの学校には男子があと“一人”しかいないって……

どうしてこんなことになったんだろう？　うん、力が欲しいとは思った。守る力が欲しいとは思った。たまたま、それを手に入れることができた。
でも、知らなかったんだ。この世界では……その力は「女性にしか動かせない」代物だったなんて。なんで俺がそれを動かせるかも、分からなくて。

あ～、もう、いい加減頭が混乱してきた。本当にそもそも、俺はどうしてここに来たんだよ……？
頭を抱えながら、もう何度目かは分からないけど、俺は記憶を掘り起こし始めた。

◇

目の前には紅いモビルスーツと黒い宇宙が広がっていた。
そのモビルスーツ……ジャスティスがだんだんと遠くのほうに離れていく。右腕のなくなったその機体が、俺をじっと見下ろしていた。
実際にはジャスティスが退いているわけじゃない。俺の方が落ちているところだった。

――メサイア防衛戦。
デュランダル議長が唱える、戦争のない平和な世界を創るための計画『デスティニープラン』を成功させるために、俺は最後の任務についていた。
任務の内容は、戦略兵器『レクイエム』と起動要塞『メサイア』の防衛、それを落とそうとするオーブ軍の遊撃。作戦が成功してオーブを討てば、全てが終る。
議長の言うことが、本当に正しいのかは分からない。強制された平和で人が本当に幸せになれるのかって、アスランの言うことも分かるけど、だからって俺も戦わないわけにはいかないんだ。これで戦争がなくなるんだったら、仲間を守れるなら、たとえオーブを討つことになっても俺は戦う。
だから俺は、アスランと戦っていた。あんたが正しいっていうのなら、俺に勝ってみせろって、そう言って。

アスランの言う『人の向かうべき明日』。
俺が欲しかった『戦争のない明日』。

俺の明日がどんなものになるのか、分かるはずもなかった。

右腕と右足を切られたデスティニーが、ゆっくりと後ろに傾いていく。
機体の制御が利かない。
カメラは生きているけど、もう意味なんてなかった。
さっき左腕も持ってかれた。武装も、スラスターもやられている。
コクピットの中で鳴り止まないエマージェンシーが、完全に俺の敗北を告げていた。

ああ……俺は負けたんだ。

でも不思議だ。悔しくてたまらないけど、嫌じゃない。素直に負けを認められる。

「アスラン……あんたやっぱ強いや……」

暗い宇宙の中で、周りは色々な光であふれていた。
ビームの閃光が走る。ミサイルの爆発が鎖を形作る。それに、モビルスーツが一際大きな輝きを見せては消えていく。
みんなまだ、戦っている。必死に、守りたいもののために。戦争のない、平和な世界のために。
さっきまで俺も、その中の一つだったはずなのに。
デスティニーはもう戦えない。俺の力が足りなかったからだ。

「シン……」

少しの間だけ俺のほうを見ていたジャスティスが、背を向けて宇宙に消えていった。
アスランの行く先はきっとレクイエムだ。そのままレクイエムは墜ちるだろう。
それを止めるのが、俺の任務だったのに。
駆けていくその光の筋を、俺は見ていることしか出来なかった。

すみません、議長。
ごめん、レイ。みんな。
俺、止められなかったよ。
俺はまた、守れなかったんだ。

月面の荒れ果てた大地がだんだん近づいていく。
落ちていくデスティニーの中で、俺の意識は遠くなっていった。

◇

――結局俺は、誰も守ってやれなかった……

周囲には何もなかった。

自分以外に何も見えない暗い空間の中で、まるで意識だけが浮いているみたいだ。体にも力が入らないし、それに、ひどく寒い。

いったいここはどこなんだろう？　レクイエムとメサイアは？　議長は？　レイは？　ミネルバのみんなはどうなったんだ？

……もう、俺が気にしてても意味は無いかもしれない。

どうせまた、守れなかったんだから。

俺はどうなっても構わない。戦争のない、平和な世界のために、って戦ってきて……それでも、何も変えられなかったんだ。全てが、オーブにいたあの時のまま。

軍に入ってから、俺は強くなったと思った。全て叩き潰して、戦争なんて無くしてしまえるって思った。大切な全てを、今度こそ守ってみせると思った。

なのに、父さんと母さんとマユが死んだときと同じだった。ステラも守れなかった。目の前で死んでいった。

奪っていった奴らが憎かった。議長がくれたデスティニーさえあれば、そいつらを倒せると、平和な世界の邪魔をする奴を、全てなぎ払えると思った。

でも、最後はアスランに負けた。あの人は、憎しみで戦うなって言った。それじゃあ心は永久に救われはしないって。

……だったら、俺が今まで戦ってきたのは何だったんだ……？

これでやっと終ると思ったのに。もう戦わなくていいんだって……
それなのに……

誰も守れなくて。何も守れなくて。ずっと守れなくて。

できるようになったのは、誰かを撃つことだけだったのか？　誰かから奪うことだけだったのか？　だったら俺のしてきたことは……

――無駄だった。何もかも……

暗闇の中でどうにかなってしまいそうだった。泣き叫びたいぐらいなのに、もう涙も出ないし、指一本すら動かせない。そのまま意識の底まで沈んでいきそうな、その時だった。

「そんなことないよ……！」
「え？　誰？」

後ろから柔らかい光と一緒に、誰かの声が聞こえた。
暖かい、優しい光と声だ。その少し幼さの残る声に、はっとして振り向く。
振り向いたそこにはステラがいた。

「ステラ……シンに会えて良かった……」

ステラは笑っていた。出会った時と同じ金色の髪がはねている。でも、最後に会った時とは違って、嬉しそうに、本当に嬉しそうに笑っていた。
俺が守りたかった、守りきれなかったはずステラの笑顔……光は優しく俺を包んでいるけど、なんだか眩しくて、はっきりと目を開けていられなかった。

「だからシンも前を見て。明日を……」

その声を最後にして、ステラの姿は遠くに消えていった。さっきまでの刺すような寒さは無くなっていて、辺りは光でいっぱいになっている。

ステラ……そうだな。俺はまだ、生きている。

枯れていたはずの涙で、目がにじむのが分かった。それを腕でぬぐって、なんとかこらえる。いつもみたいに、泣きわめくことはしたくなかった。

「ステラ……約束するよ。俺、今度こそ、守ってみせる」

姿は見えないけれど、きっと聞こえている。ステラは俺のそばにいてくれているはずだから。はっきりと決意の言葉を口にすると、俺の意識まで、光の中に溶けていった。

満ちていく光の中で、ぼんやりとしか覚えていないけど、何かを見た気がする。

差し伸べられた誰かの手。

それは、こっちにおいでというように俺に向かっていて……

どうしてだかは分からないけど、俺はその手をつかんだ。

覚えているのはそこまでだった。

◇

目が覚めたときには、うす暗い部屋に放り出されていた。まず非常電源を起動させようとか、無線が生きているか確認しようと手を

伸ばしたけれど、その手に触れるものがなくて、自分がコクピットの中にいるんじゃないってことに気付く。

「ここは……どこだ？」

なら、どこかの医務室か？　という疑問も、自分が固い床に転がされていることで、違うと分かる。医務室がいっぱいになっていても、流石に床に放り出したりはしないだろうし。幸いにも、俺はどこも怪我なんてしていなかったけど。それに、戦闘中らしい慌ただしさも振動もない。静かなものだった。

まだ少しふらつく頭を抱えて起き上がる。床を踏みしめられるのだから、重力があるみた……ちょっと待て、重力？　回収された後に地球にでも連れて行かれたのか？

ヘルメットは……ない。どこかに置いていかれたらしい。パイロットスーツは着たままだ。ますます、よく分からない。拘束もされてないから、敵艦の中ってわけでもなさそうだし……

辺りを見渡すと、うずたかく積まれたダンボールの山だとか、見慣れない機材が積み重ねられている。何かの倉庫？　だったら俺は怪我が無いからって倉庫に投げ出されたのか、なんて考えると、ちょっと腹が立つ。

何でも良いから、ここを出なきゃ始まらない。そう思ってみたものの、結構な広さもあるらしいし、隙間なく物が詰め込まれた棚とかのせいで視界が狭い。すぐに出口は見つからないだろうけど、とりあえず辺りをふらふら歩き始める。

「誰か、いないのかー！？」

声をあげてみても、返事は聞こえなかった。自分の出した声が、倉庫の高い天井から跳ね返ってくるけれど、すぐにまた静寂が戻る。

状況もさっぱり理解できないせいで、苛立ちは募るばかり。

「どうなってるんだよ、いったい！？」

思わず声を荒げたその時、奥のほうから、ブンと機械が動き出したような音が聞こえた。今まで気付かなかったけど、その音の方角から光が漏れていた。それを追ってはみるものの、なんだか奥のほうに入り込んでしまっているみたいだ。そうは言っても音が気になったから、かまわずに進む。何も無いよりマシだ。

荷物の迷路を、目的地の光だけを頼りに進んでいく。機材の山の壁と暗がりのせいで、時々つまずきそうになりながらも歩いていくと、パソコンの画面らしい明かりが目に入った。そろそろゴールらしい。最後の角を曲がったところの、一番奥に、それはあった。

「なんだ、これ……？」

打ちひしがれるような格好でたたずむ、灰色の、人型の何か。

胴体を覆うアーマー、腰のサイドスカート、そして無造作に投げ出されたその腕と足は、まるでモビルスーツを小さくしたみたいで……でも、所々には装甲がないし、何より頭部がない。こんな歯抜けた形じゃあ、自立して動くなんてできないだろうし……カメラまでないなら、作業用のロボットでもないのか？　それともただの作りかけか？

肩と背中、それから腰に繋がれた仰々しいケーブルは、隣のパソコンに伸びていて……画面の中はすさまじい速さで文字が躍っていた。

覗きこんでみると、わけの分からない用語のオンパレード。ＰＩＣ整備完了、ハイパーセンサー整備完了、コア・ネットワーク動作確認終了、シールド・エネルギー充填完了……動作確認終了とか出ているんだから、整備はほぼ完璧なんだろう、きっと。

ただ、この灰色の鎧みたいなやつが動き出すなんて思えないし……鎧、か。サイズも人間大だし、新しい作業用スーツなのかも。いや、それにしては、ずいぶん物々しいような……

触ったらまずいよな、とは思ったけれど、物珍しさもあってそれに手を伸ばしてみる。あと数センチでそれに触れそうになった時――

ドンっという爆音が俺の体を揺らした。

『火災発生、火災発生！研究所第一棟の開発室から出火！』

続いて、緊急事態を知らせる警報が鳴り響く。サイレンの音に反応して、伸びた腕は勝手に引っ込んでいた。

「火事！？　嘘だろ！？　こんな時に！！」

すぐに来た道を引き返して、出口を探し始める。もしここに弾薬があって引火でもしたら、間違いなく俺は吹き飛ばされる。そんなのはゴメンだ。変な機械に構ってなんていられなかった。

戻りの道すがら、何度も爆発音が聞こえ、地面が揺れ動く。音のする距離はそんなに離れていない。煙がまだこっち来ていないのだけは救いだ。急がないと……

意外にも、引き返してみれば出口は近かったし、その前にはヘルメットが落ちていた。これで煙を吸い込む心配はしなくて済む……少しだけ安心してヘルメットを持ち上げると、中からカラン、と何かが入っている音がする。

手を入れてつかんでみれば、硬い、長方形の感触。取り出してみたそれは、ピンク色の携帯で――マユの形見の携帯だった。

「何でこれが……って、今はそんなこと考えてちゃダメだ！」

艦に置いてきたはずだったけど……とにかく、これが見つかったなら、なおさら死ぬわけには行かない。携帯を握りしめて、片手で

ドアノブを回して扉を開く。

扉の先の廊下には、すっかり黒煙が立ちこめていた。スーツ越しにも伝わる熱気が、火が近づいていることを俺に教える。扉を閉めて、右に向かって駆け出した。建物の構造を知らないせいで、どこから逃げればいいかが判断できないけれど、まず出火元から離れることが先決だ。

回りこんだ廊下の先の窓を開け、外がどうなっているかを確認する。下には庭が広がっていて、避難したらしい人たちでごった返している。庭を中心にして、左右と向かいに、それぞれ似たような建物がそびえ立っていた。

「おい君！　その下の庇から降りられるか！？」

窓から身を乗り出していると、こっちに気付いた庭の白衣の人が声をかけてくれた。下の庇？　よくよく真下を見ると、確かに庇があった。なるほど、これならなんとかなりそうだ。

「今はしごも用意したから、急いで！！」

「はい、大丈夫です！！」

落とさないようにスーツの中に携帯をねじ込み、飛び降りようと窓枠に手をかけると、また大声が聞こえてきた。でも今度はもっと切羽詰ったような、悲痛さも感じられる声だった。

「放せ！　まだ娘が中にいるんだ！！　放せってんだよ！！」

「主任！！　無茶ですってば！！　消防の人を待たないと！！」

後ろの人に羽交い絞めにされても、必死に建物の中に飛び込もうとする人がいた。まだ中に人がいるのか？　なら助けないと！！

考えるよりも先に声を張り上げていた。

「その子、どこにいるんですか！？」

俺の声に気付いたその人が、はっと顔を上げる。顔はまだ若々しいけど、無精ひげと、着崩した白衣がだらしない。けどその顔は、そんなこと関係なく必死で、俺にすがるような目を向けていた。

「何言ってるの！　君も早く「多分四階だ！　今お前さんがいるところの一つ上だ！　頼む！！」

後ろにいた人は止めようとしたけど、それはもう一つの嘆願にかき消される。返事をする時間も惜しい。窓に背を向けて、俺は階段を探して煙の中に入り込んでいった。

直後に、大きな衝撃。まだ爆発は止まらないらしい。急がないと火事で燃えるより先に、建物が崩れる。見つけた階段を数段ほど飛ばしながら駆け上がって、廊下に出た。廊下はもう火に包まれていて、３階よりも熱気は一段と増している。

「誰かいるか！？　いたら返事してくれ！！」

返事の代わりに聞こえてきたのは、女の子の泣き声。声のする部屋へ、炎を避けてひたすら走りこむ。　扉を開けると、部屋の奥で女の子が震えていた。机の下に潜りこんで泣きじゃくっているその年のころは１０ぐらいだろうか、長く伸ばした栗色の髪を先でまとめている。マユを思い出させるその見た目……大きく一度、心臓が跳ねた。

振り払うように頭を振って部屋に入り、机にしゃがみ込んで手を伸ばす。

「もう大丈夫！！　こっち！！」

恐怖からなのか、女の子は何も言えなかったけど必死に俺の体にしがみついてきた。

煙を吸わせないように注意しながらも、その子を抱えて部屋を後にする。見つけたのは良いけど、早く逃げないと……

廊下の炎はさらに高くうねり、爆発は建物を揺らし続ける。この階からじゃあ避難はもう無理だ。危うく炎に飲み込まれかけていた階段を飛び降りながら、再び三階の廊下に入る。

「っ！？　しまった、ふさがれた！？」

通路の角を曲がってみれば、どこを通ってきたのか、火は道をもう完全にふさいでいた。背後からも炎が迫っているのに、前も後ろも遮られた形だ。

「こっちだ！！」

唯一残っていたのは倉庫ぐらいだった。少しでも時間稼ぎになるように入って扉を閉めたけど、焼け出されるのも時間の問題だ。

「くそっ！！　何とかならないのかよ！！」

扉に拳を打ち付けても答えが出るわけも無くて、虚しく音が響くだけだった。

「……っ！！」

女の子のしがみつく力がいっそう強くなった。涙でぐしゃぐしゃ

になった顔をこっちに向けて、煙でカラカラに渇いたのどから、なんとか声を絞り出している。

「お兄ちゃん……大丈夫？　助かる？」

「大丈夫。俺がちゃんと、君を守るから。お父さんの所に連れて行くから」

「……ほんとに？」

「うん。だから、大丈夫。安心して」

そう言うと女の子はちょっとだけ安心したのか、うなずくともう一度だけ手に力を込めた。

俺はその顔を真っ直ぐ見ることもできなかった。

今の自分に何ができる？

怯えさせて、その後は気休めの言葉をかけるだけか？

ちくしょう……！

ちくしょう！

ちくしょう！！

約束したばかりなんだ！！

明日を生きるって、ステラと約束したばかりなんだ！！

なのに！！

自分も守れないのかよ！？

この子一人も守れないのかよ！？

もう俺には、そんな力も無いのかよ！！

掌を強く握り締めて、歯を食いしばる。

『力』が、欲しい。

約束を守る『力』。

奪う力じゃない。
守る『力』。大切なものを……今度こそ。
――今度こそ俺は守らなくちゃならないんだ。
薄暗いはずの倉庫が、急に真っ白になっていく。
倉庫のもの一切が、いや、壁も見えない。
抱きかかえていたはずの女の子も見えなくなって、何も聞こえなくなった。
まるで時間の流れから切り離されたみたいに、周囲が静かになる。
白い空間の奥に見えたのは、ケーブルに繋がれていたあの鎧もどき。
動くわけでもない。何か言うわけでもない。
ただ、そこにあるだけだ。
それでも、はっきりと分かった。
俺のことを呼んでいる。
気付いた瞬間、まるでテレビの画面を切り替えたように、世界が元通りになった。
弾かれたように体は動き出していた。
道なんて覚えていないのに、足は勝手に奥へと突き進む。
同じ角を曲がり、たどり着いた場所に座っているそれは、周りのことなんて全く気にかけずに、俺の前にあった。
「これ……『ＩＳ』だ」
女の子がぼそりと呟く。『ＩＳ』、という名前に聞いた覚えはない。

これが何かなんて知らない。
でも、たった一つだけ理解できることがある。
これは、『力』だ。守るための『力』だ。
抱えていた女の子を一度おろして、安心させるように髪を軽くなでた。
「大丈夫だから、安心して」
こっちを見上げながら、なでられた頭をおさえている女の子に背を向ける。
俺はその灰色に手をかざした。
お前が、俺のことを呼んだんだよな？　なら頼む。
俺に『力』をくれ。
『力』が必要なんだ。
だって俺はまだ――
「俺はまだ、何も守れてないんだ！！」
手を触れた途端に、金属がこすれたような音が聞こえた。
次の瞬間には、頭の中には膨大な情報が滝のようになだれ込む。
普通だったらそのまま流されていくような情報も、自分の頭はＯＳにでもなったみたいに瞬時に処理していった。
力の何もかもが、分かる。力の使い方、特徴、装甲の限界、最大出力、意識に浮かび上がるパラメーターも、その見方も、何もかも。

機体を縛り付けていたケーブルが、排出される水蒸気と共に一つずつ外れていく。
鮮明になっていく視界と同時に、機体の灰色はにじみ出るように、色鮮やかな青と白に染まった――ハイパーセンサー最適化完了、フェイズ・シフト、展開……完了。
宇宙に上がったときのあの感覚、体がふっと浮上する――推進機正常動作、確認。
左腕を突き出せば光が包み、そこに盾が現れる――機動防盾……展開。

各種追加装備――使用可能装備無し。
全システム――クリア。

『－ｉｇｎｉｔｅｄ（イグナイテッド）－起動』

視界に映る起動の文字が消え、装甲が淡く輝きを放つ。
背部のスラスターからの排気が、軽く周囲のものを揺り動かす。
見えるのは狭く、ちっぽけな世界。いつだって理不尽で、容赦無く俺を打ちのめしてきたはずの世界。
だけど確かに今この世界に、俺と『力』はあった。
起動動作が終了したのを確認した俺はすぐに、女の子をまた抱き寄せた。
「しっかりつかまっててくれよ」
「う、うん……」

驚きで目を見張る女の子に念を押して、抱え挙げる。左腕の盾でその子を覆うようにすると、右腕で腰のサイドスカートからダガーを引き抜き、地面から一メートルほど浮き上がって、ドアの方に向き直った。
盾の装甲が押し広げられるように開き、スラスターに光がともされていく。

「行くぞっ！！」

体をぐっと前に傾け、背中と足のスラスターを一気にふかす。
邪魔な障害物をダガーで払いながら、加速をつけて倉庫を一直線に駆け抜けた。
生身だったら絶対に反応仕切れない速度でも、センサーが感知して体がそれに追従する。
のたうち回って揺らめく炎も、今は何の脅威でもない。
その勢いを保ったまま、ダガーを突き立てて倉庫の扉をぶち破り、さらには建物の壁も簡単に貫いていく。１枚、２枚……止まりはしない。

「はああぁぁーーーーっ！！！！！」

壁を切り抜けて最後の窓を叩き割り、太陽の下にたどり着く。センサーを通じて見える世界では、光を反射して輝くガラスの破片が宙を踊っていた。
外に出られれば一安心だ。そう思って下に着地しようとしたけれど、止まらない。
いや、止まらないどころか――

「げ、減速できない！？」

空中制御が上手くできないせいで、ほとんど減速できなかった。マズい。この勢いじゃあ、向かいの建物に突っ込む。そろそろ腕の中にいるこの子も無事じゃいられない。

ダガーを放り投げて、両手で女の子を抱きしめる。前傾姿勢だったのを反転させ、足のスラスターを点火。無理やりに急降下して、背中から地面に接触した。衝撃が背中を激しく打って、体を震わせる。放り出されそうな意識は、スーツのおかげだろうか、なんとか繋ぎとめられた。

「止ま……れえええぇーーーー！！」

芝生のきれいに植えられた庭を、土を盛り上げて深くえぐっていく。それから庭を通り越して、外周のコンクリートの上で火花を散らしたところで、ようやく動かなくなった。

プスプスとコンクリートが煙を上げる。庭にいた人たちが大勢、慌ててこっちに走ってくるのが見えた。

「だ、大丈夫？　怪我はない？」

まずは女の子の安否を確認。外傷はないはずだけど……

「だ……だいじょう……ぶ～」

クルクルと目を回していた。あんな無茶に付き合わせたんだから、それも仕方ないか。

……でも、無事だった。助けることができた。守れたんだ。

「良かった……」

安心したらガクッと体の力が抜けた。そろそろ限界だったらしい。身にまとっていた装甲は、一瞬光ったかと思うと、もう消えていた。まぶたは重くて、目を開けているのがつらい。

「あ、お父さん！！」

「マユ！！　無事か！？　怪我は！？　大丈夫か！？」

「うん、平気！　このお兄ちゃんが助けてくれたの！！」

「ああ、そうだな……っておい！！　お前さん大丈夫か！？　おい、タンカだ！！　誰かタンカ持ってこい！！」

マユ？　名前、マユっていうのか……なら、ホントに、守れてよかった……

その安堵がとどめの一押しだった。他の人が近づいてきてるのに、逆に周りの喧騒は自分の耳からどんどん遠ざかっていく。

そういえば、俺はどうしてここにいるんだっけ……？

まあ、今はそんなことといいか……

頭の中はごちゃごちゃしたまま。だから今は、何も考えないで眠りたかった。

「君！　しっかりして！！」

「お兄ちゃん！！　大丈夫！？　お兄ちゃん！！」

ほんのちょっと前まで、モビルスーツに乗って戦っていたのに……

次に気付いたら、ステラに会えて……

今度は妙なスーツ着て、空を飛んでいて……

明日が、急に加速したみたいだ。

――明日を生きるって大変だな――

プロローグ『加速する明日』（後書き）

どうも、ここまで読んでいただきありがとうございました。
誤字・脱字は是非ご指摘ください。
また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくて溶けてしまいます。
お気軽にご感想をください。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

第一話『明日の向かう先と、学園生活の始まり』（前書き）

※以下の事にご注意ください。
・キャラ崩壊しているやもしれません。ご注意ください。
・作者の力量不足により、ご都合主義の超展開になっております。
・これまた作者の力量不足により、話が中途半端になっております。
申し訳ありません。

第一話『明日の向かう先と、学園生活の始まり』

やっぱり、思い出しても意味が分からない。
マユって名前の女の子を助けて、眠っちゃって……目が覚めてから聞かされた話は、あまりにも非現実的すぎた。

まず、ここは俺のいた世界じゃない。
コーディネイターはいないし、宇宙にプラントはない。地球にはオーブなんて国もないし、おまけにあんな悲惨な戦争状態でもない。
ＺＡＦＴのこととか、モビルスーツのこと聞いても、そんなことは知らないと返されるだけだった。ありえない、とは思ったんだけど……新聞にテレビ、それ以外にも自力で手に入る情報を全部確認してみたら、どうやら本当らしかった。

ちなみに、建物の火事については……原因は不明らしい。武器の開発室から出火したせいで、可燃物や爆発物に燃え移ったりしたのがあれだけの大火事に繋がったらしい。でも、自動制御の防災機能が全部停止していたことが調べで分かった。それに肝心の、どうして開発室から火が出たのかは、結局分からないそうだ。
身元は不明だし、相手からすれば、意味の分からないことを言うこともあって、当然、初めのうちは俺が犯人じゃないかって疑われた。事情聴取されたり、いきなり病院に連れて行かれそうになったり、今度は怪しげな嘘発見器にかけられそうになったり大変だったけど……なんとか俺の言っていることは嘘じゃないって信じてもらえた。

かばってくれたのは葛城さんだった。

葛城さんっていうのは、俺がいた建物……「日本ＩＳ技術開発研

究所・通称『葛城研』」の主任の人で、マユのお父さんで……見た目はだらしないオッサンだけど、かなり偉い人らしい。研究所も政府直属の研究機関ってことで、すごい重要な場所みたいだ。
葛城さんは、俺の言うことを信じてくれて、頼る当てのない俺の面倒をずっと見てくれた。それにも色々理由があって……大きな理由の一つは、俺が動かしたあのパワードスーツ……『ＩＳ』だった。

『ＩＳ』っていうのは、正式名称だと＜インフィニット・ストラトス＞っていう飛行型のパワードスーツ。宇宙進出に望みをかけて作られたらしいんだけど……戦争がしたい最低な奴らはどこにでもいるみたいだ。ＩＳはその性能を『兵器』として使われるようになって……結果として今は『スポーツ』として、各国の威信をかけて取り組まれているらしい。
俺のいた世界だったら、「戦争するのはもう金もかかって嫌だから、モビルスーツは兵器じゃなくてスポーツ用にしましょう」ってところか……？　モビルスーツでプロレスだなんて、きっと「頭部を破壊されたら失格」とかいうルールができるんだろうな。
どうして『スポーツ』なのかって？　実は……ＩＳには、『兵器』としてはとんでもない欠陥があった。なんとこれ、「女性じゃないと使えない」。そのせいで、女性の地位は飛躍的に向上し、この世界はどこでも「女尊男卑」の風潮。ここまで聞いたところで、俺の頭は一度パンクしそうになった。

女性にしか使えないって言ったのに、じゃあ俺の動かしたアレは？

それが納得できなくて聞き返したけど、返ってきた言葉は「分からん」の一言。俺と同じ日にＩＳを動かした男がいるらしいけど、こんな例は世界中どこにも無かったらしい。
それどころか、俺が動かしたＩＳ『イグナイテッド』は、女性でも動かせなかった『欠陥中の欠陥機』で……パソコンでデータを取

れるだけ取れるようにして、後は倉庫にうっちゃってた、いわゆる出来損ない。でも、ＩＳの中心部分のコアは動いたままで、後で確認したら、追加装備の設計に特殊装甲の形成とか、勝手にしてたそうだ。設計された装備の製造は、研究所が急ピッチでやってくれた。

そういう訳で、俺はＩＳを動かせるって理由でこの国……日本の政府の人たちに、国籍とか戸籍とか、身分証明になるものをすぐに発行してもらえた。国のお偉いさんにとって、自国所属のＩＳ操縦者が一人増えるだけでも大きな力になるから、なんとしても囲い込んでおきたいってことみたいだ。ＩＳのコア自体は登録されたものだから、自分の国のものだって言い張れるし。外部にも俺の情報はあまり出していないって話だ。

それで国の研究所の責任者としては、データを取るのと監視に都合がいいからって言って、葛城さんは俺を研究所に置いてくれたんだ。

『なあに、安心しろ。お前さんがそれを動かせる限り、誰も下手に手出しはできないさ。
それに、お前さんがマユを救ってくれたんだ。これぐらい……あの子の親としてさせてくれ。マユもお前さんのことを気に入ってるからな』

笑って言ってくれたその言葉が、とても嬉しかった。

それからは、１ヵ月以上の研究所での生活。ＩＳとかこの世界のことを勉強して、実験のためにＩＳを動かして、葛城さんの子ども……マユと遊んで。お母さんは、早くに亡くしたそうだ。マユは俺を見つけると飛んでくるから、空いている時間はほとんど、マユと一緒にいた。二人で料理をしたり、テレビを見たり、動物園に連れて行ったり……戦争がないってことは本当に平和で、まるでオーブに戻ったような時間が続いた。

こんなに幸せでいいのかって、初めのうちはずっと思ってたんだけど……マユに言われて、俺は自然に笑えるようになってたことに気付いた。誰だって、自分の大事な人には幸せでいてほしいって言われて……今の生活を、受け止められた。

もちろん、帰るつもりがないわけじゃない。まだあの世界でも、俺のできることがあるはずだって、はっきりと分かった。戦争のない、平和な世界の大切さはここで暮らしていて、あらためて感じた。

……俺は戦争を無くすために戦う。それには、誰かにすがらないで、自分で答えを選ぶことをしなきゃって、思えるようになったんだ。

……けれども、帰る方法は全然見つからなかった。葛城さんでも、俺が元の世界に帰る方法は、さっぱり分からないって言ってたし……

それに、そのまま研究所暮らしをしていられるわけじゃなかった。俺は公立ＩＳ学園の入学を決定させられたんだ。しかも半強制。

ＩＳ学園は、日本にあるＩＳ操縦者の養成機関で、世界の各国から生徒が集められて、候補生として勉強をする場所……だそうだ。

まさかアカデミーを出た後に、また学校に逆戻りなんて思わなかった。けど、国にも建前ってものがあって、ここに入学させないと政府としても面倒なことになるらしい。卒業後もうちの国でよろしくって偉そうな人たちが頭を下げている光景は、スポーツのスカウトそっくりだった。

それで俺は、今日からは学校での寮生活が決定していた。マユと離れるのは寂しいけど、ＩＳ学園は全寮制だから仕方ない。居候生活も、結構心苦しいし。

とにかく俺は、目の前の明日を精一杯生きるだけだ。それが約束なんだから。

失った過去も、今ある現実も、その先の明日も……大切なもの全てを、守ってみせる。

みんな見ててくれ……！！　俺は今度こそ……！！

◇

そうやってＩＳ学園に勇んでやって来たのが、ほんの少し前のこと。

さっきまでの真面目な話はどこへやら……今の俺は校門の前でプレッシャーに負けて、頭を抱えたパンダな状況だ。

ええい！　このままここに突っ立ってても、埒があかない！

頭から手を離して、貝殻の欠片を通した首飾りを握りしめる。ステラにもらったものを模した、俺のＩＳ『イグナイテッド』の待機状態だ。

……ステラ、俺に力を貸してくれ。

ほんの少しの間目を閉じて、よし、覚悟完了。意を決して、足を踏み出す。

それに、希望はある。

俺と同じ日に、この学園の入試でＩＳを起動させた男子。

そいつと一緒なら、きっとこの現状から抜けだせる。

視線の集中砲火にざわめきの網をかいくぐって、俺は教室に向かって歩き出した。

「えーっと、１年、１組……あった、ここだ」

俺のクラスは１年１組。扉は残念なことに閉まっていた。扉の開く音で、確実に視線がこっちに向くから嫌だったのに……はあ、しょうがない。

なるべく音を立てないように開けたけど、教室の中にいた女子が何人か俺に目を向けた。

「……あれ？　男子が……二人？」

誰かがそう言ったら、教室中の目が俺を捉えてざわざわと困惑した声が覆った。

でも俺はそんなこと気にならなかった。俺の視線の先には、椅子に座って、文字通りに身を縮めている男子がいたからだ。

間違いない。俺と同じパンダ……じゃない、男だ。自分のことで手一杯なのか、まだ俺に気づいていない。気持ちは痛いほどよく分かる。

教室に入ったら、ざわめいていた教室は水を打ったように静かになった。コツコツという足音だけが響く教室のど真ん中、最前列の席へ。

「良かった。同じクラスになれたんだな」

「え……？　だ、誰だ？」

俺に向けられたのは、困惑と驚愕の入り交じった表情。でも、すぐにそれはほっとした、安心の表情に変わった。同じ存在を見つけた安心感が、身をまとっていた緊張を急速にほどいていく。

「男子……俺以外の……！」

「ああ。俺、シン。シン・アスカっていうんだ。よろしく」

「あ、俺は一夏。織斑一夏だ！　よろしくな！」

そして交わされる硬い握手。次の瞬間、割れるような……

「「「きゃあああああぁぁぁぁーーーーーっ！！！！」」」

本当に窓ガラスが割れるんじゃないかって思えるぐらいの、悲鳴にも似た叫びが教室を振るわせた。

「男子！　嘘！？　何で二人！？」

「やった！！　神様このクラスに入れてくださってありがとうございます！！　来年のお賽銭は奮発して５００円入れます！！」

「男の熱い友情！！　今年の夏コミはこの二人で決まりね！！」

きゃあきゃあとはしゃぐ女子の集団。他の教室からも、何事かと人がわらわら集まってきた。おいおい……さっきより状況が悪くなってるぞ……

真剣に教室外への脱出も考え始めたところで、都合よくチャイムが鳴った。女子は全員クモの子を散らしたみたいに去っていく。助かった……

「席、隣みたいだな。改めて、これからよろしくな」

一声かけて席に着くと、一夏も笑ってそれに答える。

一夏はかなり気さくな性格みたいだ。良かった。これなら打ち解けるのもすぐだろう。

「俺のほうこそ、男子一人で心細かったから助かった。あ、呼ぶときは一夏って呼んでくれ」

「ああ、俺もシンでいいよ」

軽い会話を交わすけれど、それもすぐに緑色の髪の女の人が入ってきて終った。

……あれ、試験の時のあの人だ。副担任の山田真耶って自己紹介したから……先生だったんだな。てっきり生徒だと思ってたんだけど。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」
「……」

可哀想なことに真耶先生に反応する声は全くなかった。俺も反応してあげたかったけど……背中に感じる視線がそれを妨害する。
正直、甘い考えだった。男子が二人なら、少しはこの視線の雨も納まるんじゃないかって。そんな単純じゃなかった。
珍獣が二頭に増えれば、それに伴って視線の質が二倍に……つまりはパンダの抱き合わせだ。周りのお客さんは大喜び。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

ここは学校の教室じゃなくて、作戦前のブリーフィングルームの間違いじゃないのか？　俺の知っている教室とは、緊張感がまるで違った。余裕が、ない。
一夏も俺と同じみたいで、ちらりと目を窓側に向ける。目が合ったその女の子はぷいと顔をそむけ、心なしか一夏は肩を落としていた。知り合いか何かか？

「えっと、次は……シン・アスカくん。自己紹介お願いしますね」
「は、はい！」

もう自分にお鉢が回ってきた。ヤバい、何も考えてない……
振り向いて教室を見渡す……視線が痛い。下手なことを言うわけにもいかないし、逆に何も言わないのも問題ありそうだし……

「え～……し、シン・アスカです。一年間よろしくお願いします」

そう言って頭を下げる合間にも、脳をフル稼働させて次の展開を

模索する。

何をしゃべれば良い？　ありきたりだけど趣味についてか？　しまった……趣味なんて読書ぐらいしか言えないぞ。な、なら得意な事は……ナイフ戦か？　いや、物騒すぎて確実に周囲は引く。他には……モビルスーツの操縦なんて言えるわけないだろ！！　まずいマズイ不味い……！

「え～っと、アスカくんは皆さんより年が一つ上ですけど、特例でこの学校に入学することになりました。皆さん仲良くしてくださいね」

にっこり笑って付け加えてくれた山田先生。助け舟、ありがとうございます。

「年上なんだ～。あこがれちゃうな～」
「年上！？　ならシン×一夏より、一夏×シンよね……」

女子の反応の声が、俺に再考の猶予をくれる。年上……そういえばそうだっけ。よし、これを取っ掛かりにすれば！！

「えっと、俺は皆より年上だけど……ぜんぜん気にしないで、俺のことは気軽にシンって呼んでください！　敬語もいりません！　とにかく、よろしくお願いします！！」

なんとかここまで言って、勝手に席に座った。もうこれ以上は無理だ。女子はまだ不満そうだし、山田先生はオロオロしてるけど……申し訳ありません、無理なんです。

はあ……悪いけど、まともな自己紹介は一夏に頼もう。

「……織斑一夏くん。お願いします」
「は、はい！」
お、一夏の順番か。どうだろう、俺より上手くできるのかな？
「えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」
とりあえず最初に自分の名前を言う。問題は次からなんだけど……
一夏を見上げてみれば、まだ緊張した様子で……次のセリフが出てこない。
少しの間を置いて、口を開いて出た言葉は……
「え～……以上です」
数人の女子が、がたたっと机を揺らした。そんな期待するなよ！
あれ凄くツラいんだぞ！？
心の中で一夏のフォローをしていると、ふと、立ち尽くしている一夏の背後に誰か近づいて来たのに気付いた。その人は手にしていた出席簿で一夏の頭を叩く。すさまじい速さと正確さ。
「げえっ、関羽！？」
「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」
まるでコントのようにスパスパ頭を叩かれる一夏。息もぴったりだ。
凛とした、って形容するのが一番合うだろう。黒のスーツを着こなして、鋭い目をクラスに向けるその人のまとう雰囲気は……軍人のそれと全く同じだった。
女の人は織斑千冬って名乗った。織斑……ってことは一夏の親戚

なのか？　知り合いっぽいし。まあ、それは後で聞いてみるとして……

「逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

やっぱり軍人だろ、この人。アカデミーの教官たちと言ってることがよく似てる。

そんなことをぼんやりと思っていたら、背中から強烈な歓声が俺を襲った。

「キャアアアーーー！千冬様、本物の千冬様よ！」

「私、お姉さまのためなら死ねます！」

歓声は衝撃って言っても良いぐらいで……な、何なんだよコレ！？　俺の知ってる学校と全然違うぞ！！　ラクス・クラインのコンサート会場！？

羨ましい事に、気圧されて身をすくませている俺とは違って一夏は落ち着いていた。

「で？　挨拶も満足にできんのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は――」

「学園では織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

落ち着いてはいたけど、何度も頭を叩かれていた。理不尽だ。これは羨ましくない。

そんなやりとりをしていると、ようやくチャイムが鳴った。そんなに時間がたったはずじゃないんだけど……

ショートホームルームでこれだけの密度かよ……この先が思いや

られる……

ため息が出たけど、それもチャイムの音でかき消された。

◇

「ゴメン。年、一つ上だったのか。ホントに敬語なしでいいのか？」
「いいっていいって。気を使われるのも嫌だし」
「そう言ってくれると助かるよ……なにせ二人だけだもんな……」
「ああ……だよな……」

一時間目が終了した休み時間。俺達は二人して、教室の雰囲気に呑まれつつあった。それはそうだろう？　俺達の見物に来る生徒が、他の学年からも来ていて廊下まであふれてるんだし……

「ちょっといいか」
「え？」

そう言って一夏に近づいてきたのは、窓側に座っていたさっきのポニーテールの女子だった。なんだか不機嫌そうな顔で、雰囲気も硬い。

「……箒？」
「やっぱり一夏の知り合いか。誰なんだ？」
「ああ、幼馴染の……」
「篠ノ乃だ……こいつを借りていくぞ。廊下でいいな？」
「あ、でも……」

俺の方を横目で見る一夏。猛獣の檻に一人残していくようなことが心配だったらしいけど、知り合いがいるなら邪魔をするのも悪い

だろう。
「俺のことはいいから、行ってこいよ」
「ああ、わりぃ……」
二人は廊下に出て行った。後にぞろぞろと女子を引き連れて……視線の半分ぐらいはそっちに誘導された。ふう、これで少しは……
「あのっ、アスカくん！！」
「へ……？　うわっ！？」
安心した途端に、俺の机の周りは女子に包囲されていた。さっき篠ノ乃が一夏に声をかけたのがきっかけで、皆が後に続けといわんばかりにこっちに寄ってきたみたいだ。
「ねえねえ、ＩＳを動かしたのはいつ！？　どうやって！？」
「趣味は！？　特技は！？　好みの女の子のタイプは！？」
「身長・体重・座高に血液型は！？」
「同じ学年だけど、先輩って呼んでもいいですか！？」
「男の子に興味は！？　攻め、受けどっちが好き！？」
質問が機関銃のように浴びせられる。当たり前だけど、全部に答えられるわけ……というかいっぺんに言われたら……
「ご、ゴメン！！　一斉に質問されても答えられない！！」
「あ、そっかー。じゃあ、アレ用意しなきゃ！」
そう言うとみんな大人しく席に戻っていった。ん……？　アレって何だ？
首をひねっていたらチャイムが鳴って、一夏と篠ノ乃が帰ってき

てた。篠ノ乃は相変わらず不機嫌な顔つきのままで、一夏はそれを見て首を傾げるばかりだった。
後で発覚したんだけど、アレとは分厚い質問表のことで、俺と一夏はそれを書かされるはめになった。勘弁してくれよな……

◇

「悪いな、シン……いきなり迷惑かけて……」
「気にするなよ。まあ、電話帳と間違えた、は流石にマズイと思うけど……」

今度は二時間目終了後の休み時間。机にうなだれながら一夏はさっきのことを謝ってきた。
というのも、一夏は授業の予習を全くやっていなかったらしい。必読のはずの参考書を、電話帳と間違えて捨てたというのが原因で。それに、正直にそのことを話してしまったせいで、また織斑先生に頭を叩かれていた。
そういうわけで、参考書の再発行までは、俺と一緒に参考書を使うことになり……ついでに、授業の補修も俺と受けることになった。実は俺も、参考書はたいして頭に入っていなくて……ＩＳの動かし方に整備の仕方、ＩＳ戦闘の戦術とか……そういうのばっかり勉強していたせいで、他のことはさっぱりに近かった。
……俺だって昔と違って『ＩＳなんて、実際に動かせりゃそれで良い』なんて思っていないさ！　ただ、『他は……別に後回しでもいいや』って思ってただけだ！

「と、とにかく放課後はがんばろうな！　きっとなんとかなるって！」
「そ、そうだよな！」
「ちょっと、そこのお二人、よろしくて？」

「ん？」
「へ？」

無理に二人で作り笑いをしていたら、長い髪をした金髪の女子が近づいてきた。手を腰に当てるその姿は、どことなく品がある……気がする。

「また一夏の知り合いか？」
「いや、知らないけど……」
「わたくしを知らない？　このセシリア・オルコットを？　イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを？　やはり男というのは……二人もいるとは聞いていませんでしたけど……まあ、程度が知れますわね」

その口ぶりは、知らないという俺達をあざけるようで、気持ちの良いものじゃなかった。なんなんだよコイツ……代表候補生とか言って……あれ？　代表候補生って何だ？
目の前の女子に聞くのも癪にさわるから、隣の一夏に聞くことにする。

「「なあ、一夏（シン）」」

そう言うと俺達は顔を見合わせた。きょとんとした顔で。

「「代表候補生って何？」」

きれいに声が重なった。ついでに、クラスの女子が数人ずっこけた音も聞こえた。

「「……へ？」」

間の抜けた声もきれいに重なった。どうやら俺達はお互いに、最低限知らなきゃいけないことも知らないぐらい勉強が足りないらしい。今日から真面目に勉強しよう……心に固く誓った。

セシリアとかいう女子はわなわなと肩を震わせて、机を勢いよく叩く。

「あなた方っ、本気でおっしゃってますの！？」

「おう。知らん」

「自慢げに言うなよ……」

言い訳は無駄とでも言うように、堂々と言い放つ一夏。変に見栄を張らないだけ立派というか、バカ正直というか……あんまり人のこと言えないけどさ、俺も。セシリアも呆れてぶつぶつ何かを呟いていた。

「で、代表候補生って？」

「国家代表ＩＳ操縦者の、その候補生として選出されるエリートのことですわ。……単語から想像したらわかるでしょう」

「そういわれればそうだ」

一夏はさらりと会話を流していく。というか、代表候補生ってそれだけのことだったのか。

「そう！　エリートなのですわ！」

俺たちの様子にお構いなく、また機嫌よくしゃべりだした。エリートなのを殊更強調したいらしい。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくす

ることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

流石にうっとうしくなってきた。でも、相手をしないとうるさいだろうし、したらしたで面倒くさい……まったく。

「そうか。それは俺たちラッキーだ」

「……あなた方、馬鹿にしていますの？」

「別にそんなわけじゃないさ」

俺も一応の否定はしたものの……一夏まで、軽く皮肉混じりの返答になってきた。

「まあ、わたくしは優秀で優しいですから……ＩＳのことで分からないことがあれば、そうですわね、泣いて頼まれればあなた方に教えて差し上げないこともなくてよ？　何せわたくし、入試で、唯一！　教官を倒したエリート中のエリートですから」

「あれ？　俺も倒したぞ、教官」

「あれって倒せば合格じゃなかったのか？」

「は……？」

そう言えば入学が決定した翌日には、試験ってことで研究所で模擬戦をした。相手はあの山田先生で……全然向かってくる気配がないから、こっちから仕掛けて、組み倒してナイフを首に当てて終了。何でこっちに来ないのか不思議だった。教官なら、避けられて壁に衝突して沈黙、なんてドジな事もしないと思うのに。

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

動揺を隠しきれない様子で、セシリアが言った。そんなこと俺達

に聞かれてもな……

「女子ではってオチじゃないのか？」

一夏が答えたら、ピシッと何かに亀裂が走る音がした。あ、たぶんコレ危険信号だ。

「あなた方も教官を倒したと、そういうことですの！？」

予想した通り。ヒートアップして顔を真っ赤にしながら、セシリアがこっちに詰め寄る。今にも掴みかかりそうな雰囲気だ。

「お、落ち着けよ。な？」

「そうそう、一度落ち着いたほうが……」

「これが落ち着いていられ――」

授業開始のチャイムの音が鳴って話を遮った。今の俺達には鐘の音が福音に聞こえ――

「また後で来ますわ！　逃げないことね！　よくって！？」

第一ラウンド終了のゴングだった。三時間目（インターバル）の後には、もう一度戦いのゴングが鳴る。

「シン……審判はどこだ？　降参だ、タオルを投げ入れてくれ」

「逃げるなって言ってたから……そんなことしたらリングの外で乱闘だな。きっと」

お互いの考えを読めたわけでもないのに、俺達の口からは打ち合わせたかのような言葉が出た。二人で顔を見合わせて、ため息。

「「はあ……」」

今度のため息は、教室に入ってきた織斑先生の声にかき消された。

◇

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

三時間目の教壇に立つのは織斑先生みたいだ。山田先生までノートを取り出してるんだから、大事な授業なんだろう。へっへーん、これならばっちり予習してあるぞ！

内心でガッツポーズを取る俺。背筋を伸ばして、さあ授業――

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとな」

クラス対抗戦に、代表者？　織斑先生、そんなの後回しにして授業してよ、授業。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

俺の思いも虚しく、代表者についての説明を丁寧にする織斑先生。普通の学校でいう学級委員長ってことか。まあ、誰かがやってくれるさ。

「はいっ。織斑君を推薦します！」
「私もそれが良いと思います！」

一夏を推薦する声が女子からあがった。隣の一夏の顔をうかがってみれば、心ここにあらず、といった顔。気付いてないな、コレ……

「一夏、お前の名前呼ばれてるぞ」
「……は？　ちょっ、俺！？」
「自薦他薦は問わないぞ。他には？」

一夏は慌てて席を立つけど、流れはこのまま一夏で決定だろ――

「はいっ！　私はアスカ君派ですっ！！」
「そうそう！　アスカ君の方が良いと思いますっ！！」

……流れが変わった。というより、分断した？

「え～？　私は織斑君の方が良いな～。なんだか優しそう」
「いや、ここはアスカ君じゃない？　あの赤い目、かっこいいよ～」
「私は……織斑君の方がタイプかも」
「いっそのこと二人まとめては、ダメ？」

クラス中がきゃあきゃあ騒ぎ出した。ていうか俺もかよ！？

「待ってくれっ！　どうして俺も！？」

立ち上がって振り向けば、期待やら好奇心やらの視線が俺を貫いた。恐る恐る隣の席の子の顔を見れば……『ごめんなさい、でも、私は織斑君派なの。あなたの気持ちには応えられないわ』みたいな

顔をして、目を逸らしていた。いや、俺にはそんな気持ち無いから。
後ろの席の子は……『大丈夫ですっ！　私はアスカ君派ですっ！』っていう顔でにっこり笑い、親指をぐっと立てていた。えっと、全然大丈夫じゃないから。

「静かにっ！　織斑、アスカ、二人とも邪魔だ、席に着け。推薦は二人、投票で良いな？」

織斑先生の容赦のない一声。一夏と二人で待ったをかけようとしたその時、俺達より先にセシリアが声を張り上げた。

「待ってください！　そのような選出認められません！」

ああ、俺も認められない。もっと言ってくれ。ていうか、あんたが代表になってくれ。

「大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！　このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

……どういう意味だ、それ。

「物珍しいという理由だけで極東の猿にするなんて、わたくしこのような島国にまでサーカスをしに来たのではなくてよ！」

……おい。なんだよ、その言い方。

「いいですか！？　クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

おい。分かったからもう良いだろ。静かにしてくれよ。
「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐えがたい苦痛で――」
ブチッ！　コイツ！　いい加減にしろよ！！
「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」
「なっ……！？」
「そこのエリート様だったら、さぞかし立派な料理ができるんだろうな。あんたは」
「なっ！？」
堪忍袋の緒が切れた。後ろをにらみつけてやれば、セシリアは顔を真っ赤にして怒り狂っている。
「あっ、あなた方！　わたくしの祖国を侮辱しますの！？」
「エリート様のくせに、そんなことも分かんないのかよ？」
「なっ、なんですって！？」
一夏ははっと、言い過ぎたって顔をしていたけれど、俺の方は売り言葉に買い言葉。勢いは止まらなかった。
「お二人、決闘ですわ！」
セシリアが思いっきり机を叩いた。上等だ。相手になってやる。
「おう。いいぜ。四の五の言うより分かりやすい」
「ふん！　やってやるさ！！」

一夏も覚悟したようだ。もう引くに引けない状況だから当然か。
「決闘は二対一、わたくし一人ですが……まあ、ちょうど良いハンデでしょう」
「そうだな、二対一なら負けても言い訳になるもんなあ？」
「っ！？　あなた、まだ言いますのっ！？」
「いい加減にしないか！　……話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜日。放課後、第三アリーナで行う。三人とも用意しておくように。それでは授業を始める」

織斑先生が手を叩いたところで、話が終った。
さっきまでクラスを包んでいた熱気も、沸騰していた俺の頭も、授業が進めばすぐに収まっていった。

……冷静になれば、言い過ぎた。この国の人を馬鹿にするようなことを言われて、我慢の限界で、俺達二人とも口が滑った。ケンカ腰で相手に突っかかるのは良くないって、艦で学んだはずなのに……
よみがえるアスランとの確執の日々。お互いに自分のことを話さず、相手の言うことを聞かず、衝突し、すれ違い、挙句の脱走、追撃。そして――
ああ、悪夢だ。そんなことはもうゴメンだって思ったのに……
……まあ、仕方ない。話して聞く相手じゃなさそうだし。

それにイギリス代表候補生だかなんだか知らないけど、そんな相手に負けるぐらいじゃ……明日を、大切な全てを守るなんてできやしない。
勝ってから、セシリアにちゃんと謝るとしよう。
そうだ、後で一夏にも謝らないと……ケンカを売ったのも半分以上は俺なんだし。

いや、今は目の前の授業に集中しなきゃ……

黒板の板書が、気付けばとんでもない量になってる。慌てて俺はノートにペンを走らせた。これからまた、大変そうだ。

第一話『明日の向かう先と、学園生活の始まり』（後書き）

どうも、ここまで読んでいただきありがとうございました。
誤字・脱字は是非ご指摘ください。
また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくてひびが入ってしまいます。
お気軽にご感想をください。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

第二話『本当の決闘は明日！』（前書き）

※以下の事にご注意ください。

・勝手な都合により掲載が大幅に遅れました。この場を借りて謝罪します。すみませんでした。

・相変わらずのご都合、急展開です。

・今回特に期間が開いたため、違和感が生じる箇所があるやもしれません。

第二話『本当の決闘は明日！』

「うう……い、意味が分からん……シンは分かるのか？」
「なんとなく……ってぐらいかな……」

入学式の日。放課後になり、俺と一夏は机に沈没していた。
一日の勉強もあんまり理解できるものじゃなかったうえに、慣れない環境の追い打ち。女子はみんな俺達について来るし、こっちを指差して何か言ってるし……現在進行形で。

「あ～、まるでウーパールーパーだな」
「ウーパー……？　なんだそれ？」
「昔流行った珍獣の名前。どんな動物かは知らん」
「だったらパンダの方が分かりやすくないか？」
「パンダ……どっちにしろ珍獣だな」

珍獣からは脱却出来そうになかった。しばらくは透明な檻の中の珍獣さんか……
レイ、助けて。俺達パンダになりたくないよ。ウーパーなんとかも嫌だけど。

「織斑くん、アスカくん。良かったです。まだ二人とも教室にいたんですね」

顔を上げれば、そこに立っていたのは書類を手にした山田先生だった。

「はい？」
「どうしたんですか？」

「えっとですね、織斑くんの寮の部屋が決まったので……はい、これが番号と鍵です。それに、アスカくんも」

ああ、鍵は今日受け取ることになってたっけ。俺達二人はそれぞれ、部屋の番号が書いてある紙に鍵を受け取った。全寮制ってのは聞いてたし、俺も慣れてるから問題ない。ただ……部屋の番号が俺と一夏で違うのが気になった。男二人で相部屋、じゃあないのか？

「俺の部屋、決まってないんじゃなかったですか？　一週間は自宅から通学って話でしたけど」

「今日から寮に入るのは決まってたけど……一夏と同じ部屋じゃないんですか？」

二人で山田先生に質問をぶつけると、先生は少し言いにくそうに俺達に説明を始める。

「織斑くんの方は、寮に入れるのを最優先にしたみたいで……用意していた個室はアスカくんの方に割り当てられたので、しばらくは織斑くん、相部屋で我慢してください」

説明を受けて納得はしたものの、女子との相部屋ということで、一夏は少し戸惑っているようだった。なんで俺の方が個室なんだ？

女子を一人個室に入れれば……

そう思って口を開きかけたら、山田先生がヒソヒソと声をひそめて言ってきた。

「アスカくんの事はまだ、あまり政府は情報を出したがらないみたいで……個室になったのも、そういう理由なんです。少しだけ、ガマンしてください」

言ってしまえば正体も身元も不明だった俺に関しては、政府も慎重になっているみたいだ。表立って出てた情報も、ほぼ全部一夏のものだったしなあ……そのせいで、一夏の方は大分面倒なことになってるらしい。身代わり羊みたいで、ちょっと悪い気がする。

「なんか俺だけ個室って悪いな。ゴメン」

「別にシンのせいじゃないだろ？　そんなこと言わなくていいって」

手　をひらひらさせながら一夏が答える。気の良い奴だな、ホントに。

「で、荷物は一回家に帰らないと準備できないですし、今日はもう帰っていいですか？」

「あ、いえ、荷物なら――」

「私が手配をしておいてやった。ありがたく思え」

そう言って威圧感たっぷりに登場したのは織斑先生だった。そのプレッシャーがあまり俺の方に向いていないのは幸いだけど、一夏の方は悲惨だ。同情する。

「ど、どうもありがとうございます……」

「まあ、生活必需品だけだがな。足りないものがあったら、アスカ、お前が貸してやってくれ」

「はい、了解です」

「……敬礼はいらん。ここは軍隊じゃない」

「えっ！？　あ、すみません」

気付いてみれば右手を上げたあのポーズ、勝手に体が敬礼をしていた。ちょっと周りを見てみたら、皆が不思議そうな顔をしている。いけない。この人の雰囲気、軍の人たちそっくりだから……気をつ

けよう。あんまり良い顔してないし。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。大浴場は……今のところ二人は使えません」

「え、なんでですか？」

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あー……」

自分の言ったことの意味に気付いて、がっくりと一夏がうなだれた。周りが女子だけって大変だ。風呂に入るっていう当たり前の事にも、気を使わなくちゃいけない。

「えっと、それじゃあ私たちは、会議があるので、これで。アスカくん、織斑くん、道草食わないで、ちゃんと寮に帰るんですよ」

食いませんよ。食べてるところを見物されて指さされるのがオチですから。教室を出て行く二人の背中に、心の中で呟いた。設備の見学は……明日アリーナと整備室の場所だけ確認しておこう。後はまあ、おいおいで構いやしないさ。

「千冬姉も、自分のプレッシャーを分かってくれよな。敬礼の一つや二つも自然と出るって、なあ？」

「え？　あ、うん。織斑先生、ちょっとおっかなくてさ」

さっきの敬礼の事を冗談めかして、一夏が笑った。つられてこっちも笑うけど、やっぱり敬礼するのは不自然だったかな……いや、あれぐらい、大丈夫だろ。

「じゃあ、部屋に行ってみるか。後でシンの部屋にも行ってみていいか？」
「もちろん。何かあったら俺の部屋に来てくれよ。相部屋だと、大変だろうしな」
「悪い、ホント助かる」

回りのはしゃぎ声に反応する気力も、とっくに尽きている。二人で席を立って荷物をまとめて、外に歩いていった。せめて部屋だけでも安息の地であってほしいと思いながら。

◇

部屋に入ってみれば、艦にいた時よりはるかに豪勢な様相だった。シャワーも付いてるし、キッチンまであるし、ベッドは大きいし……ホントに一人部屋？
荷物を部屋の隅に置いて、ベッドにそのまま倒れこんだ。疲れた体をベッドのフカフカが抱きとめてくれて、とても気持ちがいい。
「うぇ……疲れた……」

この世界に来てから、久しぶりに慌しい一日だった。最初の方のゴタゴタさえ無ければ、マユと一緒にのんびりと暮らしてただけだったから、それも当然か。ああ、そうだ。
制服のポケットから携帯を取り出した。ピンク色の携帯は、オーブにいた時からずっと変わらない。同じマユの写真が入っていて、同じマユの声が聞こえて……それを聞く俺だけが、あの時とは変わっていった。
「はい、マユで～す。でもごめんなさい。マユは今、電話に――」
「マユ……ごめんな、俺」

何度携帯を開いても、何度マユの声を聞いても、笑うことなんてできなかった。いつでもそれは辛いことで、心が苦しくて。思い出すのは楽しかったことなのに。この世界で会ったマユの前では、笑えるようになったのに。

「どうして、お前の前じゃ笑えないんだろうな……」

同じマユなのに、俺が見せられる表情はまるっきり違う。それじゃダメだって、分かってはいるんだ。

俺が守れなかったマユも、今この世界にいるマユも、二人とも俺の大切な人だから。いつか笑ってこの携帯を開けるように。過去と明日を守れるように。

「俺……がんばるからな。だから、マユ……また明日」

そっと携帯を閉じて制服にしまうと、一日の疲れがどっと押し寄せてきた。このままうとうと眠りの世界に……まだ食事も済んでないけど、今日はいいか。

部屋の外からはまだいろいろな声が聞こえたけど、それも気にならなかった。悲鳴のような叫びも、ここじゃあ日常茶飯事なんだろ、きっと。

……でも、何かゴスッという硬いもので頭を叩いたような音も聞こえた。気のせいかな、うん。

◇

それから決闘の当日まではあっという間だった。

連日の女子の包囲網をかいくぐって、俺と一夏はなんとか学園生活を続けられている。人間、慣れれば案外どうとでもなるんだな。問題なし。

授業は相変わらずさっぱりなモノも多いけど、山田先生が放課後の補修をしてくれるから、なんとかなりそうだ。よし、こっちもオッケー。

補修が終ったら、俺はアリーナでＩＳの訓練。まだＩＳを持っていない一夏には、篠ノ之が指導をすることになっていた。篠ノ之のお姉さんはＩＳの開発者だし、教えるには慣れた人の方が良いだろうって話だ。これで完璧。万全の状態で月曜日が……来るはずだったんだけど。

「なあ、箒。ＩＳのことを教えてくれる話はどうなったんだ？」

「……」

「篠ノ之、俺も質問して良いか？　それってどういうことだ？」

「……」

「「目をそらすな」」

事態は深刻。一夏の訓練はほとんど剣術だけで、肝心のＩＳの訓練ができていない。おまけに、一夏は専用機すら届いていない。つまり、戦えない。万全どころか、問題外。

「篠ノ之！　お前が『一夏には私が全て教えるから、任せておけ』って言ったんだろ！　どういうことだよ！？」

「あ……ＩＳも無しに訓練などできないのだから仕方がないだろう！」

「だからって、知識とか基本的なこととか、もう少し教えてくれても良かっただろ！？」

「……」

「「目をそらすなっ！」」

当日まで安心しきっていた俺達は、現状が非常に危ういことになんの疑問も持たなかった。一夏は俺に聞くって選択肢を忘れていたし、俺は俺で自分の訓練に夢中で……

三人とも、二の句が継げなかった。アリーナのピットを、重々しい沈黙が包む。

「こうなったら俺一人でなん「織斑くんっ！　専用ＩＳが届きましたよっ！！」」

「「え？」」

転びそうな勢いで駆けてきた山田先生。その後ろからは、織斑先生も来ていた。ていうか、もしかして間に合った？

「織斑、すぐに準備をしろ。ぶっつく本番でものにしろよ。アスカも早く動け。アリーナの使用時間は限られているんだ」

「え？」

「は、はい」

「敬礼はいらんと言った」

「一夏、この程度の障害は軽く乗り越えてみせろ」

「え、あの――」

「「「早く！」」」

ピットの搬入口が開くと、その向こうには真っ白なＩＳがあった。騎士の鎧、が第一印象だ。俺が始めてＩＳを見つけたときと同じように、コイツも一夏のことを待っているみたいだ。開かれた装甲が、そんなことを思わせる。

「これが――」

「はい！　織斑くんの専用ＩＳ『白式』です！」

「すぐに装着しろ。フォーマットとフィッティングは実戦でやれ、

いいな」
「アスカくんも、早く準備しないとっ！」
「了解です」

一夏も準備を始めたんだ。俺も集中しないと。
一瞬だけ目を閉じて、首から提げた貝殻を握りしめる。瞬間に、全身を灰色の装甲が包んで、次いでフェイズ・シフトの白と青が染め上げていく。
光と共に盾が現れて、それを腕に付ける。盾に刻まれた十字を中心に、一回り大きく展開した。
アリーナの先にいる相手の情報が眼前に映し出される。
――操縦者セシリア・オルコット。ＩＳネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り――
了解。ある程度の下調べはしてきてるから、そこまでは知ってるんだけどな。

「一夏、いけるか？」
「ああ」
「……やっぱり最初は不安か」
「大丈夫だ……って言いたいけど、嘘はすぐばれるよな」

軽く笑う一夏だけど、緊張した声なのはすぐに分かってしまう。俺だって初めてＭＳに乗った時、訓練だったのに手が震えたもんな。緊張するのは、当たり前だ。後ろの三人も、今は明らかに不安な表情が見て取れる。

「安心しろよ、一夏」
「え？」
「俺が、お前を守るからさ」
「あ、ああ……」

そうさ、守ってみせる。こんなところで負けさせやしない。負けたりしない。

「フォーマットとフィッティングの時間は俺が稼ぐ。一夏はそれまで攻撃は控えてくれ。足を止めるなよ？　動きまわらないと、良い的にされるからな」

「お、おう。箒、行ってくる」

「あ……ああ。勝ってこい」

黙ってうなずく一夏。ゆっくりゲートが開くと、相手は俺達を悠々と待ち構えていた。

「あら、逃げずに来ましたのね」

身に付けるのは青いＩＳ『ブルー・ティアーズ』。装備はレーザーライフル《スターライトｍｋ？》。特殊装備は機体名と同じ自立起動兵器……ドラグーンと同じ、か。セシリアの装備は中距離に特化している。一番厄介なのは、あの自立兵器だ。二人同時に相手をするのも苦じゃないだろう。

「最後のチャンスです。今ここで謝るのなら、二人とも許してあげないこともなくってよ」

「悪いけど、謝るのは俺達が勝った後だ」

「それに、そういうのをチャンスとは言わないな」

「そう、残念ですわ。それなら――」

セシリアがこっちに銃口を向けた。もう試合は開始されているから、撃ってこられても文句は言えない。被ロックオンを確認、狙いは――よし、俺のほうか。

「お別れですわね！」

閃光が走り、空を裂いた。左肩の辺りを狙っていたみたいだけど、それをかがみながら避ける。体を上げながらライフルを手にして、それをセシリアに向ける。

「一夏！　散開するぞ！」

「おうよ！」

二人で左右に分かれ、狙いを分散させる。なるべくこっちに射撃が来るように、ライフルを突きつけてけん制する。

「二手に分かれても、わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの前では無駄ですわ！　さあ、仲良く円舞曲（ワルツ）を踊りなさい！」

来た。四機のブルー・ティアーズ――言い換えると、ビットって言うらしい――が飛び立ち、一斉射撃を開始する。それもほとんどが一夏の方を狙っている。フィッティングの済んでいない一夏の機体じゃ避けきれずに、何重にも被弾していく。

「くっ！」

「一夏！」

「よそ見している暇はなくてよ！」

一夏の援護に入ろうとした俺の前を、レーザーが横切っていった。にやりと笑うセシリア。銃口は俺に向いたままで、自分にも一夏にも近づけるつもりはないらしい。それでも、構ってなんていられるか。セシリアに背を向けて、スラスターを加速させる。ライフルの

射撃を旋回しながら回避、ビットの群れにライフルを撃って、距離をとらせた。

「武器は何かないのかっ！？」

「装備、装備はっ！？　近接ブレードだけかよっ！？」

射撃武器も存在しないらしい。ビットにはほとんど対応する術がないわけだ。なら――

「ビットのけん制は俺がやる！　一夏は被弾しないように、セシリアだけ見ててくれ！」

胸部のバルカンをビットに発射。直撃することもなく、すいと避けられた。ふわりと浮いたビットの照準が一夏から俺に変更される。引きつけられれば、十分だ。

「やってみせるさ、俺はぁっ！！」

◇

試合開始から三十分近くが経過した。

「――二十七分。持った方ですわね。褒めて差し上げますわ」

「そりゃどうも……」

正確には二十七分らしい。セシリアの嘲笑に、一夏は力なく答えた。

一夏のエネルギー残量は大分削られたけど、この程度なら十分に持つはずだ。俺も被弾はほとんどないし、ビットの動きもドラグーンに比べればたいしたことない。一夏のＩＳのフィッティングが完

了すれば、このまま勝てる。

「特にあなたはしぶといわね……でも、逃げてばかりでは勝てないのは分かっていて？」

「ふん、逃げてただけじゃないさ」

セシリアは周囲に浮かぶビットを撫で、余裕を見せながら笑う。こっちが意図的に手数を減らしていることには気付いていないみたいだ。

「さあ、そろそろ閉幕と参りましょう」

ビットが再び接近してくる。四機が俺を囲い込み、レーザーの弾幕を張る。でも、動きがおかしい。俺に当てるつもりじゃなくて、俺が動けないように網を作りあげている。どうして……っ！　そういうことかよ！！

俺がセシリアの目的に気付いた時には、一夏はブレードを構えて相手に突進していた。

隙を見せたのも計算の内だ。

あいつは俺じゃなくて、先に一夏を落とすつもりだ。

「一夏、罠だ！　戻れっ！！」

「――遅い、ですわ」

「――っ！」

笑みを浮かべたセシリア。間合いに入った一夏が距離を取ろうとしたけれど、間に合わない。スカートからもう二機のビットが外され、一夏を吹き飛ばした。爆発が白い機体を飲み込み、光を放つ。ミサイル――しかも直撃だ。

「一夏っ！！」

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機ありましてよ！」

黒煙から、ぐらりと落ちる影が見えた。まだシールドエネルギーは残っているみたいだけど、追撃は確実にもらう。

「邪魔だぁっ！！」

右手のライフルから放たれたビームが、レーザーを撃とうとしたビットの一機を吹き飛ばす。不用意に近づいてきた二機のビットも、左手で抜いたダガーで切り裂き、残りの一機を無視して一夏に近づく――この距離じゃ間に合わない！

「お別れですわ」

銃の先に光が集まる。けれど、漂っていた黒煙を吹き飛ばしたのは、レーザーの光じゃなくて、中から現れた眩い白だった。

その光は一夏の体を包んで、その装甲を形作っていく。壊れていた装甲部分も修復され、曲線は鎧の白を一層引き立てて見せた。でも、その騎士の外見とは裏腹に、手にしていたのは東洋の太刀に似た武装。

「ようやく、終ったのかよ」

「ま、まさか……一次移行！？　初期設定だけの機体でここまで戦っていたって言うの！？」

安堵のため息がもれた俺とは対照的に、セシリアはうろたえていた。

純白の機体『白式』は、ようやくその本当の姿を見せた――これから、俺達の反撃だ。

で、その一夏と言えば……アレ？　俺達を無視してぶつぶつ何か言

ってるぞ。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ……俺だって、守ってみせる」

「……一夏？」

「あなた、何を――ああ、もう面倒ですわ！」

セシリアの機体からミサイル搭載のビットが発射された。右手の刀で一夏はそれを切り捨てて、一気にセシリアの懐に潜り込む。

「おおおおっ！」

その刀身が光をまとって、鋭い一撃が――当たる前に、ブザーの音がアリーナに鳴り響いた。

『織斑一夏、失格――』

「あれ……？」

「はぁ……？」

え？　今、一夏の一撃が入るところじゃ……？　何でだ？

ぽかんとしたまま、その場にいる三人で目を合わせる。俺を含めて、誰一人状況が分かっていない。　当の本人も、頭の上に？マークが浮かんでいた。

『織斑、何をしている。お前は失格だ。早く戻って来い馬鹿者』

織斑先生が、一夏を呼び戻す。俺と一夏は一旦高度を下げて、向かい合った。とにかく、一夏は失格……なのか？

「なあ、一夏。いったいどうして失格になったんだ？」

「俺にもなんだか……とりあえず戻らないと、千冬姉にどやされる」
「悪い……守ってやるって、言ったのに」
「俺のほうこそ、啖呵切っといてこれじゃあな……シン、勝ってくれよ」
「ああ……任せてくれ」

そうだ。試合はまだ続いている。一夏に託された分、しっかり勝ってみせないと。
ピットに戻る一夏を見届けた後、空中で呆けているセシリアに向き直った。

「セシリア！　決着をつけるぞ！！」
「――っ！　そうでしたわね！！」

残った一機のビットが接近してきた。動きはもう見切っている。
バルカンで誘導したところを、ビームライフルで打ち抜いた。爆風が軽く機体を震わせる。

「なっ……！？」

ブルー・ティアーズは全機落ちた。武器のエネルギーも十分。今なら、アレが使える。
イグナイテッドの武装画面を開き、装備メニューを選択する。

――シルエット選択――

呼び出しに応じて、胴体や肩部を染め上げていた青が、炎のような赤に変わっていく。
腰にライフルをマウントして、盾の装甲を取り回しやすいように元に戻す。

背中に追加されるスラスター。それに繋がれた、一対のブーメランと大剣。
それは、相手を両断する絶大な力。
――ソードシルエット・展開完了――
全長を軽く超える大剣を両手に取り、連結させる。高々と頭上に上げ、振り回し、相手に構えなおしたところでビームの刃が現れた。
今の今まで温存しておいた、切り札。イグナイテッドの換装装備『ソードシルエット』。インパルスに酷似したその装備は、陽の光を浴びて赤い姿をより強く輝かせる。
「まさか……戦闘中のパッケージ換装！？　そんなことが！？」
「行くぞっ！」
スラスターを全開にして、ライフルを構えるセシリアに向かって飛び上がる。照準を合わせる暇も与えないで、一気に飛び込みながら大剣を力任せに振り上げた。
「でやあああっ！！」
「っ！？」
反射的に盾にされたスターライトｍｋ？を真っ二つにして、胴体に強烈な斬撃。ビームの刃は装甲をたやすく吹き飛ばして、相手の体に食い込んでいく。残っていたシールドエネルギーをあっという間に削り取り、最後に剣を振りぬいて弾き飛ばしたところで、セシリアのエネルギーは底を突いた。
ブザーの音が決闘の勝利を告げる。俺達の勝ちだ。
『勝者――アスカ・織斑ペア』

「やったぞ、一夏！」
「シン、すごいな今の！　そんな装備あったのかよ！」
「へへっ、反撃用に取っておいたんだ」

ピットに戻って、出迎えた一夏と笑いあう。これで小間使い、奴隷は回避できたわけだ。

「試合が終ったのだから、さっさと出て行くぞ。いいな」
「「了解、であります」」
「敬礼は……まあ、今は良いだろう」

おどけて見せた俺達の敬礼を認めてくれた織斑先生。意外に優しいところもあるんだな……なんて甘い考えを、次の一言が容赦なく蹴り飛ばす。

「忘れていたが……これがＩＳ起動のルールブックだ。補講の課題として、明日までに覚えるように」

どさりと落とされた二冊の本は、そりゃもう辞書みたいな分厚さで……これを明日まで？　やっぱり鬼だ、この人……

「何にせよ今日はこれでおしまいだ。帰って休め」

あんた休ませる気なんてないだろっ！　と突っ込みたいのをぐっと飲み込んで、二人でそのルールブックを手にする。重い、ページはぺらぺら、字は細かい……

「……シン、帰るか」
「……そうだな」

勝利の喜びも、明日の憂鬱に簡単にかき消された。寮に帰る足取りと、ついでに脇に抱えたルールブックと、おまけに気持ちも重くて仕方なかった。

「情けない……それぐらい、覚えてみせろ」

篠ノ之の無茶な要求にも、何も反論する気力がない。部屋に戻って、また即行でベットにダイブしよう。勝ったから良しとしよう……そう思って、そのまま寝ることにしてしまった。

俺も、一夏も、その時には全く気がついていなかった。

勝っても問題は残っていることに。俺達二人は、まだ敵同士だということに。

でも、俺達は笑って手を振って、自分の部屋に帰っていった。

◇

「……」

「……」

次の日の教室、朝のホームルーム中。俺と一夏はお互いに机の上で手を合わせ、硬く目を閉じていた。無言、無言。相手を思いやる一言なんてありえるはずもなくて、逆に、自分が助かれば良いという自己保身の思いが頭の中を駆け巡る。

「織斑くん……織斑くん……アスカくん……」

教卓には投票箱があって、その中から取り出された用紙に書かれた名前を、山田先生が読み上げる。今ので、イーブン。互角だ。そ

して次が最後の一票……これが明暗を分ける。

「――織斑くんっ！」

「やっっっっ！　たぁぁぁっっっ！」

「ぐっ……ちくしょうっ……」

ガタンと机を揺らし、俺は渾身のガッツポーズを取った。同時に一夏がゴンっと机に頭をぶつける。撃沈、確認。

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでいい感じですね！」

「一夏、俺の分までがんばれよっ！」

そう、今行われていたのはクラス代表の選挙。クラスの投票の結果……僅差で俺は負けることができた。試合に負けたけど勝負には勝った気がする。ていうか、勝負に勝てればどうでも良いや、この場合。おかげで一夏がクラス代表だ。公明正大、まさに文句なしの結果――

「異義ありっ！　昨日の試合、勝ったのはシンだろっ！？　シンが代表の方が筋が通るんじゃないですかっ！？」

異論が出た。当然、一夏の口から。

「勝ったのは『俺達』だろ。だから、今の投票で二人の内で結果を決めたんじゃないか。見苦しいぞ一夏っ！」

「ぐぐぐっ……そうだ、セシリア！　お前は納得いかないだろっ！？」

突然名前を呼ばれたセシリアは一瞬驚いたようだけど、コホンと

咳払いした後、立ち上がって高らかに宣言した。

「昨日の試合……私が負けたのは“一夏さん”と“シンさん”のペアです。ですから、私は今回の投票に参加していませんし、どちらが代表になっても異論はありませんわ」

うん、セシリアは良く分かってくれていた。これならもう反論の余地はない。

「投票の結果じゃ仕方ないよね～」

「私はちょっと残念だけど……でも、織斑くんでも面白そうだからいっか！」

「そんな……」

クラスの総意がまとまった。ちょっとだけ一夏が気の毒になって、少しだけフォローを入れることにする。

「まあまあ、俺も一緒に訓練するからさ。二人でがんばろうな？」

「はあ……分かったよ」

「わ、わたくしもクラスの仲間としてＩＳ操縦の指導をして差し上げますわ！　それなら一夏さんもみるみる上達を――」

「待て、一夏の教官は私が頼まれたぞ」

セシリアに篠ノ之が立ち上がり、お互いににらみ合いを始める。別にみんなで訓練すればいいじゃないか……なんで喧嘩するんだ？

「座れ、馬鹿ども」

織斑先生の出席簿が華麗に炸裂する。二人とも、しぶしぶと座りなおした。

「クラス代表は織斑一夏。異存はないな」

はーいとクラスのみんなが声をそろえた。まだ苦い顔をしている一夏を除いて。

もちろん俺も返事した。異存、ないからな。

とにかく、これで一件落着だ。明日からはもう少しだけ楽な日常になるだろう。一夏は、大変だろうけどさ。

第二話『本当の決闘は明日！』（後書き）

どうも、ここまで読んでいただきありがとうございました。
誤字・脱字は是非ご指摘ください。
また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくて気化してしまいます。
お気軽にご感想をください。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

第三話『今日も、明日も、明後日も』（前書き）

※以下の事にご注意ください。
・設定がいい加減です。ご指摘はバンバンしてください。
・展開早いです。すみません。
・はっきり言って、妄想の産物です。気に入らなかったらすみません。

第三話『今日も、明日も、明後日も』

四月も下旬になった。過ごしやすい気候は変わらず、授業の間も居眠りしてしまうぐらいで……俺は何度も織斑先生に頭を叩かれていた。でも、この授業はちょっとした実技訓練。退屈な座学から開放されるということで、俺も一夏も喜んでいた。

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。アスカ、織斑。試しに飛んでみせろ」

言われて前に出た俺達は、それぞれ自分のＩＳを展開させる。展開をイメージする時はいつも、待機状態の貝殻を握りしめる。意識を集中――と言うより、こうすると頭の中を勝手にイメージが湧いてくるからだ。

――行くぞ、イグナイテッド――

すぐに全身から光があふれ出し、灰色の装甲が現れる。それも青と白を基調とした色で染め上げられて、もう一度だけ輝きを見せる。

俺のＩＳ『イグナイテッド』。第二世代ＩＳとして開発されながらも、誰にも操縦できなかった欠陥機。　特徴として様々な換装装備『シルエット』を備え、特殊装甲『フェイズ・シフト』が実体弾・実刀のダメージを無効化する。そして、初めてこの世界にやって来た時から、俺と共にある『力』。

宇宙に上がったように体は浮き上がり、センサーに接続された視覚は世界の全てを彩ってみせる。展開時間は、研究所で訓練を始めた時よりずっと短くなった。うん、快調だ。

「よし、飛べ」

二人でうなずきあって、空に向かって急上昇する。急上昇、急下降は『角錐を展開させる』イメージでするらしいけど……そんなのより、インパルスのコクピットで見た景色を思い返して動くほうがよっぽど楽だった。

「一夏、どうだ？　空を飛ぶのには慣れたか？」
「全然だな。そもそも何で空に浮かんでられるんだ、これ」

もっともな意見。正直、俺だって良く分からない。

「理屈は後回しで良いんじゃないか？　動かせなきゃ意味ないんだし」
「ま、そうだな……っと、セシリアが来たぞ」

眼下のクラスメイトの中から、一人青い装甲をまとったセシリアが飛んできた。流石に速い速い。代表候補ってやつはかなり優秀だった。

「それについては反重力力翼と流動波干渉の話になりますわよ？」
「いや、それはまたの機会に」
「おう、説明してくれなくていい」

下で俺達の話を聞いていたらしい。そんな話はうんざりだ、といった顔をする俺達を見て、セシリアは笑っていた。

決闘が終った後、俺と一夏はしっかりと謝罪。セシリアも、自分にも非があったとして同じように謝ってくれた。人間、素直に謝るのが一番良いらしい。それからセシリアは、俺達二人の訓練に合流して色々と教えてくれるようになった。特にＩＳに慣れていない一夏の訓練をよく見てくれていて、俺としては大助かりだ。

俺だって、人に教えられるほどの知識はないし……なんとなく空を飛ぶ感覚を伝えられる程度だ。まあ、篠ノ之の『ずどっ、がっ、ぎゅーん』よりはマシだと自負している。分かるわけないだろ、あんなので……ツッコミを入れたら怒られたけど。理不尽だ。

「そこの三人、急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチだ」

「うげっ……完全停止かよ……」

苦手な技術の要求がされた。背中で地面を削り取ったあの衝撃が思い出される。

「あら、シンさん。空戦用のパッケージもあるのじゃなくて？　そちらに換装すれば、これくらい訳もないのでは？」

「そうだよなあ。それに、空を飛ぶのは俺よりよっぽど上手じゃないか」

「実はさ、その、問題が……」

そう。はっきり言ってとんでもない大問題。課題と言ってもいいんだけど。

俺のイグナイテッドの問題点。ＭＳとＩＳの操縦の違い。この二つが非常に重大な課題だった。

「ほら、セシリアも行ったことだし、俺達も行こうぜ？」

「う、うん……そうだな……」

先に下りていき、完全停止までこなしたセシリアを見下ろして、二人で息を合わせて急降下を開始する。集中して地面を見つめ、それがすぐに眼前に迫って――

「うわあっ！！」
「おわあっ！！」

俺と一夏は、ものの見事に撃墜した。いや、墜落ってのが本当の言い方らしい……結局、落ちたことには変わりはないけど。しかも頭っから。嬉しくないことに、センサーは周りの笑い声を余すことなく拾ってくれた。チクショウ……

「馬鹿者共。誰が地面に激突しろと言った」
「「……すみません」」

機体を浮上させて、穴から這い出る俺達。傷どころか汚れ一つない装甲は、俺達のちっぽけなプライドを汚し、傷つけ、穴を開けていた。

イグナイテッドは確かに、装備の換装を主眼とした機体だ。追加装備も今あるだけで三機は葛城さんに作ってもらったし、まだ製造中のシルエットに、イグナイテッド自身が鋭意設計中のシルエットまである。

ところが、今の俺が使えるのはソードシルエット“だけ”だ。

何でかって？　……イグナイテッドは、追加装備全てに『プロテクト』を掛けている。ご丁寧に、俺の操縦技術に合わせてだ。そのせいで、折角作ってもらった装備は呼び出しに応じすらしてくれない。結局、研究所での訓練でプロテクトが解除できたのはソードシルエットだけだった。これだって、『対艦刀を使えるようにするためにＩＳを装着しながら鉄パイプを振り回す』って情けない特訓の成果だ。大変だったんだぞ……

とにかく、これが問題点のその一。『イグナイテッドの装備でさえ俺は使えない』ってこと。

だったら、それを使えるようにすれば良いんだけど……ここで障害になるのが問題点のその二。『ＭＳではできた挙動が俺にできるわけじゃない』ってことだ。

ＭＳを動かすのはペダルやら操縦桿やらだけど、ＩＳを動かすのは、つまりは自分自身。いくらインパルスを動かせたって、イグナイテッドは同じようには動いてくれない。

それでも、イグナイテッドのＯＳが補助してくれるし、イメージとしてインパルスの挙動は思い浮かべられるから、後はそれを自分がトレースするだけだ。

そうは言っても……確かに、ナイフを振り回すとか、銃を構えるとか、生身でやったことのある動きは問題ない。だけど、『対艦刀を振り回す』とか『空中で旋回』なんていうのは、生身で体感したことなんてあるはずなくて……結構、苦労した。鉄パイプもその訓練の一環だった。

おまけに、苦労してできるようになったのは『インパルスと同じ動き』で……ＭＳは全速力で降下した後、地表十センチで止まれやしない。要するに、ＭＳができない挙動をマスターするにはもっと苦労が必要。

空中を飛び回るために、今は地面に激突か……情けない。

「一夏、平気か……？」

「平気じゃない……主に心が」

「耐えよう……今はガマンの時だ」

この後セシリアが心配して声をかけてくれた。傷薬のように、それが酷く心にしみた。

◇

「――とまあ、思いつく限りこんなところだな。お前さんのイメージ、それから反応に機体が追従して動くように再調整する、ってところか」
「はい！　葛城さん、ありがとうございます！」
「今度帰ってきたときには、またばっちりデータ取らせてもらうからな～」
「了解です！　それじゃ、また！」

携帯を切って、パソコンの前に再び向かう。電話中に書いたメモが、今の俺には宝の地図――いや、まさにその宝に等しいものだった。

「やってやるさ、ちくしょおーっ！」

墜落の日の夜、部屋に戻った俺はパソコンで空中での姿勢制御のシミュレートに没頭していた。イグナイテッドに接続して、プラグラムを懸命に打ち込む。武器の展開は簡単にできた。でも、そんなことより、その前に篠ノ之に言われた「情けない」の一言が心に深く刺さった。見てろよ……一夏と一緒にアイツの鼻をあかしてやる！

「対機体重量比反重力制御修正、対地センサー反応レベル０．９２変更、スラスターモジュールと反重力力翼間にＯＦＣをコネクト、相互反応アダプション……確認！　今度は神経接続のフィードバック感度ポイント上昇、空間ＳＯＤ認識の再修正……終了！　これでどうだ……？　まだ遅いぐらいかよ！？　だったらどうする……？」

パソコンの画面の中の俺は、もう何度目か分からない墜落をしていた。ブレーキが掛けられるようになったのは大きな進歩だろうけど。待っててくれ、もう地面とはサヨナラさせてやるからな。

手元にあるＩＳ用のプログラム教本を片手に、出来る限りの変更を加えていく。

なんたって葛城さんにアドバイスをしてもらったんだ。いくら俺には分からなくても、あの人が教えてくれた通りにすれば上手くいくはず。イグナイテッドも、自動的に俺に合わせようと最適化（フィッティング）してくれてるんだ。俺だって……

「こうなったらこっちだ！　装甲間神経リンケージ強化、空間ポジショニングの再調整、それからアラートの感度上方修正、ＳＩリアクトに対応……いけるぞ！」

グラフィックで作り上げられた機体は、地面に激突する前にピタリと止まった。成功だ！

「ようやく出来た！　くうぅ～～っ！！」

苦労した甲斐があったというもの。イスをくるくる回して、両手をあげる俺。きっと誰かに見られていても気にとめなかっただろう。さて、後はシミュレーション通りに動ければいいんだけど、試すのは明日にならないと。アリーナ開いてないし。

「あ、そう言えば」

時計をちらりと見やると、自由時間を少し過ぎたところだった。今日は寮の食堂で『織斑一夏クラス代表就任パーティー』なんてものをやるらしい。今頃、一夏は渋い顔をしてることだろう。クラス

全員参加が基本だから、俺も行かないとな。

「就任祝い、だな。コレは」

さっきまで使っていた『葛城さんメモ』を手に取る。俺みたいな基本の基の字も知らないような奴でも、教本と照らし合わせれば調整できるようなことらしい。きっと一夏にも役立つだろう。流石は主任研究員の葛城さんだ。頭が上がんないよ、本当に。

◇

「ゴメン、遅くなった……って、なんか人数多くないか？」

「あ、アスカくん。きたきた、待ってたよ～」

「ささ、こっちこっち」

食堂の中は明らかに一組の人数を超える人が集まっていた。一夏は真ん中の方で、何やら見知らぬ人に、ボイスレコーダーを突きつけられてうろたえている。クラスメイトに案内されて近づけば、その矛先は俺に向かってしまった。

「シン！　交代だ、よろしく！」

「お、君が噂のもう一人、第一学年『最強』の男！　シン・アスカくんだね！　私は新聞部副部長二年の黛薫子。よろしくね～」

目をキラキラさせながら名詞を渡された。ていうか、そんな噂なんて知らないぞ、俺。

「え～、有名だよ？　入試主席のセシリアちゃんを倒した、期待の専用機持ちだって」

「勝ったのは俺と一夏。二人で勝ったんだから、そんなわけじゃ…

…」
「あ、いいよいいよ。コメントは適当にでっちあげるから」
……こういうのが噂の先行の真実か。情報は武器になる。そしてその武器は俺達に牙を剥く……でも、個人の力はあまりに無力だ。
セシリアのインタビューに行った黛さんは放っておいて、一夏に『葛城さんメモ』を渡すことにした。
「ほら、クラス代表就任祝い。がんばれよ」
「……？　なんだ、コレ？」
「ＩＳ用ＯＳ調整のコツとポイント。さっき俺もプログラムし終えたから、一夏も使えよ。効果は保証するぞ？　研究者に聞いたんだからな」
「シン……お前って奴は……」
笑いながら返して手を差し伸べると、一夏も強くその手を握り返した。ガシッと握手をする俺達。男の友情なんて単純なものだ、なんてルナに馬鹿にされそうな場面だな。うん、でも、シャッター切られてるんだから、新聞部としてもおいしい場面でもあるんじゃないか？
「うわ、やっぱりこっちも噂通りなんだ！　スクープだね！！」
「……あの、それってどういう噂なんですか？」
こっちも、ってどういうことですか？　なんだか凄い嫌な予感が……
「アスカくんは男色家で織斑くんに気があるって聞いたんだけど？」
吹き出した。盛大に吹き出した。周りの女子達は『やっぱり』と

か『どうりで』とか口々に言っている。どっからそんな噂が立ったんだよ！？

「ちょっと待てよ！　どうしてそんな話になってるんだ！？」

「だって～、よく織斑くんと一緒にいるし。様々なアプローチで織斑くんに迫ってるって」

迫ってない。普通にクラスの仲間として付き合ってるだけだ。

「で、織斑くんも満更じゃないって」

「んなわけねーだろっ！！」

一夏も大声を張り上げた。でもさ、当事者の否定の言葉って、大抵は無視されるんだよな。主に勘違いしがちというか、暴走しがちな面子に。

「シンさん……まさか、男の方に興味がおありとは思いませんでしたわ……」

「誤解だ！　すっごい誤解だ！　別にそんなことはないぞ！！」

「一夏、私が見ないうちにそんな趣味に走るとは……不潔だ！　恥を知れ！！」

「箒！　今の否定の言葉が聞こえなかったのかよ！？　止めろ！！木刀をしまえ！！」

ぎゃあぎゃあと騒いでいるうちにまた写真を撮られた。いつの間にか一組メンバーが全員集合して。見出し記事にはさぞ似合う写真になってることだろうな。そんな集合写真、俺いらない。

結局、『織斑一夏クラス代表就任パーティ』が終了したのは十時過ぎだった。疲れきって部屋に戻る俺達とは対照的に、クラスの皆

は元気いっぱい。篠ノ之は最後まで冷たい視線を俺に向けていた。やめてくれ、そんな目で俺を見ないでくれ。

◇

次の日の朝には、教室の話題は俺の男色家疑惑から転校生の話題にシフトしていた。良かった……女子は飽きるのも早いらしい。さっさと忘れてくれ。

「アスカくん、織斑くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？なんでも中国の代表候補生なんだって」
「転校生？今の時期に？」
「しかも代表候補生か。へー」

ずいぶん急な話だな。まあ、妙な噂がそれで消えてくれるならありがたい。見知らぬ転校生が、俺には救世主に思えてくる。

「そんなことより！　一夏さん、クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょう！」
「そうだ、今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？」
「あら、篠ノ之さん。一夏さんの訓練はわたくしがお手伝いしますから、あなたの出番はありませんよ？」
「ふん！　一夏が最初に訓練を頼んだのは私だ！」

セシリアと篠ノ之が登場。最近二人とも妙な対抗意識を燃やしていて、事あるごとに突っかかっている。原因はなんだ？　仲良くしたほうが良いのは当たり前なのに。その当たり前のことが、なかなか分かんないんだけどさ。

「一夏、模擬戦なら俺も相手するけど？」

「そうだな。シン、頼めるか？」
「任せておけって」
「サンキュ」
「はっ！？　おいアスカ！！」
「抜け駆けはいけませんわ！！」

抜け駆けってなんだよ、抜け駆けって。頼むから仲良くしてくれよ。

クラス代表同士のリーグマッチ、クラス対抗戦。一夏に面倒ごとを押し付けた分は、しっかりサポートしないと。優勝商品なんてものもあるから、クラスの女子もそれなりのプレッシャーをかけてるし。ちなみに、その優勝商品は学食デザートの半年フリーパス。うーん、あんまり嬉しくない……

「織斑くん、がんばってね！」
「フリーパス楽しみにしてるからね！」
「専用気持ちのクラス代表は一組と四組だけだから余裕だね！」

わらわらと机に集まってくるクラスメイト。俺も一夏もすっかり慣れてしまったのが驚きだ。

「――その情報、古いよ」

教室の入り口にもたれかかっていた女子の声が、クラスの喧騒に割って入った。黒い髪をツインテールに結んでいて、小柄な体の腰まで垂れ下がっている。知らない顔だ。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」
「鈴……お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音（ファン・リンイン）。今日は宣戦布告に来たってわけ」

また一夏の知り合いらしい。代表候補生って名乗ったから……あいつが俺の救世主様なわけだ。だったら早速、お礼に良いこと教えてやらないと。

「おい、アンタ。早くどいたほうが良いぞ？」

「何よアンタ、邪魔しな――」

言い切る前に、頭にバシンッと出席簿が叩きつけられる。織斑先生が来てるのに気付いてなかったみたいだ。あーあ、だからどいたほうが良いって言ったのに。

痛々しいことに、頭を抑えて涙目になりながら、一夏を指差してなにやら吠えていた。

「また後で来るからね！　逃げないでよ、一夏！」

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！」

バタバタと勢いよく走り去っていく音が、教室から遠ざかっていく。

次いで、一夏を囲んでいた女子の頭を出席簿が乱撃。この速さと正確さはすさまじかった。

◇

昼休みになって、俺達は学食へ疲れた頭と空腹を癒しに向かっていた。あんまり癒しが過ぎると、午後の授業には居眠りをしてしまうのが玉にキズだ。

今日のメニューは……ラーメンだな。中国代表とか聞いているうちにふと食べたくなった。食券を買っていそいそと列に並ぼうと――

「待ってたわよ、一夏！」

お盆の上にラーメンどんぶりを乗っけた女子に進行をふさがれた。転校生の鳳（ファン）とかいう奴、律儀に一夏のことを待ってたみたいだ。なら食券だけ買って待ってれば良かったのに。ラーメンのびると思うんだけど。

「ほら、食券出せないからどいてくれ。あと、のびるぞ」

「わ、わかってるわよ！　大体、アンタを待ってたんでしょうが！　なんで早く来ないのよ！」

むしろラーメン手にして待ってるほうが不思議なわけで。けど、一夏もコイツも、お互いに口調がとても親しげだ。多分付き合いはそこそこ長いんだろうけど……なんでだろう、二人の様子見をするセシリアと篠ノ之から『いかにも不機嫌です』といった雰囲気が伝わってくる。午前中に織斑先生の出席簿クラッシュを食らったせいか？

「篠ノ之、あいつはお前とも知り合いじゃないのか？　一夏とは小学生からの知り合いなんだろ？」

「知らん！　あんな奴のことは知らないし、一夏から聞いたこともない！」

「そっか。あ、テーブル空いたから行こうぜ」

食事を取るときはだいたい十人前後のグループが出来上がるから、テーブルを見つけるのも時間がかかることが多い。あっさり席が空いたのは、ラーメンを食べるのには都合が良かった。

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？　おばさん元気か？　いつ代表候補生になったんだ？」
「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、なにＩＳ使ってるのよ」
食事中も、一夏と鳳（ファン）はお互いに質問タイム。話がはずんでるようだから、口をはさむのも気が引けるし、黙って見てよっと。俺だってそれぐらいの気遣いはできるさ。それに、俺が聞かなくても……
「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」
「そうですわ！　一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってらっしゃるの！？」
ほら、俺の代わりに質問してくれる奴らがいた。でもさ、二人とも、少しは気を遣ってやっても良いんじゃないか？　ご機嫌斜めだから、言わないけど。
「べ、べべ、別に私は付き合ってるわけじゃ……」
「そうだぞ、ただの幼なじみだよ。ん？　何睨んでるんだ？」
「幼なじみ……？」
「あー、えっとだな。箒が引っ越していったのが小四の終わりだっただろ？　鈴が転校してきたのは小五の頭だよ。で、中二の終わりに国に帰ったから、会うのは一年ちょっとぶりだな」
分かりやすい説明ありがとう一夏。だから篠ノ之は鳳（ファン）のこと知らなかったんだ。
「初めまして。これからよろしくね」
「ああ。こちらこそ」

全然よろしくねって感じじゃないぞ。明らかに険悪なオーラが出てて、一夏も引き気味だ。

「ンンンッ！　わたくしの存在を忘れてしまっては困りますわ。わたくし、イギリス代表候補生のセシリア――」

「ごめん、あたしはアンタのこと知らないし、他の国に興味無いから」

「な、な、なっ……！？」

セシリアが顔を真っ赤にしてこぶしを震わせていた。確かに、これは失礼かもな。昔の俺なら食ってかかるところだ。もうそんなことしないけど。

で、怒ってるセシリアのことを無視して、一夏との話を再開する。鳳（ファン）。話の腰を折ったのはセシリアと篠ノ之だから、仕方ないか。積もる話ってのがあるんだろ、きっと。

「一夏。アンタ、クラス代表なんだって？」

「お、おう。成り行きでな」

「ふーん……あ、あのさぁ。ＩＳの操縦、見てあげてもいいけど？」

気持ち顔が赤い。目線だけを一夏に向けて、ぼそぼそと鳳が言った。へー、面倒見の良いところもあるんじゃないか。

「あー、ＩＳ操縦の方はシンに頼むから、鈴はいいよ。手間だろ？　ありがとな」

何かが割れる音が聞こえた。ピシッっていった。ついでに言えば、セシリアをかんかんにさせた時も、全く同じ音が聞こえた。つまり、

第一級の危険信号。どうしてだ？　一夏、何かマズイことでも言ったか？

「ねえ、一夏……そのシンって奴は誰……？」

「俺のクラスメイトだよ。ああ、ほら。そこでどんぶり傾けてるぞ。」

こっちを指した一夏の箸に、空いた右手で敬礼を返す。早いとこスープを飲み干したほうが良い。きっとこの後、また面倒ごとが起きる。

空になったどんぶりをお盆の上に置いた途端、バンッとテーブルが叩かれて食器が浮いた。

「アンタ、朝からなんなのよ！？　一夏とどういう関係なの！？　そもそも、なんで一夏以外に男がいるの！？　答えなさいよ！！」

「あのさ、ここ食堂だから、あんまり大声出さないほうが……」

鳳（ファン）の口からは火が出そうな勢いだった。なんとかなだめすかそうと両手で静止のポーズを取る俺の背後に、腕を組んだセシリアと篠ノ之が急速に回り込む。

「フン、アスカは一年一組所属。一夏とはクラスメイトというわけだ。しかしだな……コイツはそれだけではない」

「そう……シンさんは学年でも『最強』を謳われる男子。なんと言っても一夏さんと共に、　入試主席のわたくしさえも打ち破ったのですから！」

「そして！　一夏はアスカに教えを請い！　さらにアスカは、私達に『どうしてもと』協力を要請している！！　つまりだな！！」

「ええ！　一組代表である一夏さんの訓練！　担当はわたくし達だけなのですわ！！　あなたの入り込む余地など微塵もなくてよ！！」

バックではメラメラと炎が燃え上がり、握りこぶしを作って力説する二人。交互にセリフを読み上げて、息ぴったり。仲直りしたのか？　仲の良いのはホントに良いことだ。

けどさ……俺、『どうしても訓練手伝ってくれ』なんて言ったっけ？　それにさ、大声出しちゃダメだって。一夏含めて周りの皆がドン引きしてるぞ？　ついでに言わせてもらえば、そんな説明で納得してくれるわけ――

「くぅ～～っ……！　そうね！？　コイツがあたしに、『一夏の特訓に協力してくれ』って頼めば良いのよね！？」

あ、納得してた。いや、そういうわけじゃ、ないんだけど……

「アンタ！　操縦訓練の手伝い頼みなさいよ！！　さっさとする！！」

「え、あ、いや……」

「アスカ！　そんな頼みを聞く必要などない！」

「そうですわ！　シンさん！」

最悪な板ばさみになってしまった。どう返事しても、俺が睨まれるんじゃないか……

ねえ、ステラ。俺、何か悪いことしてたっけ？　こんな目に会うようなこと、したっけ？　一夏にクラス代表押し付けたのがいけなかったのかな？

助けを求める視線を一夏に送れば……首を横に振った。諦めろ、のサインだ。嘘だろ……

「えっと、アンタどうして一夏の訓練に付き合ってくれるんだ？宣戦布告とかまでしたくせに、おかしくないか？」

「そ、それは……その……」

顔を真っ赤にして、ごにょごにょと聞き取れないことを呟く鳳(ファン)。しめた。なんだか分からないけどひるんだぞ！　チャンスだ！！

「訓練の手伝いはありがたいけど、対抗戦が終るまでは待ってくれ。もちろん、アンタが一夏の情報を盗もうって考えてるとは、思っちゃいないけど……やるからにはフェアじゃないと。俺も一夏もやるからには本気だから、そんな敵に塩を送ってもらうような真似はできない」

実は、ほとんど嘘だった。敵の情報を得て対策をとるのは、戦闘の基本だ。だからレイと一緒に戦闘シミュレーションを繰り返したし、実際に効果もあった。
つまり、今のは口からでまかせ。スポーツで足を引っ張るのは、また別の話だけど。卑怯なのは間違いない。

「くっ……仕方ないわね、分かったわよ」

ようやく刀を納めてくれたようだ。助かった……

「じゃあ、訓練の後に行くから。空けといてね。じゃあね、一夏！」
「あっ！　おい、鈴！」

訓練後に一夏と会う約束だけ勝手に取り付けて、鳳(ファン)は去っていった。話題をかっさらってくれた救世主の転校生は、代わりにまた一つ頭の痛い課題を残していった。

「一夏、特訓が優先だぞ。私が見てやるんだからな」
「あら、篠ノ之さんの出番はなくてよ？」

「何！？」
「なんですの！？」
いなくなったらまたセシリアと篠ノ之は喧嘩を始めるし……何なんだよ、全く……
「お前の知り合いって、あんなのばっかりなのか……？」
「わりぃ……返す言葉がねえや」
「いや……大変だな、一夏」
お互いの肩に手を置いた。同じような苦労を重ねて、俺達の友情は日増しに強くなっていく。今日も、明日も、明後日も……やっぱりそんなの嫌だ。こんな苦労はもうしたくないよ、俺。
ちなみに、午後の授業はこの疲れがたたって三回ほど意識が飛び、きっちり同じ分だけ織斑先生の出席簿に叩き起こされた。意識が違うところに飛びそうな勢いで。
補修の時間には、山田先生に「アスカくんって、男の子に興味があるって……ホントですか？」って聞かれた。リンゴを赤いペンキに突っ込んだような真っ赤な顔で。
訓練の時間には、何故かアリーナで二対二の模擬戦になった。セシリアと篠ノ之がしつこく一夏を狙うから、かばうのに必死だった。
部屋に戻ったところで、その日の記憶は無くなった。

第三話『今日も、明日も、明後日も』（後書き）

どうも、ここまで読んでいただきありがとうございました。
誤字・脱字は是非ご指摘ください。
また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくてのびてしまいます。
お気軽にご感想をください。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

第四話『明日を乱すもの』（前書き）

※以下のことにご注意ください。
・期間が開いたというレベルじゃないので、整合性がとれているか分かりません。
・お叱りの言葉は遠慮なく……というかもう罵ってください。
・というか、すみませんでした。
・申し訳……ありませんでした。

第四話『明日を乱すもの』

地球だから重力があるのは勿論だけど、それ以外に四季があるってことが日本の良い所だ。オーブも島国で、四季があって、春が新生活の季節だった。家族で花見に行くことも楽しみで、秋には同じ場所でバーベキューをしたりして、同じようにマユと駆け回るのが大好きだった。

今の俺も、あの時のように季節の変化を感じていられる。

葉の緑も濃くなって、すっかり五月といった様子になった。

転校生の凰（ファン）が来てから早くも数週間。クラス代表対抗戦を翌週に控えて、今日も今日とて俺達は訓練の毎日だった。

ＩＳを着けていない状態での剣術訓練、それからセシリアに操縦技術の指導をしてもらい、最後に俺との模擬戦をする。我らがクラス代表、織斑一夏の特訓は順当に進んでいた。もちろん、俺の方だって順調に訓練を重ねていた。課題だった空中での姿勢制御その他もろもろはクリアー。実際に動かすのはまだなんだけど、ようやく“アレ”が使えるようになったわけで……はあ、長かったな。

「来週からいよいよクラス対抗戦だ。アリーナの調整があるから、今日で特訓は最後だな」

放課後の夕日をバックに、第三アリーナに向かって俺達は歩いていた。

篠ノ之の言葉通り、準備期間中にアリーナの使用はできない。自分の訓練もそうだけど、一夏の特訓ができないのは残念だ。まだやることはいくらでもあるのに。

「ＩＳ操縦も様になってきたな。今度こそ――」
「わたくしとシンさんが特訓を担当しているんですから、これくらいは当然ですわね」
「ふん。アスカとの模擬戦はともかくとして、射撃装備の無い一夏のＩＳに中距離射撃型の戦闘法が何の役に立ったというんだ」

睨み合いの開始。篠ノ之とセシリア、二人が揃うといつもいつもこれだ。もういい加減になだめるのも飽きたので、放っておくことにする。

「一夏、今日は最終調整だな。模擬戦の内容、確認しとくぞ？」
「おお、よろしく頼むぜ」
「今日は俺が中距離からライフルで狙撃するから、お前はそれを避けて接近、攻撃。接近戦に持ち込まないと、ジリ貧になるからな」

模擬戦なのに、この条件指定をしたのには理由がある。一夏のＩＳには近接戦闘用のブレードしか装備がない。初期設定の装備は変更できないらしいし、後付装備の余裕も無いという極端な機体が、一夏の『白式』だった。織斑先生のアドバイスもあり、訓練は基礎の移動技術と近接戦闘に絞ってある。特に実戦形式で、習うより慣れろという側面が強い。

「分かってるって。今日こそ一撃――」
「「二人とも、聞いているのか（いますの）！？」」
「「はいはい、聞いてるよ」」

睨み合いの次には、いがみ合い。俺達は軽くいなして、第三アリーナのドアを開けた。

「待ってたわよ、一夏！」

「凰？　アンタどうしたんだ？」
「今日はアンタに用はないの！　どいたどいた！」
「はいはい、分かりましたよ」

腕組みをして、仁王立ちをしていたのは凰だった。その姿を認めた途端、さっきまで喧嘩していたはずのセシリアと篠ノ之の敵意が方向転換する。こういう時だけは仲良くなるんだよな、こいつら。

「貴様、どうやってここに――」
「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよ！」
「あのさ、話が進まないから二人とも落ち着いてくれ」

この二人が絡むと確実に話がこじれるから、その場で待ったをかけることにする。証拠は食堂での一件だ。そして、被害を受けるのも多分、俺か一夏だ。

「一夏、反省した？」
「へ？　なにが？」
「だ、か、らっ！　あたしを怒らせて申し訳なかったなーとかあるでしょうが！」
「いや、そう言われても……鈴が避けてたんじゃねえか」

そうそう。理由は知らないけど、一夏と凰は喧嘩をしてしまって、仲直りもしていないらしい。喧嘩の原因が分かれば、まだなんとかなりそうなんだけど……一夏に聞いたら『毎日酢豚をおごってくれるっていう約束を覚えていたのに、なんでか知らんけど怒られた』そうだ。うん、何を言ってるのか分かんないや。

そんなわけで何度か、凰が俺に一夏の様子を聞きに来ることがあった。気になるなら意地張ってないで本人に言えばいいのに、なんて言うと決まって怒り出すものだから、俺も途中から首を突っ込む

のは止めにして、凰と雑談するばかりだった。
話してみれば凰も嫌な奴じゃなかったので、一夏とは仲良くしていてほしいのが正直な所ではある。

「俺、先に中入ってるからな」

ややこしいことになる前に、さっさとアリーナの中に入ることにした。だんだん二人の会話が言い争いに近づいてきてる。今までの経験上、この後は確実に相手が怒り出すのがオチだ。心の中で念仏を唱えながら、アリーナのドアを開けた。

「まったく、落ち着いて、訓練させて、くれよ、と」

広いアリーナの中で準備体操。体をほぐしておかないと、ＩＳの操縦は負担が大きいから、いつも念入りにすることにしていた。
一夏との模擬戦までは射撃訓練でもしておこうとか、そろそろ葛城さんが新しいシルエットの製造してくれてるだろうなとか、とりとめのないことを考えていると――

ドガンッ！

ピットの中から轟音が聞こえた。やっぱり……何かやらかしたんだな。一夏は無事か？
ピットに駆け戻ると凰の姿はもうなくて、壁には直径三十センチほどの丸いへこみができていた。確かここの壁、特殊合金製でめったなことじゃ傷つかないって話だ。こんな傷がつけられるのはＩＳだけだろう。

「セシリア、これ……」
「凰さんのＩＳですわ。一夏さんと同じ近接型、しかもパワータイ

プですわね……」
「情報通り、だな」
凰のＩＳは近接格闘型。接近戦を挑んでくれれば、一夏も対応しやすい。勝ち目の薄い射撃戦を展開されるよりかはマシだ。時間が惜しい。早く訓練しないと。
「一夏、早くアリーナに……って、どうした？」
「いや、ちょっとな……失言しちまって……」
一夏は猛烈に後悔した顔で、ため息をついていた。けど、今はそんなことをしている場合じゃない。
「後悔するのは後回しにするぞ。明日の試合、勝つんだろ」
「……ああ」
「剣術の動きの確認、それから一通りの操縦の復習をしたら、すぐに俺との模擬戦に入ろう。」
明日の一夏の試合、相手は凰だ。一夏のためにも、ここで負けさせるわけにはいかない。振り向いてみれば、一夏の目にはしっかりとした意志の光が戻っていた。

◇

そして試合の日。俺達は会場ではなくて、アリーナのピット内で観戦することになっていた。メンバーは織斑先生に、山田先生、セシリア、篠ノ之に俺の、代表関係者。観客席の方は超満員で、リアルタイムモニターで観戦する生徒も多いらしい。超満員の理由は、物珍しい男子生徒の試合だから。俺が出ることにならなくて良かったと思ってしまうのは、薄情なのだろうか。

アリーナの中では既に、一夏と凰が試合開始のブザーを待っている。ここまで来るともうできることが無いのが歯がゆい。けど、一夏も俺達もやれるだけのことはやった。

（だから勝てよ、一夏）

心の中で呟いたその時、ブザーが鳴って二人が刀を交えた。

凰の第三世代型ＩＳ『甲龍』。巨大な双刃が一夏を立て続けに襲う。それでも、一夏も負けずに剣で連撃を捌ききる。ここまでは訓練の成果ありだ。問題なのは『甲龍』の特殊装備――

『――甘いわよっ！』

『ぐあっ！』

刃を受け止めていたはずの一夏の体が大きく吹き飛んだ。「衝撃砲《龍咆》」は、目に見えない砲弾だ。空間に加えられた圧力が砲身を作り出して、そこから衝撃自体が弾丸になって撃ち出される。しかも全方位死角無しのおまけ付だ。まったく、ＩＳの装備は良く分からないものが多い。

「剣で互角でも、固定装備の差がかなり出てくるな……」

「ええ。早く勝負を決めないと、それだけ一夏さんの不利につながりますわ」

近接ブレード一本で戦うには厳しい相手だ。だからって、一夏も手をこまねいていたわけじゃない。

《雪片弐型》の特殊能力は、自分のシールドエネルギーを消費して相手のバリアーを無効化する。攻撃特化の能力過ぎて両刃の剣だけど、威力は計り知れない。これを相手に当てるためには奇襲に限る

ということで、そのための技術『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』の習得までこぎつけた。これさえ成功すれば、勝機が見えてくるはずだ。

「篠ノ之、大丈夫だって。一夏は負けないさ」

「……しかし……」

「ほら、アイツは諦めてない。勝負に出るつもりだ」

ずっと不安そうな顔をしていた篠ノ之が、画面をきっと見つめなおした。

一夏の目。俺に向かってきた時の、あの強い意志を秘めた目だ。何が一夏を動かすかは知らないけど、大きな思いが一夏を支えている。

一夏が刀を構え直して、加速の体勢に入った。決めるつもりだ。

『うおおおっ！』

一夏が相手の懐に飛び込んだその時、アリーナを大きな衝撃が襲った。一夏の攻撃でも、凰の攻撃でもない。二人の装備に、巨大な爆発を起こすような装備は無かったはずだ。

パネルをタッチしてアリーナ内の画面を切り替えていくと、二人とも呆然として、アリーナの中央から上る巨大な煙を見つめている。

アリーナには外部、内部問わずに攻撃を遮断するためのシールドが張ってある。なら、それを突き破って乱入してきた奴がいるってことだ。

「敵襲……！？　くそっ！！」

「あ、アスカくんっ！？」

頭が状況を整理する前に、弾かれたように体が動いた。競技中の乱入者なんて、どう考えても穏やかな話じゃない。ピットの入り口

のコントロールパネルに触れたけど、ブブーッと赤いエラー画面が表示され、ゲートは開かなかった。パネル隣に書いてある緊急時操作をしても、ゲートはうんともすんとも言わない。完全にロックされたらしい。

「だったら、こうするまでだっ！！」

胸の貝殻に手を触れると、全身に装甲が展開されていく。クリアーになっていく視界の片隅に、所属不明ＩＳの確認を告げる緊急画面が開いていた。さらに続いて、所属不明機がアリーナの中の二人をロックオンしていることも教えてくれる。すぐに助けに行かないと……！！

左腕に盾を展開させながら、右腕で腰のサイドスカートからダガーを引き抜く。

「アスカ！　何をしている、止めろ！！」

「後で説教でも営倉入りでも受けますよっ！　下がっててください！」

織斑先生の呼び止める声を無視して、俺はゲートを切りつけ始めた。けれど、そこらの鉄の扉とは違って、ゲートは傷こそつくものの破れる気配はない。

『先生たちが来るまで、俺達で食い止めますから』

「織斑君！？　ダメですよ！　聞いてますか、二人とも！」

背後では山田先生がプライベート・チャンネルを開いている。会話は聞こえた。二人とも逃げるつもりがないらしい。その通信の内容が、一層焦りを募らせる。もし二人に何かあったら……そう思ってしまうと、がむしゃらに腕は動く。

特殊合金製だろうが、シールドが張ってあろうが、構うもんか。
この先に大事な仲間がいるんだ。戦ってるんだ。

今度こそ守ってみせるって、決めたんだ。

「開けっ！　開けよっ！　コイツっ！！」
「シンさん……」
「アスカ、それぐらいの攻撃ではその扉は開かん。おとなしく待っていろ」
「だからって！　何もしないで待ってなんかいられませんよっ！！」

ＩＳのハイパーセンサーを通して聞こえる織斑先生の声は、明らかに震えていて、一夏のことを心配していた。
自分が助けにいけなくて、俺と同じで、悔しいはずなのに。
たかが壁の一つ先なのに、その壁も切り裂けない。
隣のコントロールパネルのエラー音が、むなしくピット内を響いていた。

「こうなったら、ソードシルエットで……って、篠ノ之？」
「篠ノ之さん？　何をするんですか？」

さっきまで黙って立っていた篠ノ之が、木刀を片手にゲートのコントロールパネルに近づいて行った。
そして、木刀を高く振り上げると――

「――はあっ！！」

人間相手ならかなり危険だろう威力で、コントロールパネルを思い切り叩きつけた。

一撃をもらったパネルがボンッと軽い爆発を起こした途端、ゲートが重い音を立てて開き始める。
その場にいたみんなが、唖然としていた。
「アスカ、開いたぞ！　行けっ！！」
「っ！？　そ、そうだっ！！」
振り向く篠ノ之の言葉で我に返る。
ぶっつけ本番だけど、コイツを使うときだ！
武装のセレクターからフォースシルエットを選択する。認証を終えると背中に大型スラスターが装着され、その赤く縁取られた両翼を開いた。
空いた右腕で空中からライフルを取り出して、空中にふわりと浮き上がる。
青くきらめく装甲が、ゲートから漏れる光を反射させて一層の輝きを見せた。
――フォースシルエット・展開完了――
「アスカくんっ！　ダメですよっ！！　危な――」
「アスカ。許可する、行ってこい」
「でしたら、わたくしもっ！！」
「セシリアは後方待機だ。あまり大人数で行っても邪魔になる」
「うう…分かりましたわ……」
こっちを見上げるみんなに敬礼してから、スラスターにエネルギーを集めて、加速の体勢に入る。エネルギーの集約量は、イグナイテッド単体の比じゃない。

「アスカ……一夏を頼む」
「篠ノ之、ありがとう。任せろ、行ってくるっ！！」

あごを引いて、スラスターの出力を一気に引き上げる。ほんの少し前なら制御のまるで利かなかった速度でも、機体が思い通りに動く。訓練の成果、大有りだ。

視界に映る敵のターゲットサイトは、試合をしていた二人の――凰の方に固定されていた。両腕に熱源が集中するのを感知、凰は……いけない！　アイツ、気付いてない！

「――おい、鈴っ！」
「っ！？　しまっ――」
「させるかっ！」

間一髪のところで、凰の前に躍り出て盾を構える。腕を伝う衝撃が消えた後、すかさずにライフルを発射する。不意打ち気味の一撃だったけど、銃口のついた長い腕がビームを弾き、素早く俺にロックを向けた。

「二人とも無事だなっ！？」
「シン！　来てくれたのか！？」
「アンタ、何考えて――」

凰が言い切る前に敵が接近。振り回した腕から、ビームが何発も打ち込まれる。盾を構えながら銃で応戦してみれば、すぐに相手は攻撃の手を止めて回避を始めた。動きは非常に速い。
今まで見てきたＩＳの数は多くはないけど、目の前の巨大な機械は、明らかに他と一線を画していた。確かに人型だけど、腕は足元まで伸びていて、全長が２メートルほどになる。全身を張り巡らさ

れた装甲、首のない頭部。まるでＭＡだ。

「これも、ＩＳなのか……？」

「そんなことよりっ！　何考えてんのよアンタっ！？」

「シン、気をつけろ。アイツの動き、どこか変だ」

「動き？　見た目だけじゃなくてか？」

「あーもーっ！　話を進めないでよっ！！」

オープン・チャンネル内に、通信が乱雑に飛び交う。通信を始めると、敵はロックオンをかけたまま、両手をだらりと下げた。

「なんつーか……動きがまるでロボットみたいだろ？　人の乗ってる気がしねえ」

「無人機、ってこと？　ＩＳは人が搭乗しないと絶対に動かないわよ？」

「……ありえない話じゃないんじゃないか？」

常識なんて簡単に覆る。陽電子砲を跳ね返す兵器も、都市一つ壊滅させる兵器も、月の裏側からの戦略兵器も……想像したことない兵器なんて、いくらでも見てきた。この世界だったら、無人機ぐらいあってもおかしくない。

「だとしても……無人機なら、どうだって言うのよ？」

「人が乗ってないなら、全力で容赦なく攻撃しても大丈夫だってことだ」

そう言って、一夏が刀を強く握りしめた。一夏の攻撃はバリアーの無効化ができる。まともに食らえば、いくらＩＳを装着していたとしても相当のダメージを負うだろう。下手をすれば、搭乗者の命に関わる。無人機相手なら、その気兼ねをしなくて済む。

「一夏、『零落白夜』はまだ撃てるか？」
「あと一発。次は必ず当ててみせる」

肯くその表情から、覚悟の強さが伺える。それなら、俺のやることも決まっている。一夏に無事に攻撃させたやることだ。

「分かった。隙は俺が作る……けど、無茶するなよ？」
「何言ってんだよ、自分は無茶するくせに」
「ちょ、ちょっと一夏！　コイツに任せて大丈夫なの！？」

ほんの少し笑みを浮かべてお互いを見やっていると、慌てたように凰が間に入ってきた。俺と一夏は知り合って一月そこそこ。背中を任せる相手としては、不安に思われるかもしれない。

「鈴、シンなら絶対に大丈夫だ。実力は俺が良く知ってる」
「でも……」
「心配なら、約束するさ」

二人の少し前に出て、振り向いて、はっきりと言ってみせた。

「一夏も、それに凰も……必ず俺が守る。約束するよ」
「〜〜っ！？」

向き直る時に一瞬だけ、凰の顔が赤くなってるのが見えた。ああ、無責任な発言に思われたか？　怒ってるなら、後で謝らないと。

「ほら、鈴も手伝ってくれ。いい加減、敵さんも待ちくたびれたみたいだぜ？」

おしゃべりの時間は終わりだとでも言うように、深い灰色の機体がその手をふり上げた。
凰の前で突撃の構えを取る一夏。何か策が有るみたいだ。
無人機だったら全力で構わない。
一夏の口にした言葉を反芻する。今までだったら、考えられない話だった。
自分が相手にしてきたのは、全員……人間だった。
でも、そんなこと必死で振りほどいて、いっつも戦闘を続けていた。
殺らなきゃ、殺られる。それじゃ何も守れない。そうやって言い聞かせて。
それで平和になるのかなんて、本当は、自分では分からなかったのに。
戦争はヒーローごっこじゃないって言われたこともあった。
アスランからしたら、当然の話だったんだろうな。敵だって人間なんだって、当然のことを忘れないでいたんだから。それで苦しむのは、自分だったのに。
傷ついて、傷つけられて。それなのに、全てを守ってみせるなんて、それこそヒーローごっこのヒーローそのものだ。敵を倒して、みんなを守って。
誰かの明日を奪うことしか、俺にはできなかったのに。
でも、俺は諦めたくない。守りたい。
ステラと約束した、俺の明日。

どんなものになるか、今でも俺は分からない。
けど、はっきりと分かることもある。

今この場に、守りたい人たちがいるってことだ。
それぞれに、同じように明日があるんだ。

明日を守ってみせられるなら。今度こそ、守れるのなら。

やってやるさ。アイツを、倒して。

空に浮かんだいびつな機械が、その腕を俺に向ける。背部スラスターからビームサーベルを引き抜いて、敵と対峙した。その手の砲口に熱量が高まるのも、光が収斂していくのも、今の俺には全てが見える。怯えなくていい。

守るための『力』が俺と共にあるから。

熱線が近づいた。俺をかき消そうとする光の奔流に、スラスターを急加速させて飛び込んでいく。前方に掲げた盾が光を切り裂き、熱戦を押し返していく。銃撃が終ったその瞬間、盾を放る。すかさずその手の残光に向けてサーベルを突き刺した。
敵は避けるまもなく、伸ばしたままの右腕で光の刃を受け止める。砲撃直後の放熱をオーバーしたのか、がくがくと右手が揺さぶれる。なんとか光を弾いていたはずの掌は、耐え切れず爆発を起こして、ビームの閃光がシールドを突破し、肘の先までを貫いていった。

「今だ、一夏ぁっ！　いけえっ！！」
「うおおおっ！！」

崩れかけた姿勢を立て直し、センサーアイが音を立ててこっちを捉えなおす。左腕を離脱する俺に向け、砲撃をしようとした一瞬に、すさまじい加速で一夏が敵機に接近する。カメラが一夏をロックした瞬間には、敵の左腕は宙を舞っていた。それでも、敵はひるまない。全身のスラスターを点火して、一夏に体ごとぶつかっていき、体勢の整えられない一夏を吹き飛ばした。カメラアイを上に向け、上空に方向を転換しようとする。

「逃がすかよっ！」

敵の逃走ルートには、既に俺が回りこんでいた。手にしているのは、もう一本のビームサーベル。出力を最大まで引き上げて、大きく振りかぶる。一夏の攻撃の瞬間に、俺も準備していたことだ。逃がしはしない。

「落ちろおおっ！！」

巨大な胴体に、サーベルを力任せに突き立てる。背部のスラスターを全開にして、その勢いのまま一直線、地面に叩きつける。装甲を貫通した光が敵を串刺しにしたところで、カメラから光が消えていった。ＩＳのセンサーが敵の機能停止を告げる。心臓部をやったらしい。完全な、沈黙。俺達の勝ちだ。

守りきれた。みんなを守ることができた。

「ふ～……なんとか、なったな……」

安心してサーベルから手を離して、力なくその場にプカプカ浮かぶ俺。ああ、ＩＳの作り出す無重力の感覚が心地良い。空中遊泳っ

ていうのも、案外悪くないんだな。あれだけ宇宙にいたのに気がつかなかった。

「シン！　大丈夫か！？」
「一夏！　怪我はないか！？　凰も無事か！？」

逆さまになったまま、近づいてくる二人の安否を確認する。多分、怪我はないと思うんだけど……

「俺は大丈夫だ。それよりお前の方は――」
「ばっか、一夏！　アンタ、衝撃砲を背にして突撃したでしょ！　そんな無茶して死ぬ気！？」
「はあ！？　おい一夏！　あんまり危ないことするなよ！　何かあったらどうするんだよ！！」

特攻の際に大分無理をしたらしい。危ないだろ、まったく。

「まあまあ、シンのおかげで早いとこ決着ついたし。良いじゃないか」
「あのなあ……無理するなよ。ホントにさ」
「アンタも人のこと言えないじゃない！！　砲撃に合わせてカウンター狙いに行ったでしょ！！　失敗したら直撃よ！？　」
「それは……成功したから良いだろ、別に！」

凰がやれやれといった様子でため息をついた。どうやら、俺もかなり呆れられてるみたいだ。悔しいけど、ちゃんとした反論ができない。

なんだかんだと喋っている間に、先生達がやって来た。後の処理は先生達に任せて、よし、一件落着。三人でピットに向かおうとすると――

「アスカ、どこへ行く？」
「へ？」
織斑先生に呼び止められた。気のせいだと思いたいけど、明らかに怒っている。先生の後ろに鬼が見えるのも、幻覚に決まっているさ……
「さっき言ったな？　反省文でも営倉入りでもなんでもします、とな」
「あの、いや、それは……」
「来い、指導室で説教だ。たっぷり、な」
「うえええええぇぇぇぇっ！？」

全然、落着なんてしてなかった。首根っこを引っぱられて、俺はふわふわ浮いたままアリーナを後にするはめになった。黙って俺の様子を見ていた二人は、両手を合わせて遠い目をしている。俺を助け――いや、無理だな。
ステラ……俺、いつもこんなのばかりだ。たまには誰か助けてくれないのかな？　え、やっぱり無理？　うん、そうだよね……

◇

「何か言いたいことはあるか？」
「いえ……ありません」
「もう、こんなことしちゃダメですよっ！？」
「はい……申し訳、ありませんでした……」

絞られた。たっぷり絞られた。修正された方がまだ安いぐらいに。反省文……というより、始末書もいっぱい書かされた。まあ、ＩＳ

を勝手に起動させて戦闘行為まで始めたんだから、これは仕方ないか……

それで、説教のほうは山田先生と織斑先生のセット。人数が増えるだけで、ここまで辛いものになるなんて……命令無視は良くないな。レイ、相変わらずの俺でゴメン……

ちなみに、器物破損させた篠ノ之はたいしたお咎め無し。どうしてだろう……間接的な原因が俺だからか？　まあ、お咎め無しならそれで良かった。

「よろしい、では部屋で休め。私は仕事に戻る」

「了解であります……」

「何度言わせる？　敬礼はよせと言った。まだ説教が足り――」

「いえっ！　シン・アスカ！　退席させていただきますっ！！」

逃げるようにして生徒指導室を飛び出る。気付けばとっくに夕方を回っていて、空は赤みを帯びていた。窓の外を見れば校舎もきれいな朱色にそまっていて、なんだか物悲しさも感じられる。多分、さっきまでのお説教のせいだな。

拘束から開放されたことだし、まず一夏の様子を見に行くことにする。全身打撲で保健室に行ったって、山田先生から聞いたし……だから無理をするなって言ったんだ。

アレ、保健室ってどっちだっけ？　この学園、無駄に広いからなあ……たしか、別の棟だっけ？　なら玄関に出た方が早いか。

階段を下りて玄関口に向かうと、下駄箱で誰かがたたずんでいた。両手を背中に回して、下駄箱に寄りかかって、うつむいて……俺が来たのに気付いて、顔を振り上げた。

「遅いわよ。あたしがどれだけ待ったと思ってんの？」

「凰？　アンタ、なんでこんなところに？」

「質問に質問で返さないの」

そう言って下駄箱から離れる凰からは、怒ってるような様子は感じられなかった。単純に待ちくたびれただけみたいで、言い方にもとげはなかった。

「悪かったよ……で、何か用でもあるのか？」

「……さっきのお礼、まだ、言ってなかったでしょ？　かばってもらったのに」

わざわざそんなことのために俺を待っていてくれたらしい。別に、大したことをしたわけじゃない。ただ、自分の思ったとおりに行動しただけなんだから。

「いいよ、礼なんていらない。みんな無事なら、それで良かった」

「私は良くないの！　……その、ありがと、ね」

「う、うん」

実際にお礼を言われると、結構気恥ずかしいものだ。なんだかその後につなげる言葉が見つからなくて、二人で無言になってしまった。う～、気まずい……こういう時に、気の利いたことが言えない自分が恨めしい。

「あ、あのさ！」

「ん？」

凰の口が開いた。言いにくい事を言うように、何を言うべきか迷っているように。表情をうかがってみれば、夕焼けに染まって顔まで真っ赤にして、視線が行ったり来たりしている。

「どうした？　何かまだあるのか？」

「あ、アンタ……さっきのあのセリフさ。アレ……その、どういう意味？」

さっきの、あのセリフ？　そう言われてもぴんと来なくて、記憶を必死に辿る。何か俺言った？　礼はいらないってことの意味か？　別に、そのまんまの意味だと思うんだけど……それとも別のことか？

「ほら、アリーナで……お、俺がお前のこと守るみたいなこと、言ったじゃない……？」

「あー、なんだ。そっちか」

「そう、アレ！　……いや、私はそんな気はないんだけど、えっと……」

体をもじもじとさせて、上目遣いでこっちを見て、ごにょごにょと凰が呟く。別に変なこと言ったつもりはないし、言葉通りの意味だ。

「そのまんまだよ。俺がアンタのこと守るって、言った。大切な人だから」

「〜〜〜っ！　た、大切って、そ、それって……それ……」

そうだ。何度だって思ったこと。俺が、今度こそ守ってみせると決めたこと……

「一夏もアンタも、この学園の大切な“仲間”だからな！　俺が、皆のこと守ってみせるさ！」

ズガンッととんでもない音を立てて、下駄箱の後ろからとか、階段の陰とかから、女子が一斉に滑り出してきた。ありえないものを見たように、皆が皆、小刻みに体を震わせて、ついでに頭も横に振っている。ていうか、皆どこにいたんだ！？　全然気配なんて感じなかったぞ！？

「ア……も、……と同じ……ね……」

「へ？　何だって？」

周りの皆と同じように、ひざから崩れ落ちて肩を振るわせる凰が何事かを呟いた。それを聞き取れなくて、聞き返そうとしたら、凰がガバリと顔を上げた。

「アンタも一夏と同じような奴なのねっ！　何よっ！　一人で勘違いして、緊張してた私が馬鹿みたいじゃないっ！！」

「はあ！？　ちょ、何だよ！？　どういうことだよ！？」

「うるさいっ、唐変木っ！！　はあ……どう断ろうかとか、傷つけちゃ悪いなとか、いろいろ考えてたのに……私もう行くから……じゃあ、またね」

頭を抑えて、フラフラと行ってしまった。マズイな、何か悪いことした？　身に覚えがないんだけど……

「アスカく～ん……今のはちょっと……」

「もしかして……アスカくん、鈍い？」

床にずっこけていた女子が皆、俺のことを哀れむような目で見つめてきた。今までとは質の違った視線の包囲網。恐ろしいことに、以前とは比べ物にならないぐらい視線が痛い。何だ？　俺、何か言った？　教えてくれよアスラン！　アンタなら分かるんじゃないか

！？

「み、皆なんでため息ついてるんだ？　ちょっと待ってくれよ、なあ？　俺の何が悪かったんだ？　止めてくれ！　そんな目で俺を見ないでくれ！　いや、だけど待ってくれ！」

原因のはっきりしないまま、俺は一人で玄関に取り残された。あー、もー、何だってんだよ……でも、とりあえず凰には明日謝っておこう……怒らせちゃったみたいだし……

深くため息をついて、とぼとぼと保健室に向かって歩き出す。今度は夕日が本当に悲しく見えて、ついでに言えば、眩しかった。

第四話『明日を乱すもの』（後書き）

どうも、ここまで読んでいただきありがとうございました。
誤字・脱字は是非ご指摘ください。
また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくて二ヶ月間ゲームをハシゴして逃避してしまいます。
お気軽にご感想をください。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

第五話『明日の仲間たち』（前書き）

※以下のことにご注意ください。
・勢いで書いてます。推敲が足りていません。
・不定期更新です。すみません。
・気に入らないことがあったら、遠慮なくおっしゃってください。
・話の切れ目が適当です。なるべく次回は早く更新します。

第五話『明日の仲間たち』

「あー……手が重い」

六月頭の、日曜日の夕方六時ごろ。織斑一夏は、寮の自室でベッドに沈んでいた。たまの休みということで、旧友である五反田の家に遊びに行き、エアホッケーの連勝記録を十六まで伸ばしてきたのだ。名誉ある連勝記録の代償は、腕に鉛のように巻きつく疲労である。

「うーん……」

何の気もなしに部屋を見回してみても、ベッドは一つしか存在していない。先週までは幼馴染である篠ノ之箒と同室だったのだが、ようやく個室が用意されたのだ。個室といっても、キッチン・シャワー付きであり、広さも十分。先週までの慌しさが嘘のようであり、一夏はのんびりとした個室ライフを満喫していた。

慌しさの原因である箒は『学年別個人トーナメントで優勝したら付き合え』をした後すぐに逃走。いったい何に付き合うのかは、聞きそびれてしまった。

学年別個人トーナメント――全員参加の、ＩＳ対決のトーナメント戦。一学年訳百二十名なので、かかる期間が一週間。大規模なイベントであり、それだけ校外からも注目されるのだが――

「優勝、ねえ……」

箒の発言が一夏の頭をよぎる。姉の織斑千冬に恥をかかせないぐらいには、という思いもあったが、今はそれより優勝候補のことが気になっていた。箒の優勝は、まず阻まれるだろう。一つの確信が、

一夏にはあった。

（優勝は、シンだろうな）

シン・アスカ――ＩＳ学園一年一組所属の、二名しかいない男子生徒の内の一人。そして第一学年最強を謳われる男。そして一夏にとって、なくてはならない仲間でもある。

本人の謙遜に加えて、珍しい男子生徒であるからと本気にしないで、はやし立てて言っている生徒も多い。しかし摸擬戦での経験から、一夏はシンの実力を高く評価していた。

理由は分からないが、シンは戦闘そのものに慣れていた。

ＩＳの操縦技術は自分と同様に初心者であるのだが、いざ戦闘を開始するとその動きは自分とは比べ物にならないぐらい洗練されている。敵の動きを見て、どう動くべきなのかを体が知っているようなのだ。

さらに、尋常ではない反応速度もシンの武器である。生身での反応速度から、あの鈴を越えているのだ。ＩＳを装着していても、その速さは頭抜けている。

そして最後。ＩＳの操縦技術や知識、そんなハンデを覆すものを持っている。意志の力だ。あの赤い瞳の中にある、燃えるような意志。どれだけの不利な状況でも、一筋の光を導くもの。度々口にする、守るという言葉。

悔しいが、今の段階で勝ち目はないだろう。現に一夏は、シンとの摸擬戦で一撃も当てられたことが無い。

それでも、一夏はシンに勝ちたいと思っていた。

「……やってやる」

技術も、経験も、能力も――全て自身の上を行っている相手。それでも、負けられないもの。
大切なものを守りたいという気持ちだけは、譲りたくはない。
袖の中のガントレットを宙にかざし、一夏は決意を新たにした。

（また訓練、がんばらないとな）

そこまで考えて、その訓練をいつもシンに見てもらっていることに気付き、一夏は思わず苦笑した。　普段は気にならないが、一つ年上であるからなのか、シンはとても面倒見が良かった。生来の気質でもあるのかもしれない。
意外に子どもっぽいところもあるくせに、時には自分よりずっと大人びた面も見せてくる。
姉が一人いるだけの一夏にとって、シンは友人であると共に、頼りになる兄のようにも思えるのであった。

◇

「お兄ちゃん、今度は映画観に行こうねっ！　約束だよっ！」
「ああ、約束するさ」

六時過ぎの駅のホームは、帰宅する人たちでごった返していた。
これから俺も、その中に混じって学園に戻らなきゃいけない。
けど、今日一日はとても楽しかった。
笑顔で小指を差し出してきたマユと指切りをして、頭をくしゃくしゃとなでると、マユは嬉しそうに目を細めていた。その顔を見ると、俺も胸がいっぱいになる。

「おう、何かあったら連絡しろよ。特に、イグナイテッドの調子がおかしかったらすぐ言えよ？」

「はい、葛城さん。今日はありがとうございました。見送りまでしてもらって……」
「なーに、せっかくの休暇だ。マユと出かけるのも久しぶりだしなあ」

そう言うと葛城さんは、頭をかきながらからからと笑う。普段の白衣姿から一転、シャツにジーパンというラフな格好だけど、相変わらずシャツの着こなしはだらしがない。

ハプニングの中、クラス別対抗戦が終了。というわけで、イグナイテッドの調整、各シルエットのデータの整理、新シルエットの搭載などなど……学園ではできないことをしてもらうために、俺は昨日の夕方から研究所に帰っていた。久しぶりにマユの顔も見たかったし。

そんな俺を気遣って、葛城さんは土曜日の夜の内にＩＳの調整を終了。日曜日は丸一日休みをとって、三人で出かけることにしてくれた。マユのリクエストもあって、一日水族館観光。その水族館、定番のイルカショーも大きな人気なのだけど、なによりユニークなお土産が好評を博しているらしい。特に人気なのが『ドキドキ！マリンクッキー！！』（税込み１０２９円）で、様々な形のクッキーの中、サメ型クッキーを引いたら負けという、パーティーゲームにもってこいな代物。俺もクラスのみんなにお土産ということで、三つほど購入しておいた。

そんなわけで、久方ぶりの家族サービスということも手伝って、マユは一日中楽しそうだった。葛城さんも、マユも、元気そうで何よりだ。

「本当に……ありがとうございました。俺、嬉しかったです」
「いいんだよ、マユも喜んでんだからな。なあ、マユ？」
「うん！　でも、私達のことだけじゃなくて、お父さんもたまには

休まないとダメだよ？」
「ははっ、違いねえや」
三人で笑っていると、先日の乱入者騒ぎも嘘のようだ。誰が、どうして、何のために、全部わからないらしい。この件に関しては口外禁止になっていて、膨大な始末書と一緒に誓約書も書かされたんだけど……大丈夫かな……
「はいっ、これっ！　貸してあげるから読んでおいてね、お兄ちゃん！」
「え？　マユ、これは？」
手渡されたのは一冊の本。カバーがかけてあってタイトルは見えないけど、結構な厚さがある。
「今度観る映画、その本が原作なの！　だからちゃんと読んできてね！」
「へー……分かった。ありがとな、マユ」
「えへへー……」
もう一度頭をなでると、マユの頬が思いっきり緩んだ。つられて俺の頬も緩んでしまう。もうお別れの時間なのが、名残惜しくてたまらない。
「そろそろ電車が来る頃か。じゃあな、シン。今度会うときまでに、渡した装備は使えるようになっとけよ？」
「うえっ！？　まだブラストが残ってるのにですか！？」
「お兄ちゃん、ガンバレ！」
今度は俺が苦笑する番だった。追加された装備二つは――フォー

ス・ソード・ブラストの三つはインパルスと同じだったんだけど――俺の乗っていた機体が元になってはいなかった。まさか“あの二人”の装備とはなあ……けど、だからこそといった気合も入る。二人には笑われたくない。

「じゃあお兄ちゃん、またねっ！」
「ああ、マユも葛城さんも、元気で！」
「おーう、良いデータ待ってるからなー」

改札を抜けて最後にもう一度、二人に敬礼をした。学園に戻ることが寂しい反面、みんなにお土産を渡すのも楽しみだ。
大切な人たちと笑っていられる今、俺は幸せなんだろう。

いつか俺は帰らなければいけないけど。
それでも今だけは、もう少しだけ。

明日も、明後日も、その先も……こうしていられることを望みながら。
駅のホームの階段を、一段ずつゆっくりと上っていった。

そう言えば……映画って何を観るんだろうな？　さっき渡された本が原作って、マユは言ってたなあ。帰ったらちょっと読んでみようっと。

◇

そして月曜日の朝。心機一転、今日からまたがんばるぞ！　と、言いたいところなんだけど……朝から俺は頭を抱えていた。

「まいったなあ……約束しちゃったもんなあ……」
「おはようシン……って、どうしたんだ？　頭抱えたりして」
「あ、一夏。おはよう、実はさ……」

挨拶を交わして早速に相談事。悩みの原因は、昨日マユに渡された本だった。
読書が苦手なわけじゃない。むしろオーブにいたころは本はよく読んでいたぐらいだから、好きな方ではある。でも、内容の好き嫌いぐらいは俺にだってある。

「今度マユと映画を観に行くことになってさ、その原作だから読んできてねって言ってこの本を渡されたんだ」
「ふーん、それで？」
「その本の中身がさ、その……俺の苦手な内容で……」

とりあえず一夏に本を手渡してみる。首をかしげて本を開き、一夏がタイトルを読み上げた。

「“ボクはホントはオンナのコっ！”　……なんだコレ？」
「え、織斑くん、知らないの！？　今すっごく流行ってるんだよ！？」
「今度映画になるんだよね？　いいな～、観に行きたいな～！」

周りで何かのカタログを見ていた女子生徒が、一斉に俺達を取り囲んだ。ああ、女子は好きなんだろうな、こういうの。確かにそういう内容だった。

「なあシン、どういう話だったんだ？」
「それは――」

「えっとね、主人公の『香菜ちゃん』は高校一年生。ホントは女の子なんだけど、お家の事情で男子校に通わなきゃいけなのね！　で、高校のルームメイトになったのが『健一くん』って男の子なんだ！」
「自分が女の子だってバレたら大変！　香菜ちゃんは必死に男の子のフリをします！　ところがルームメイトの健一くん！　香菜ちゃんが女の子だってことにまるで気付きません！　激鈍なんだねっ！」
「でもでも、すっごく優しい健一くんのことを香菜ちゃんは好きになってしまいます！　健一くんが好きっ！　でもそれを言ったら自分は高校にいられなくなっちゃうっ！　さあ、果たして香菜ちゃんは健一くんと結ばれるのかっ！？」

「――っていう話なんだ……」

俺が説明する前に皆が説明してくれたよ、ありがとう。自分で話すのも気が引けていたから良かった。
そう。この本、あまりにも少女趣味と言うかなんと言うかな内容で……つまり、俺の趣味じゃない。これを映画で観るのは非常に遠慮したかった。けど、マユと指きりまでしてしまったので、今更変更なんてできない。ため息の一つや二つ、吐きたくもなる。
あらすじを聞いた一夏は半ば呆れ顔で、苦笑いを浮かべていた。

「……健一くん鈍すぎやしないか？　気付くよな、普通？」
「普通じゃないんだよ、健一くんは。先輩も含めて」

健一くんの先輩である『彰さん』。これもまた、とんでもない先輩だった。過去に行ったことといえば『彼女に同じプレゼントを延々とあげ続けていたら、いつの間にか彼女は自分の親友に取られた』とか、『彼女に指輪をあげた途端に長期間放置。当然、次にあった時には彼女は指輪をしていなかった』とか……優柔不断で、全く頼りになりそうもない。

俺の上司でさえ、普段は頼りなくてもきっちり決めるところは決めたというのに……健一くんは残念なことに、彰さんにアドバイスを求めてしまう。ダメだってば健一くん、そんなヘタレを参考にしちゃ。

「ははは……シン、ドンマイ」
「はあ……上映中に寝ちゃいそうだよ、俺」
「映画ですか……いいですねえ、恋愛映画……」

だらしなく机に突っ伏す俺の耳に、副担任の山田先生の声が入ってきた。顔を上げると、山田先生は少し遠くを見つめてウットリしている。

「映画の中で抱き合う二人……その時、映画館の二人の手もそっと重ねられて……それから……」
「素敵っ！　女の子の夢だよね、山ちゃんっ！」
「山ぴー分かってるなあ……」

先生と一緒に女子生徒が複数名、頬に手を当てて惚けていた。辺りの空気がほわほわとして、ハートマークがふわふわ浮いて……苦手だ、この雰囲気。女子ってどうしてこういう話が好きなんだろうな？　ハートマークを手で払いのけながらそんなことを考えていると、この空気におおよそ似つかわしくない声が教室に入ってきた。

「諸君、おはよう。全員席に着け」
「おはようございます！」

一組担任、織斑先生の一声で教室の雰囲気は一変。みんなが整然と座りなおして、ハートマークはどこかへ逃げていった。流石は織斑先生。俺もその手腕を見習おうか……いや、やっぱり止めとこ。

「今日から訓練機を使用しての本格的な実戦訓練に移る。ＩＳスーツは今日が申し込み日なので、各人のスーツが届くまでは学校指定のものを使ってもらう。忘れたものは学校指定の水着で訓練参加、それもないなら下着で受けてもらうからな」

あー、今日ってスーツの申し込み日だったんだ。皆が見てたカタログはそれだったんだな。うーん……普通はパイロットスーツとかって所属とか階級とかで規格を統一するもんだと思ってたんだけど、ＩＳスーツはかなり自由がきくようになっていて、学園でも個人のスーツ所有が認められている。こんなところでもおしゃれに気を遣うんだな、女子って。

ちなみに俺のスーツは葛城研で作ってもらった。デザインは俺が着ていたＺＡＦＴのパイロットスーツを参考にしているけど、ＦＡＩＴＨのマークは……葛城さんに頼んで消してもらった。

信念・忠誠・信頼……もう俺には、ＦＡＩＴＨを着ける資格があるなんて思えなかったから。

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ」

……って、いけない。連絡事項、聞いてなかった。仕方ない……後で一夏に聞こう。

「今日はみなさんに、なんと転校生を、しかも二名！　紹介します！」

「え……」

「「「えええええっ！？」」」

また転校生がやって来るらしい。教室中がざわざわとして、落ち着きがなくなる。今回は転校生の噂なんて立っていなかったのだから、尚更だ。

「失礼します」

「……」

クラスに入ってきた二人。その姿を見て、クラスは静寂に包まれる。

銀の長髪、左目の黒い眼帯。そして小柄な体から発せられる『軍人』然とした雰囲気。

そしてもう一人。眩い金髪の、貴公子然とした立ち振る舞い。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

唖然とするクラス一同に礼儀正しく挨拶をして、優しそうな笑顔を向けた。

なあ……今度の転校生って……

「お、男……？」

「はい。こちらに同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――」

ついに三人目の男子生徒。しかも一組に一同に揃っている。これなら、女子の反応はそりゃ凄いことに……

「えっと、シャルルだよな？」

「は、はい」

「耳、ふさいだ方が良い……」

「ああ、早くしないと……」

「へ？」

混乱した表情のまま、転校生は耳をふさぐ。次の瞬間――

「「「きゃあああああああ――――――っ！」」」

大きな歓声が教室を、それこそ物理的に震えさせた。もう衝撃波と言ってもいいくらいに。

「男子！　三人目だよ！」

「またタイプの違った！　美形の！」

「神様、このクラスに入れてくださってありがとうございます！今度のお賽銭千円札入れちゃいます！！」

「いけない！　夏コミの予定練り直さないと！！」

「静かにしろ、全く……」

きゃあきゃあとはしゃぐ女子を、織斑先生が面倒だとばかりに一蹴する。織斑先生、ものすごい男前ですね。本人の前で言ったらどうなるかは想像したくないので割愛。

「えっと、み、みなさん。まだ自己紹介終わってませんよー」

その一声で、また教室が静まり返る。これまた見た目から特徴的な転校生が、腕を組んで静かに目を閉じていた。

「挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

従順な返事に正しい敬礼。軍の模範生のようなその動きに、クラスがもう一度唖然とする。ていうか……教官？　なんか一夏から聞

いたけど、事情があって織斑先生はドイツで軍の教官を務めていたらしい。ということは、その関係者？　じゃあまず間違いなく……軍人だな。

「ここでは教官と呼ぶな。織斑先生と呼べ。それから……他の阿呆にも言っているが、敬礼は止めろ。ここは軍じゃない」

「了解しました」

言いながらチラリと俺を見る織斑先生。ああ、俺は阿呆ですかチクショウ……まあ、今だに敬礼の癖が抜けてないから、言い返せるわけないんだけどさ。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「……」

「い、以上ですか？」

「以上だ」

けんもほろろ、一切を拒絶するような返事。何も言うつもりがないらしい。おろおろとする山田先生を尻目に、つかつかと俺の前にやってきて……

「！　貴様が――」

「……っ！？」

腕が大きく振りかぶられ、それが俺の顔面に向かって放たれた。明らかに敵意をむき出しにして近づかれれば、俺だって身構える。いきなり打たれた平手を腕で払いのけた。小柄な体から想像できない、躊躇ない威力。

あまりの展開にみんな、ぽかんと口を開けていた。

「し、シン。大丈夫か？」
「いきなり何するんだよっ！？」
「ほう……受け止めたか。腐っても教官の弟ではある、ということか」

はあ？　弟？　コイツ何言ってるんだ？　それは隣の一夏だろ？

「ラウラ」
「はっ、何でしょうか」
「私の愚弟は、その隣の奴だ」
「っ！？　……了解です……」

一言返事すると、ラウラと呼ばれた生徒は顔を赤くして、俺達二人をキッと睨みつけた。そしてまたつかつかと空いた席に歩いていき、どさっと腰を下ろす。
待て、人違いした挙句に謝りもしないのか？　そもそもいきなり人を叩こうとして何の言葉も無しか？

「おいっ！　アンタどういうつもりだよっ！　聞いてるのかっ！！」
「……」
「アスカ、それぐらいにしておけ。ホームルームはこれで終了。各人、すぐに着替えて第二グラウンドに集合だ。今日は二組と合同で模擬戦闘を行う。解散！」

この話はお終い、とばかりに織斑先生が手を叩いた。正直言って納得できないけど……早いとこ教室から出て行かないといけないから、ぐっとガマンする。
いちいち空いてる更衣室をチェックして、そこまで移動しなければいけないのが辛いところだ。流石に女子と一緒には着替えられない。

「アスカ、デュノアの面倒はお前が見てやれ。ああ、それから今日からお前はデュノアと同室だ。放課後荷物をまとめろ。部屋を移ってもらう」
「はい、了解であります」

勝手に敬礼をしそうになった腕を抑えての返事。部屋の移動か……たいした荷物があるわけじゃないから、移動は楽だな。誰かと相部屋になるのもミネルバ以来だ。

「えっと君がアスカくんで、そちらが織斑くん？　始めまして。僕はシャルル――」
「ああ、挨拶は後にしよう。早く抜けないと」
「シン、俺が前に出る。シャルルは一番後ろがいいな」
「え？」

挨拶の言葉を途中で遮られて、事情が飲み込めていない様子のシャルル。まあ、説明しなくても廊下の様子を見れば分かるはずだ。

「ちょっと走るけど、大丈夫だよな？」
「え？　う、うん」
「心配するなって。シャルルのことは俺が守るからさ」

そう言ってシャルルの手を取って、一夏の後ろにつく。三人で一列縦隊、目指すは第二アリーナの更衣室だ。

「行くぞっ！」
「了解っ！」
「え？　え？　え？」

一夏の声を合図に三人で廊下に飛び出した。他のクラスから覗き

に来た女子たちを次々に抜き去り、階段へと駆け抜けていく。人だかりをかき分け、前へ前へ。

「転校生発見しました！」

「小隊単位で移動中！　速いです、追いつけません！」

「ちいっ！　第二部隊で足止めを！　校舎を出る前に食い止めるのよっ！」

予想通り、今日は女子の人数が半端じゃなかった。ものものしいセリフや通信機が、その気合の入り方を物語っている。通信機なんてどこから持ってきたんだ？　それにいつ部隊が編成されたんだ？

「ここまで来れば安心だな。シャルル、平気か？」

「うん、大丈夫だけど……」

「早く慣れたほうがいいぜ？　しばらくはこんな調子だろうからな」

階段を飛び降りるように下りて、追っ手を振り切り、早々と校舎を出ることができた。速度を落として、駆け足でアリーナに向かう。慣れてくればこれが準備運動代わりになるので、着替え時間の確保に加えてストレッチの時間も多少節約できるわけだ。

「それにしても、何でみんな騒いでるの？」

「え？　男が少ないから目立つんだろ？」

「つまり俺達はウーパールーパー状態なわけ」

まだシャルルは困ったような顔をしていた。ああ、多分ウーパーなんとかが分からないんだろう。確か――

「ウーパールーパー。二〇世紀の珍獣で、昔日本で流行ったんだとさ」

「ち、珍獣？」
「一夏、その例えだと分かり辛いって。パンダならもっとグローバルで……」
「あ、パンダなら知ってるよ。中国のカワイイ珍獣だね。あ……結局珍獣だ」

自分の言ったことに気付いてクスクス笑うシャルル。俺と一夏もつられて、三人で一緒になって笑う。いや、仲間が増えたのはいいことだ。珍獣の仲間だけど。

「よし、到着！　……っと自己紹介がまだだったな。俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」
「俺はシン。シン・アスカだ。シンって呼んでくれ。これからよろしくな」
「うん。二人ともよろしくね。僕のこともシャルルでいいよ」

プシュッとドアの空気が抜ける音を聞きながら、俺達は自己紹介を済ます。シャルルの人懐っこそうな笑顔を見て、さっき叩かれかけた怒りが少し薄まった。全く……ラウラ、だったっけ？　アイツが男じゃなくて良かったよ。男だったらまず間違いなく殴りかかってる。俺も少しは気の短いのが直ったつもりだけど、流石に、突然叩かれそうになれば頭に来るさ。

「えっと……ねえ、シン……」
「どうした？　何でも聞いてくれよ？」
「いや、その……手……」
「ああ、悪い悪い」

そう言えばシャルルと手を繋ぎっぱなしだった。いけない、気をつけないとまた男色家疑惑が浮上する……一夏どころか、シャルル

まで巻き込むわけにはいかないからな。
でも、手を繋いだぐらいでどうしてそんな噂が立つんだ？　ヴィーノはしょっちゅう俺達に抱きついてたのに、誰もそんな噂立てなかったぞ？　……アレか、人柄って奴なのか？　なら俺の人柄は信用されないってことなのか……？　ちょっとショックだ。

「シン、どうしたんだ？　早く着替えちまおうぜ？」
「あ、ああ。そうだな……あれ？　シャルル、どうかした？」
「いや、何でもないよっ！？　き、着替えるから、そのっ、あっち向いてて……」
「ん？　ああ、いいけど……」

どうしたんだろう？　シャルルの奴、なんかもぞもぞして……何か着替えるのに不都合があるのか？
シャツを脱ぎ捨てながら、一夏とお互いに顔を見合わせる。一夏も不思議そうな顔。
そう言えば、こんなシチュエーション……どこかで、見たことあるような、いや、本で読んだことあるような……

「あっ！　思い出した！　シャルル、お前もしかして……」
「っ！？　いや、僕はっ！　それはっ！！」
「ゴメン、気がつかなくてっ！！　俺達は手前で着替えるから！！　シャルルは奥に行ってくれ！！」
「……へっ！？」
「一夏、ほら、こっちだって……」
「なんだ？　シン、どういうことだ？」

気付いていないらしい一夏に、シャルルに聞こえないように声のトーンを抑えて説明する。

「ほら、事故で怪我とか火傷の痕が残ることあるだろ？　あれ見られるの嫌がる人もいるんだって」
「ああ、そういうことか！　やべ、気が回らなかったな……分かった、気をつける」

アカデミーの本に載っていた、仮面をつけた金髪の人。火傷の痕を隠すために仮面を着けてるって話だった。えっと白服のエースパイロットで名前は……なんだったかな、ラウ・なんとかさんだっけ。とにかく、そういうのを気にする人は気にするから、こっちも気を遣わないと。
……なんだかとんでもない勘違いをした気もするけど、気のせいだよな。気のせいな……はず。

「着替え終わったか？　シャルル、悪い。俺ぜんぜん気付かなかった」
「今度から、俺達もっと気をつけるよ」
「い、いや、いいよ別に。ありがとう……」

更衣室を出てグラウンドに向かう道すがら、改めて俺達は謝る。シャルルも許してくれたみたいだ。うーん、懐が広い。どっかの誰か達に見習わせたいよなあ……すぐに木刀振り回す奴を筆頭に。どこで聞かれてるか分からないから、言わないけど……

「シャルルは優しいな。どっかの誰か達に見習わせたいぜ……」
「どっかの誰か達？」
「ああ、木刀振り回す人間凶器の幼馴染とか――」
「っ！？　一夏、それ以上言っちゃダメだっ！？」

しまった。一夏は全く俺と同じことを思っていたらしい。そして、それを口にしてしまっている。さらに言えば、一夏は気付いていな

い。鬼さえも逃げ出しそうな殺気が三つ、背後から近づいてきていることに……

「――すぐに銃を撃つ短気なお嬢様に、これまた短気で口の悪いセカンド幼馴染とかにな」

「シャルル、逃げるぞ」

「へ？」

俺は後ろを振り返らずに、シャルルの手を再び取って全速力で走り出した。きょとんとしている一夏を置いていくのは少し心が痛むけれど、そんなことに構っていられないと俺の中の防衛本能が叫び声をあげる。

「シン、シャルル。何で走るんだ？　まだ時間は余裕が――」

「そうだな、一夏……貴様が念仏を唱える時間はたっぷりあるぞ？」

「ええ……一夏さん。覚悟はできていまして？」

「短気で口が悪くて、何だっけ？　もう一度言ってみなさいよ？」

「――っ！？　箒、セシリア、鈴！？　シン、助け――」

背後から身も心も凍りつくような悲鳴。ゴメン、俺……守るって言ったのに。守るって、言ったのに……頼りにならなくてゴメン。

「シン、一夏のことはいいの？」

「シャルル、一夏のことは忘れちゃいけない。アイツは良い奴だった」

「ぷっ……あははっ！　一夏もシンも、にぎやかで面白いなあっ！」

「何だよ、笑うことないだろっ！？」

「ふふ、シンも笑ってるじゃない」

二人で笑いながら、グラウンドに向かって走り続ける。

今日の訓練も、気を引き締めてがんばろう。
また一人、大切な仲間ができたんだから。
その明日を守れるように。みんなの明日を守れるように。

「おああああああっっっっっっっ！！！！」

それから、遠くで悲鳴をあげ続ける大切な仲間が、無事に明日を迎えられますように。

第五話『明日の仲間たち』（後書き）

どうも、ここまで読んでいただきありがとうございました。
誤字・脱字は是非ご指摘ください。
また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくて『バイクと合体！　ちくわヘルシー究極体！』になった挙句に爆砕してしまいます。
お気軽にご感想をください。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

第六話『明日からよろしくね』（前書き）

※以下のことにご注意ください。
・今回はとても短いです。ごめんなさい。
・次回更新は土日になると思います。
・誤字脱字、バンバンご指摘ください。

第六話『明日からよろしくね』

大切な仲間という尊い犠牲のおかげで、俺とシャルルは授業の開始に間に合った。

六月の頭。まだ梅雨入りしていないおかげで、グラウンドはからっと渇いていて気候も申し分なし。　朝の日差しもさわやかで、時々聞こえる小鳥の鳴き声が、さっきから耳にこびりついていた友の叫び声をさらさらと洗い流してくれる。

「一夏、お前の犠牲は無駄じゃなかったぞ……」

整列に加わりながら、神妙な面持ちで遠い空に向かって敬礼。失言には気をつけよう、マジで。

そんな俺の様子がおかしかったのか、隣のシャルルも周りの女子もクスクスと笑っていたけれど、今は笑われても構いやしない。そうさ……散っていった友の無念に比べれば……

「アスカ。織斑、オルコット、篠ノ之、凰《ファン》がいないようだがどうした？」

「はっ！　一夏が他三名の手にかかって星にされているはずです！」

「そうか。後で全員ペナルティだな」

織斑先生の詰問に対して、友を庇いたてる言い訳もせずに正直に報告。腕組みをといて出席簿を振るう姿は、鬼教官のそれだった。

三人の魔の手から逃れたとしても、今度は鬼教官の手によって地獄に突き落とされる一夏。悪いな……後で薬塗ったり、包帯巻いたりぐらいは手伝うから。

「授業には絶対遅れないようにな、シャルル。もし遅刻したら……」

「そうだね。ああなるのはちょっと遠慮したいかな」

そう言ってシャルルが目をやった先では、四人が仲良く出席簿とスキンシップを始めている。バシンッ！　バシンッ！　バシンッ！

バシンッ！　広いグラウンドに四つ、渇いた音が鳴り響いた。

◇

「専用機持ちはアスカ、織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰だな。今回は八人グループになって実習を行う」

織斑先生が手を叩いて合図をする。今日からは実戦訓練だ。実践演習も見せてみよう、ということで、さっきまで山田先生がセシリアと凰の相手をしていたんだけど……二人は見事に惨敗を喫していた。連携の取れてない二人を軽くあしらった山田先生は、皆の見る目が変わったことに気付いて、自信ありげに胸を張っている。山田先生、あんなに動けたんだな……知らなかった。入学試験では手加減してたんだろうな。

「アスカ以外の専用機持ち五人がグループリーダーを担当するように。出席番号順に一人ずつ各グループに入ること。いいな？　では分かれろ」

「へ？　あの、織斑先生。俺は……」

「お前は山田先生と一緒に各グループの見回りだ」

「あ、はい。了解です」

とりあえずテケテケと山田先生の隣まで歩いて、指示を待つことにする。山田先生は上機嫌で、いつもみたいに慌てた様子もなく各グループに訓練機を配っていた。これなら俺必要ないんじゃないか？　ちょっと楽ができそうだ。

「アスカくんはグループを一つずつ回ってください。なるべく女子だけのグループの方にいてくださいね？　そうじゃないと不公平ですから」
「不公平？　や、山田先生、俺だけ外されたのって……」
「がんばってきてくださいっ！」

にっこり笑って山田先生に送り出された。ああ、そういうことか。女子生徒のサービスに俺が各グループを回るってことね……ちっとも楽できそうにないや。
愚痴を言ってても仕方がないので、セシリアの班から順番に見ていくことにした。まあ、見てるだけなら大丈夫だろう、と軽く考えてグラウンドを歩き出す。

そんな淡い期待は、脆くも打ち破られることになったんだけど。

◇

「……ゴメン、一夏。多分お前を見捨てたから罰が当たったんだ」
「いや、あれはどうしようもなかった。失言した俺のせいだ」

昼休み。屋上。咲き誇る花と、石畳に円テーブル。華やかな椅子に。最高の日差し。まるで庭園のように手を入れられたその場所で、俺は天を仰いでいた。

各グループの見回りだって？　見ているだけだって？　冗談じゃない。
実質三班が全部、俺の担当の班みたいなものだった。
なにしろ、女子がみんな“俺に”アレコレ頼んでくるのだ。班長を無視して。

『アスカくん、私パラメータの見方が分からないの！』
『私は起動シークエンス！　教えて教えてっ！』
『実は動かし方から分かりません！　手取り足取り教えてくださいっ！』
『『『『『アスカくんっ！』』』』』

……あれだけの要求を全てこなせたのだから、もしかしたら俺には教官の素質があるのかもしれない。いや、素質があったとしても無理だ。教官には絶対になりたくないよ。先生方はいつもこんな苦労をしてたんですね、お疲れ様です。

そんなこんなで、セシリア班、凰班、そしていたたまれない空気全開のラウラ班の三つを回るだけで俺の精神は限界を突破。逃げるように……というか、シャルル目当ての女子で埋め尽くされている食堂から本当に逃げてきて、ようやく人心地がついたところだった。

「失言は許してやろう。しかし……どういうことだ」
「ん？　折角の昼飯だし、天気もすげーいいし、大勢で食ったほうがうまいだろ」

俺の知らないところで昼食の約束をしていたらしい。なぜだか分からないけど、篠ノ之が不満げに呟いていた。セシリアも凰も、それぞれが妙な緊張感を保ちながら座っている。もうそんなことに気を遣ってられるほど元気じゃない俺は、椅子に力なく腰掛けながら、購買のパンの包みを開けていた。

「えっと、シン。本当にご馳走になって良かったのかな？」
「遠慮するなって。朝のお詫びと、転校祝いだからさ。それぐらいしかしてやれなくて悪い」

で、俺の隣に座っているシャルル。昼食は食堂でパンを買うとの話だったので、お金は俺が全部持ってそのまま屋上に誘うことに。女子の誘いを丁寧に断っていくその様子は、まるでテレビか映画に出てくる紳士そのものだった。どうしたらあんな振る舞いが身に着くんだろうな？　まあ、俺が知ったところで真似しても似合わないだろうから、いっか。

「困ったことがあったらすぐに言ってくれ。数少ない男子なんだから、俺も一夏も協力するよ」

「ああ、ＩＳのこと以外はなんでも聞いてくれ」

「ありがとう。二人とも優しくて助かるよ」

笑顔のシャルルに敬礼で返事。特に俺はシャルルと同室になるんだから、できるだけサポートしないと。俺も一夏も最初のうちは手探りの生活だったから、シャルルにはそんな苦労をかけさせたくない。いや、マジで大変だったからなあ。

「そうだ、一夏。午後の授業はＩＳ整備らしいけど復習してあるか？　前に白式の調整した時に教えたことを覚えてれば、午後はバッチリだぞ？」

「おお、大丈夫だ。いつもいつも助かるぜ」

放っておけない仲間がもう一人。俺も一夏も学園生活には慣れてきたんだけど、まだ慣れなきゃいけないものはたくさんある。機械の整備に戦術理論の勉強なんて普通の学校で教えることじゃないから、そういった経験のない一夏は大変だ。なので、俺も手伝えることはなるべく手伝うようにしていた。ルナも言っていたように、困った時はお互い様ってことだ。

「ははっ、シンってば一夏のお兄さんみたいだね」

「え、俺が？」
「千冬姉よりよっぽど優しいからなあ、嬉しい限りだ」
そんな大したことしてるわけじゃないのに。でも、そう言ってくれると俺もちょっと誇らしい。思わず鼻の頭をぽりぽりかいてしまう。

「そんな、俺なんか――」
「アスカが兄？　それにしてはコイツは大人気ないな」
「まあ、面倒見の良い所は認めますわ」
「あと似なくて良いところが似てるわね。鈍いところとか」
半眼の女子三人がチラリとこっちを見て、口々に冷ややかな言葉を浴びせる。大人気ない？　自分のことを棚に上げてモノを言いやがってコイツら……ちょっとカチンときたけど、出かかった皮肉の言葉を無理やりに飲み込んだ。もしここで

『へえー。優しくて大人なお姉さん方三人は弟をいじめたうえに、その弟と一緒になって怒られるんですね？　ああ、こういうことを言うから俺は子どもなんだって？　悪いなあ一夏。でも、大人気ないお兄さんはお前をいじめたりしないからな』

なんて言おうものなら、ステラと約束した大切な明日が消し飛ぶ。女尊男卑。女性は強い。男は弱い。
「はいはい、俺は大人気ないですよっと」
「そういう言い方が大人気ない――ってシン、どこいくのよ？」
「取りに行くものがあるから。みんなはここで待っててくれ」
パンをほおばったままさっさと走り出す俺。せっかくみんなで集まってるんだから、今の内にアレを使うことにしよう。

◇

「お待たせみんな。ほら、これ、お土産」

テーブルの上に水族館の土産を置くと、みんなの視線がそこに集中する。

仲良しグループとの楽しい昼食。こんな時にぴったりのお土産、その名も――

「あ、これ『ドキドキ！　マリンクッキー！！』じゃん」

「何だ、それは？」

「まあ、箱を開けてみたら分かるって」

女子の文化に疎そうな篠ノ之。知名度が高いというこのクッキーも知らなかったらしくて、首をかしげて覗き込んでいた。

サメの口の形になっている箱を開けると、中には説明書が入っている。それを取り出した篠ノ之がツラツラと読み上げた。

「なになに……『ゲームのルールだよっ！

一・順番を決めてねっ！

二・順番にクッキーを取り出してねっ！

三・サメの形のクッキーを取った人が負けっ！

四・負けた人は、パッケージの底に書いてある罰ゲームだよっ！』

……だそうだ」

「へー、なんだか面白そうだね」

「クッキーでしたら、食後のお茶うけにもちょうど良いですしね」

「罰ゲームか……嫌な予感しかしねえ」

「シン、やるじゃない。順番どうする？」

「席の順で良いんじゃないか？」

それなりに好意的な反応が返ってきたので、レッツ・プレイ。順番は凰・セシリア・篠ノ之・一夏・俺・シャルルだ。みんながテーブルの中央、サメの口に順々に手を入れていく。

「よっと……カメね。セーフ」
「わたくしは……ペンギンですわ」
「これは星か？　いや、ヒトデだな」
「どれどれっと、これはクラゲか？」
「俺は……タコか。セーフだな」
「僕はエイかな。うん、おいしいや。」

最初は和やかに始まったゲームも、二巡、三巡としていくうちに嫌でも緊張感が高まっていく。サメの口に伸びる手は、噛み付かれることを恐れるように、次第に慎重になっていった。段々クッキーを味わう余裕が無くなってきたぞ、おい。

「「「「「「「……」」」」」」」

そして最後の一巡。未だにサメを引き当てたやつはいない。残りは六つ、俺の順番は最後から二番目。つまり、誰かが先にサメを引かなければ、俺の負けはかなりの高確率になる。ここまで来たら負けたくない。

「わ、私の番ね……」

凰が恐る恐る箱に手を入れる。その手に掴まれていたのは――

「イルカっ！　やった、私はあがりねっ！」
「くうっ……わたくしの番……」

ぐっとガッツポーズを取る凰と対照的に、緊張した面持ちのセシリア。その手を残り四人が固唾を呑んで見守る。

「――ふふっ！　ラッコですわ。当然の成り行きですわね」

オホホと笑うセシリア。残り四人。次は篠ノ之だ。

「ふーっ……はあっ！」

目を閉じて深呼吸をした後、気合を込めて箱から手を取り出す。頼む。そろそろサメが出てきてもいい頃だっ！

「ふん、シロクマだ。日ごろの修練の結果だな」

篠ノ乃は腕を組んで勝ち誇っていた。いつからお前はクッキーを取り出す訓練をしてたんだ？　……じゃない。女子三人は抜けた。残りは俺たち男子三人。

「シン、シャルル」

「え、何？」

「一夏、どうしたんだ？」

一夏は手を箱の上に伸ばしたまま、クッキーを引かずに俺たちを見た。ニヤッと笑うと、コブシをぎゅっと握る。

「恨みっこなしだぜ？　――うおおおっっ！　来いっ！」

確立三分の一！　先に抜けた三人も俺もシャルルも、みんなが身を乗り出して一夏の手に掴まれたもの、勝負の行方を見守る。一夏

の手が、サメの口から脱出して天へと駆け上がっていく。穏やかな午後の光に照らされたものは――

「サメっ！　一夏の負けだねっ！」

「ぐっ……ちくしょう、だから嫌な予感がしてたんだ……」

一夏は肩を落としてクッキーをポリポリかじる。その後ろを女子三人が取り囲んで『情けない』だの『日ごろの行いのせいだ』だの言って追い討ち。助かった俺とシャルルはその後ろでハイタッチを交わし、残ったクッキーに手をつけていた。さて、罰ゲームの内容は何だろうな？

「ま、どうせたいした罰ゲームじゃな――」

ポトリ、空になった箱が地面に落下する。

箱の中の指示を見た途端、一夏は凍りついたように動かなくなってしまった。真っ青な顔で何もない虚空を見つめている。

「おい、どんな内容なんだ……」

箱を拾い上げて、五人で箱の中の文字を目で追っていく。

意地の悪そうなサメの絵と吹き出し。

その文字列の意味を脳が処理し終わった時、俺たちは全員吹き出していた。

◇

夜になって部屋を移動した俺は、新しくなった部屋でシャルルと談笑していた。一夏は事情があって、今日は一日来れないだろう。

「それにしても……負けなくて良かったね、シン」
「うん……一夏は気の毒だけど」

負けなくて良かったってのは、あの『ドキドキ！　マリンビスケット！！』のことだ。あんな恐ろしい罰ゲームだとは思いもしなくて、気楽に買ってきてしまった自分が恨めしい。
恐怖の罰ゲーム。一夏が引き当てた罰は
『今日一日は語尾に“マリンっ！”を付けること！　例外は認めないからなっ！』
という噴飯ものの内容。流石に織斑先生の前でそんな真似をしたらシャレにならないので免除はしたものの、それ以外では本当に一夏は語尾に“マリンっ！”を付けてしゃべるはめに。
その様子はそれはもうおかしくて、今日一夏と話をして笑わなかった人は（織斑先生を除いて）いないぐらいだ。きっと一夏の心には深い傷が残ったことだろう。明日から口数が減るかもしれない。
ちなみに、一夏がこの部屋に来られない原因がコレ。語尾にマリンを付けたまま話すのは嫌だって。さらに、それで済まなかったのが一夏の不運なところだった。

「食堂も大騒ぎだったし、一夏は厄日だったんだな」
「すごい盛り上がり方だったね。びっくりしたなあ」

一夏が受けた罰ゲームの事情を聞いた一年一組の生徒は『すっごく面白そうっ！』と言って食堂に集合。第二回の『ドキドキ！　マリンクッキー！！』を開始してしまった。そして一組生徒は強制参加。俺もシャルルも……一夏も参加することに。
それでも、ゲームに負けたのは一夏じゃなかった。負けたのは、一夏の隣にいた篠ノ之。普段の固い口調に“マリンっ！”がつくのはさぞ面白い光景だろう。そう思ってみんな笑っていたんだけど…

…『ドキドキ！　マリンクッキー！！』の罰ゲームは一種類じゃなかった。どうやら、箱毎に罰ゲームの内容が違うらしい。
篠ノ之が受けた罰ゲームは――
『前の順番の人にロマンチックな告白を！　あ、告白された奴はちゃんと返事しろよっ！』
だった。前の奴？　もちろん一夏だ。今でも思い出すと……ダメだ、笑っちゃ……いや、でも、アレは……
『一夏……私はずっとお前のことが――っ！　好きだった！　好きだっ、一夏あっ！』
『――俺もお前のことが、箒のことが好きだマリンっ！』
コレを聞いて笑うなってのが無理な話だろ？　二人とも顔を真っ赤にして、篠ノ之は耐えられなくなったのか木刀で一夏に殴りかかり出した。アレは確かに恥ずかしい。ていうか一夏、よくあんな状況でまで罰ゲームにこだわれたな。
まあ、そんなこんなで心身ぼろぼろの一夏。今日はもう誰かに会いたくないそうだ。だよなあ。

「今日はにぎやか過ぎるぐらいだったけど、これから少しずつ落ち着くと思うから安心してくれ」
「うん、分かった」
「放課後の訓練も明日からかな。シャルルも良かったらどうだ？俺も一夏も歓迎するよ」
「いいの？　じゃあ、僕も仲間に加えさせてもらうよ。専用機もあるから少しくらいは役に立てると思うんだ」
「ああ、決まりだな。」

コーヒーカップを片手に落ち着いた会話。一人部屋が寂しかったわけじゃないんだけど、こうやって話し相手がいるとすごく気持ち

が楽になる。シャルルは物腰が柔らかだから、こっちも気を置かずに話せるのがありがたい。
そう言えば、レイともこんな風にコーヒーを飲みながら話してたっけ。訓練の愚痴を言ったり、授業の予習を手伝ってもらったり、たまに怒ったり怒られたり、船に乗ってもそれは変わらなくて、時には大事なことを打ち明けあって……俺にとって最高の親友だった。

なあレイ、俺もお前みたいになれるかな？　厳しいところもあったけど、頼りがいがあって、優しくてさ。アカデミーからずっと、俺の兄貴分はレイだったんだ。お前のこと、俺すっごく尊敬してた。
だからさ、俺もお前みたいにがんばるよ。お前の分の明日も生きて、みんなを守ってみせる。

「シン？　どうかしたの？」
「なあ、シャルル……」

コーヒーを飲み干して、カップを置く。今は遠い親友と、今ここにいる仲間にむけて。

「俺が必ず、シャルルのことを守ってみせる」
「えっ……？」
「約束だ」

守ってみせる。大切な仲間達、大切なもの。今度こそ、全て。

「う、うん……ありがとう、シン」

そう言うとシャルルは、はにかんだように笑った。トクンッと一つ、心臓が大きく跳ねる。えっと、どうしてだ？

「と、とりあえず明日からよろしくな。カップは俺が片づけるから」
「うん、よろしくね」
顔を合わせていられなくて、慌ててカップを持ってキッチンに入る。その後は早めに消灯して寝ることにした。

どうしてなんだ？

真っ暗な部屋で目をつぶっていても、まぶたにはさっきのシャルルの笑顔が張り付いている。思い出すたびに、なんだか心がざわつく。

どうして、だ？
シャルルの見せた、あの笑顔。
見た目も声もまるで違うのに、重なるものがあった。

メサイアで……最後の出撃の時に見せた、レイの笑顔に。

第六話『明日からよろしくね』（後書き）

どうも、ここまで読んでいただきありがとうございました。
誤字・脱字は是非ご指摘ください。
また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくて『グォレンダァ！』してしまいます。
お気軽にご感想をください。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

第七話『君がくれる明日』（前書き）

※以下のことにご注意ください。
・今回も短いです。ごめんなさい。
・執筆時、頭が働いていません。本文中にも不備があると思いますので、ご指摘はバンバンお願いします。

第七話『君がくれる明日』

フランス代表候補生シャルルと、ドイツ代表候補生のラウラ。二人の転校生を迎えて、俺の学園生活はますます賑やかになっていた。相変わらず勉強と訓練は大変だけど、シャルルという心強い仲間が増えたおかげで、それも随分とはかどるようになった。

なにしろシャルル、俺と一夏に欠けていたＩＳの『知識』がある。完全素人の一夏に、戦闘に関すること以外はダメダメな俺と比べたら、その差はまさに『月とすっぽん』ってやつだ。というわけで、いつものメンバーにシャルルを加えて、俺たちは午後の訓練に精を出していた。

「なあ一夏。シャルルの射撃を回避するのはいいけど、その後の姿勢まで考えられたか？　崩れた姿勢に第二射、第三射って直撃させられただろ？」

「確かに……第一射は避けられたんだけどなあ」

「最初の射撃は牽制だったからね。一夏はそれに引っかかっちゃったんだよ」

「うっ……そうだったのか……」

軽い摸擬戦の後の反省会。今回は一夏とシャルルで試合をして、結果の分析をしているところだ。語尾にマリンというトラウマを乗り越えて、一夏も結構動けるようになったんだけど、まだまだ射撃への対応が弱い。接近戦しかできない一夏が戦い抜くには、どうしても射撃をかいくぐる技量が必要になってくる。

「射撃武器の特性も把握しないと、今みたいに回避先を誘導されて追撃されるからね」

「それに一夏は『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』に頼りすぎだ。アレは奇襲をかけるた

めのものだったろ？　何度も使ってれば、いくら速くても簡単に捌けるさ。動きも直線的だし」
「うーむ……なるほど」

実際に模擬戦をした相手からのアドバイスに、それを観戦していた側のアドバイス。これなら今までより効率良く戦闘のレクチャーができる。シャルルの説明は分かりやすくて丁寧だから、その分の上乗せもあって更に効率的に。いや、今までだって摸擬戦の相手は俺以外にもいたんだけど、その相手が――

「私のアドバイスを聞いていなかったのか？　軟弱な奴め」
「せっかく人が親切に教えてあげたってのにさあ」
「わたくしの理路整然とした説明があったというのに」

向こうで文句を言っている三人だ。篠ノ乃と凰（ファン）の二人は説明が感覚的すぎて、まず理解ができない。逆にセシリアの場合、説明が整然としすぎて意味が分からない。過ぎたるはなお及ばざるが如し、三人にちょうど良いっていう言葉はないらしい。

ちなみに篠ノ乃の奴は、この前の『マリンクッキー食堂大暴れ事件』以来、一夏と会っても顔を真っ赤にして無視をしてばかり。一夏も『罰ゲームとは言え、そんなに嫌だったのか？　結構ショックだな……』としょげていたので、俺も付き添って二人で謝ってみた。そうしたら今度は『この鈍感朴念仁兄弟めっ！』って怒鳴られて……その時は逃げ帰ったんだけど、どうやらもう許してくれたみたいだ。怒鳴られた原因が分からないままなのは、この際置いておくとしよう。

「一夏の『白式』には後付武装（イコライザ）がないんだよね？　それって多分、ワンオフ・アビリティーに容量を使ってるからかな」
「ワンオフ・アビリティーって……シン、なんだっけ？」

「いや、俺も覚えてない……シャルル、それって何？」

後ろで呆れてため息をついている三人を無視して、俺たちはシャルルに尋ねた。繰り返すけど、俺と一夏に『知識』はない。でも、今はそれを補ってくれる仲間がいる。友情って素晴らしい。

「言葉通り、唯一使用の特殊才能（ワンオフ アビリティー）のことだよ。白式だったら『零落白夜』だし、シンの『イグナイテッド』なら、あの特殊装甲がそうなのかな」

「『フェイズシフト』のことか？　へー、そうだったんだ」

特殊装甲フェイズシフトは、実体弾・実剣のダメージを相転移・無効化する。モビルスーツには結構搭載されてたし、インパルスにも使われたから特別なものって認識はなかったんだけど……言われてみれば、今までフェイズシフト装甲が使われてるＩＳって見たことなかった気がする。

「第一形態でのアビリティーの発現なんて前例がないから、白式の拡張領域（バススロット）が空いてないのもおかしくないんだけど……」

「でも、シンのイグナイテッドはどうなんだ？　メチャクチャな容量があるぜ？」

「それは僕にも……戦闘中にパッケージの換装ができる機体ってのも聞いたことがないよ」

やっぱりシャルルでも分からないらしい。勝手に装甲を作るわ、追加武装の設計をするわ、それにプロテクトをかけて使えなくするわ……イグナイテッドは本当に良く分からない代物だった。そもそも、なんで女性にも使えなかった『欠陥品中の欠陥品』が俺に使えたのかも分からない。ていうか、俺がこの世界にいるのも……ああ、やめたやめた。

「考えても仕方ないか。とりあえず話を先に進めよう」
「それもそうだね。折角だし、一夏も射撃武器を使ってみる？」
「え、他の奴の装備って使えるのか？」
「所有者が許可を出せばね」

そう言ってシャルルが銃を一夏に渡した。この調子なら俺が見てなくても良さそうだし、自分の訓練でもさせてもらおうかな。

「シャルル、一夏のこと見ててもらっていいか？　俺もコイツの練習が必要だからさ」
「うん、良いよ。けど、その鉄パイプはどうしたの？」
「いろいろ事情があってさ……これを使いこなせるようにならないといけないんだ」

俺の手に握られているのは、研究所で散々お世話になったあの鉄パイプだった。次のシルエットの開放の鍵。それがこの鉄パイプだ。
長距離射撃戦対応装備、ブラストシルエット――大口径ビーム砲にレールガン、さらに連装ミサイルランチャーに接近戦用のビームジャベリンを備える火力重視の装備だ。未だにプロテクトが解除されていないこの装備。その理由は接近戦用のジャベリンだ。
モビルスーツでもＩＳでも、照準を付けて引き金を引く作業は変わらない。ブラストの装備はほとんど射撃武器だから、感覚の違いに戸惑うことも少ない。きっと手早くプロテクトも解除されるはずって思ってたんだけど……ビームジャベリンのこと、すっかり忘れてた。槍を使った経験？　せいぜいアカデミーで使った銃剣が関の山。
というわけで、またしても俺はＩＳを装着して鉄パイプを振り回すはめになった。今度は鉄パイプをブン投げて、的に命中させられないといけないらしい。傍から見たら、変なことやってるように思

われるんだろうなあ……ＩＳの訓練なのに、鉄パイプで槍投げって。そうだ、セシリアのビットでも的にさせてもらおうかな。流石に怒るかな？

「ねえ、あれってドイツの第三世代型じゃない？」
「ホントだ。まだ試験運用中じゃないの？」

アリーナいっぱいに詰め込まれた生徒が一斉にざわつき始めた。だれかにぶつけないようにと端っこに歩き始めていた俺も、そのざわめきの中心に目を向ける。
黒い装甲を身にまとった、銀髪のその姿。ラウラだ。自分に視線が集まるのを意にも介せず、その赤い瞳の先には、一夏がいた。刹那、視界に映し出されたウインドウ。戦闘状態の確認、熱源の感知、発砲――

「っ！？」
「……ふん、また止めたか」
「アンタ、どういうつもりだ」

右肩のレールカノンが煙をあげている――ラウラはいきなり、気付いてない一夏に向かって発砲したんだ。なんとか割って入れたけど、これだけ大勢の人がいる中で……何を考えてるんだ。

「やはり、な」
「何がだよ」

無表情だったラウラの顔に薄笑いが浮かんだ。冷たいその笑みが、周囲の空気を凍りつかせる。首筋には、俺が当てているナイフがあるにも関わらずに。

「どこでそのナイフを覚えた？　抜き方も構えも、素人のものじゃないな」
「アンタには関係ない。どういうつもりかって、聞いてるんだ」
「答える気がないならそれでいい」

そう言うとラウラはナイフに手を添えて、ゆっくりとそれを下ろした。薄笑いは消えて、表情のない顔を、俺と一夏に向ける。

「貴様はなぜそいつと一緒にいる？　貴様には力がある。そいつと違ってな」
「力があったら、どうだって言うんだ」
「簡単なことだ。ここは貴様の居場所ではない。こんな程度の低い場所で、何ができる」
「俺は自分の意思でここにいる。アンタに指図される筋合いはない」
「助言だ。ここにいて強くなれるのか？　ここでどんな力が手に入るというんだ？」
「ここにいるから俺は強くなれるんだ。アンタの言う力は、もう俺には必要ない」
「力は力だろう？　貴様も私と同じ場所にいたはずだ。そこで必要なのは、力だけだ」
「それで何ができる？　何が変えられる？　力だけで、何も変わりはしなかったさ」

お互いににらみ合ったまま、その先の言葉は出てこなかった。

『そこの生徒！　いったい何をやっている！』
「……今日は引いてやる。だがな、覚えておけ。私は貴様らを認めない。力の無い奴も、力を無駄にする奴もだ」

スピーカーからの声を聞くと、ラウラは戦闘状態を解除した。去

り際にもう一度はき捨てるように言って、アリーナをあとにする。
「お、おい、シン。平気か？」
「シン、大丈夫？」
「平気だ。二人とも怪我はないな？　なら、もう今日は帰ろう」
二人の返事を待たないで、アリーナの入り口に足を運ぶ。
これ以上アリーナにいるのも気分が悪いし、自分でも少し頭を冷やしたかった。

◇

「さっきはゴメンな。ちょっとイライラしてて」
「ううん、気にしてないよ」
部屋に戻ってきたところで、少し気持ちが静まった。帰りの道すがらも、三人ともほとんどしゃべらなかった。何か言われても生返事しかしてなかった気がする。一夏にも謝っておかないと。
「夕食まで時間あるけど、シャワーはどうする？」
「……」
「？　シャルル？」
「あ、ゴメン。先にいただいていいかな？」
「了解」
パタパタとシャワー室に入っていくシャルルの様子は、どこか元気がなかった。気、遣わせちゃったのかな。
「シン、シャルル、いるか！？」
「ああ、一夏か。どうしたんだ？」

ドアの前にいる一夏は、上機嫌なのが見てとれる。だいたいこういう表情の時、一夏は浮かれていることが多い。

「機嫌良いみたいだけど、何かあったのか？」

「さっき山田先生が教えてくれたんだが、今月下旬から大浴場が使えるらしいぜ！」

「本当か！？　やったな一夏！」

小躍りしている一夏ほどじゃないけど、俺も風呂に入れるのは嬉しい。研究所では入れていた分、学園で入れなくなったのは地味に痛かったりする。風呂があるのに入れないっていうのはやっぱり寂しいし。

「へへっ、どうだ？　二人とも元気なかったけど、これで元気出してくれよ？」

「ああ、サンキュ。シャルルにも伝えとくよ」

お互いに敬礼をすると、一夏は自分の部屋に戻っていった。一夏にも気を遣わせてたみたいだ。はあ……こんなんじゃいけないって分かってるんだけど……それでもやっぱりラウラとの一件は、俺の胸に重くのしかかっていた。

◇

案の定その日の夜になっても、俺は寝付けないでいた。アリーナでの出来事、ラウラに言われたことが頭の中をぐるぐる回っている。目がさえて、眠れない。

かつての俺と同じ、力への執着。自分を突き動かす、暴力的な衝

動。
目の前にいるのは敵だ、撃て、壊せ、なぎ払え、そうして動けなくさせればいい。力の叫びに飲み込まれて、何も考えられなくなる。
はやる気持ち、思いを抑えきれなかった。振り返る余裕なんてまるでなかった。目の前の敵を倒すことが全てで、大事なものを無くしていった。
自分とラウラでは力を求める理由は違うはずだ。けど、理由が何であっても……アイツは力を求めている。危険な方向に、誰かへの敵意を交えて。

俺を止めてくれたのはアスランだ。
なら、ラウラは誰が止めるんだ？　誰かが止めてくれるのか？
もし止めてくれなかったら、ラウラはどうなるんだ？
いつか俺みたいに、全部無くすのか？

そんなこと、させたくない。俺が止めなきゃ……いけないんだ。
力に囚われてた、俺が。
今月末の学年別個人トーナメント――誰にも負けるわけにはいかない。どんな奴が相手でも、俺は負けない。

ふう、とため息が出た。勝つって思うのは簡単だけど、実際に勝つにはまだまだ訓練が足りない。まずはブラストシルエットを使えるようにしないと。長距離射撃戦にまで対応できれば、かなりのアドバンテージになる。トーナメント戦では相手次第で相性が変わるから、全距離で対応できるってのは有利だ。鉄パイプには、もっとがんばってもらわないとなあ。
それから、もう一つ。トーナメントに勝つための奥の手を考えてある。フォース・ソード・ブラストの三つが開放されれば練習もできるんだけど……訓練の手伝い、シャルルに頼むしかないか。シャルル、アリーナを出てから元気なかったけど……大丈夫かな。

「……さ……ん」
「ん？　シャルル、起きてるのか……？」

ベットから上半身を起こして、隣にいるシャルルに声をかけた。こっちに向けた背中が震えている。両手で自分の体を抱きしめるようにして、身を縮めて、何かを呟いている。小柄な体が一層小さく、か弱く見えた。

「お母さん……」
「シャルル？　うなされてる、のか……？」

シャルルの口にした母さんという一言が、心臓を強く打ちつけた。スタンドの電気を点け、布団を蹴飛ばして、シャルルのベットに駆け寄る。放っては置けない。

「シャルル。大丈夫か？　起きろ、シャルル。大丈夫だから……」
「う……ん、あれ……シン、どうして……？」

シャルルが向けた顔に光る、涙の跡。自分でも気付いたのか、慌ててゴシゴシとぬぐったけれど、跡は消えなかった。

「うなされてたみたいだったからさ……大丈夫か？　今、水持ってくる」
「う、うん……」

水を入れる間にも、脳裏には悪夢がよみがえる。俺も見てきた、何度も何度も。
バラバラの家族の死体。飛び回るモビルスーツ。
雪の降るベルリン。目の前で吹き飛ぶステラの姿。

落ちていく青いモビルスーツ。とどろく雷鳴。
夜中に跳ね起きるなんて、珍しくもなかった。

「ほら……落ち着くから」
「うん、ありがと」

コップの水をこくこくと飲むシャルル。その視線は沈んだまま、布団をじっと見つめている。少しの間、沈黙が俺たちの間を包んだ。

「……なあ、シャルル。その、今日元気なかったけど、何か悩みでもあるのか？　俺で良かったら、相談に乗るけど……」
「ううん、ちょっと夢見が悪かっただけだから……気にしないで」

そう言ってシャルルは笑うと、コップを俺に渡してきた。前に見せた笑顔じゃない。いつも見せる笑顔でもない。明らかに無理をしている、作り笑い。

「お母さんって、言ってた」
「……っ！？」

誰にでも、触れてほしくないことはある。頭で分かっていても、聞かずにいられなかった。放っておきたくなかった。

「無理に聞くわけじゃないけど……何かあったのか？」
「……」

布団の端をぎゅっと握りしめて、シャルルはうつむいて黙ってしまった。また長い沈黙が続く。やっぱり、みだりに人に聞かれたくないことなのかもしれない。諦めて戻ろうかとも思ったその時、ポツリポツリとシャルルが語り出した。

「お母さん……僕をずっと、育ててくれてたんだけど……」
「……」
「父はいないようなものだったから、一人で、ずっと……」
「うん……」
「二年前に、亡くなって……それから、僕は一人で……」
そこで一度言葉が止まった。肩を震わせて、なんとか搾り出すような声で続ける。
「ここにいていいか、分からないんだ。僕は……」
「ここにいて……？」
「シンと違う。はっきりした意志があるわけじゃない。僕は……ここにいていいの？」
「シャルル……大丈夫だから」
「え……？」

震えるシャルルの手を握りしめる。自分の言葉でどこまで伝えられるだろうか。けど、伝えたいことがある。大切なことだ。
「俺もさ、ちょっと前まで研究所にいたんだ。そこでずっと、悩んでた。自分はここにいていいのか、自分がここで幸せでいいのか、ってさ」
「……」
「けど、そこで教えてもらったんだ。『誰だって、自分の大事な人には幸せでいてほしい』って。なあ、シャルルはここにいてどう思う？」
「ここにいて……」
目を閉じただけで、短い間だけど多くのことが思い出せる。

初めて一夏に会った時のこと。
セシリアと決闘した時のこと。
篠ノ乃が俺を助けてくれた時のこと。
凰に怒られた時のこと。
シャルルが来た時のこと。

「俺はすっごく幸せだ。たまに騒がしすぎることもあるけど、一夏がいて、篠ノ乃がいて、セシリア、凰、それにシャルルがいて……みんなが、大事な人たちがいて、一緒に笑ってられるんだから。シャルルは、どうなんだ？　俺たちと一緒で嫌か？」
「そんなことないっ！　みんながいて、それにシンがいてくれて……僕も、こんなに笑ってられることなんて、お母さんがいなくなってからなかった」
「ならここにいていいんだ。それはシャルルが決めたことだろ？」
「僕が、決めたこと……？」
「うん。シャルルが自分で、自分の明日を選ぶってことだ。誰かにすがるんじゃなくて、自分で決めた明日だから。お母さんだって、もちろん俺だって、シャルルには幸せでいてほしいって思ってる」

明日に目を向けること。
ステラが教えてくれた。
みんなが教えてくれた。
ステラと約束した。
みんなと約束した。
だから、今の俺はここにいる。ここにいて、みんなと笑っていられる。

「もしシャルルの明日を奪おうとする奴がいても――」

この世界で決めたこと。初めて『力』を手にした時に決めたことだ。
大切な全てを、大切な人の明日を守る。それを阻むなら――
「俺がシャルルを守るから。どんなことがあっても、絶対に」
「……うん」

こくん、とシャルルが肯いた。体の震えも収まったみたいだから、落ち着いたんだろう。
その様子を見て、内心で胸をなでおろす。良かった。自信なかったけどなんとか伝わったみたいだ。
安心して時計に目をやると……現在時刻は夜中の二時過ぎだった。あーあ、夜更かししちゃったよ。明日が日曜日でホント助かったな……授業があったら間違いなく居眠りして、出席簿に『ありがとうございます』ってお礼を言わなきゃいけないところだ。
「さて、それじゃ寝ると――シャルル、どうした？」
「うん、実はね」

ベットから離れようとした俺の手を、シャルルが掴んだまま放してくれない。あれ、まだ何かあるの？
「眠れるまで、手……繋いでてくれないかな？」
「手？　うん、いいけど」

そのままバフッと布団に腰を下ろすと、シャルルはニコニコしながら布団をかぶった。
マユにもよくねだられたなあ、コレ。男同士のはずなのに、シャ

ルルが相手だと全然気にならないのが不思議ではある。多分ヴィーノの抱きつきと同じだ、柔和で人懐っこいシャルルの人柄のなせる業なんだろう。俺と一夏でやったら……怖いから、やっぱり考えるのはよしとこう、うん。

「ねえ、シン。聞いていいかな？」
「良いけど……聞いたら早く寝ろよ？　このままだと俺、眠れないよ」
「じゃあ、一緒に寝る？」
「冗談は止めて早く寝かせてくれって。ほら、何だ？」
「ふふっ、つれないなあ……ねえ、シンの家族は？」
「……みんな、もういないんだ」
「あっ……ゴメン」
「いや、いいんだ。俺はもう、大丈夫だから」

ほんのちょっとだけ、シャルルの手の力が強くなった。それに返すように、手を握り返す。

「お休み、シャルル」
「うん……おやすみ、シン」

手を繋いだまま、シャルルは目を閉じた。傍で座ったままぼんやりとしているうちに、寝息が聞こえてくる。そっと手を放して、眠っているシャルルにもう一度。

「お休み、シャルル。また明日」

そう言って自分のベットに戻って、布団をかぶる。頭の中ではまだごちゃごちゃと考え事があるはずなのに、今度は眠気はすぐに襲ってきた。また、明日か。ああ、訓練の手伝い頼むの忘れ――

◇

その日、夢を見た。ミネルバの――船のみんなが出てくる夢だ。夢の中だけど、久しぶりにみんなに会えて嬉しい……嬉しいはずだったんだけど、何かがおかしい。

みんな、俺のことを叱りつけるんだ。レイもルナもメイリンも、ヴィーノもヨウランも、アーサーに艦長まで……みんながみんな（特に女性陣）――

『自分が今日何を言ったのか、お前本当に分かってるのかっ！？』

――って。何か怒られるようなこと言ったっけ？

ああ、夢の中にはアスランも出てきて、俺のことをかばってくれた。みんなの怒りが収まるどころか、余計に怒り出したけど。

『シンが何を言ったんだ？　みんなで責めるようなことは言ってないだろう？』

『このっ……馬鹿野郎っ！』

それで、俺はアスランと二人で、目が覚めるまでずっとお説教を受けていた。

なあ、アスラン。俺たちの何がいけなかったんだ？　俺たちが何をしたっていうんだ？　なんでみんなため息ついてるんだ？　え、アンタも分かんない？　俺も分かんないよ……

第七話『君がくれる明日』（後書き）

どうも、ここまで読んでいただきありがとうございました。
誤字・脱字は是非ご指摘ください。
また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくてダークネスと一つになってしまいます。
お気軽にご感想をください。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

第八話『明日になったら忘れるよ』（前書き）

※以下の事にご注意ください。
・今回アンケートに関するお知らせがあります。詳しくは後書きをご参照くださると助かります。奮ってご参加ください。
・お手間でしょうが、ご質問は遠慮なくおっしゃってください。

第八話『明日になったら忘れるよ』

二人の転校生が来てから一週間が経過した。放課後の第三アリーナで、三人の男女が親しげに言葉を交わしている。一夏、セシリア、鈴の三人だ。訓練の場であるのに、シンの姿は見られない。たいていの場合、一夏の特訓にはシンが同席しているので、珍しいことである。

「さて、それじゃあ摸擬戦始めるか。二人とも、よろしく頼むぜ」
「アンタが自分から頼むなんてね。まあ、仕方ないから手伝ってやるけど」
「ふふふ、ようやくわたくしの実力にお気づきになったのかしら」

ＩＳを展開させながらセシリアと鈴が得意げに笑った。お互いに隣をチラリと見て火花を散らしたが、一夏の目には映らない。グッと握りしめる雪片弐型。その鋭い刃に映って見えたのは、シンの姿だった。

織斑一夏は、誰かを守ることへの強い羨望がある。幼い頃から両親はおらず、強い姉に一人守られてきたことがその憧れの原因だ。偶然とは言えＩＳを動かせるようになったことは、その思いを現実に近づけるのに都合よい事態だった。これで、自分の守りたいものを守れる。守りたいという意志も、それを貫くための心の強さも、一夏は持ち合わせてはいた。しかし入学当初、それはまだ幼い、漠然としたものでもあった。憧れ、目標とするものがどこか遠いのだ。

確かに、織斑千冬は唯一の肉親であり、近しい目標のように思われる。だが、その実、千冬は異性であり、年も離れており、なにより世界大会優勝という経歴は、身近に置く目標にはあまりにかけ離れている。自覚はないが、一夏には意志を貫く強さがあっても、そ

れを求め続ける“渇望”が無かったのだ。おそらく学園に一人の男子であったのなら、無意識のまま、その幼い憧憬を抱き続けただろう。姉のようになれたらいい、と。

しかし、学園に現れたもう一人の男子。シン・アスカがいた。

同じ年頃、同じ男同士、同じ守るという目標を持っているにもかかわらず、自分とは比べ物にならない力。自分を牽引し、周囲の信頼を勝ち取っていき、みんなを守っていくその力。一夏にとっては足りなかった、競い比べる相手だった。このようになりたいという、曖昧な気持ちではない。『この背中を超えたい』という明確な目標を形作るには、シンは十分すぎる相手になった。

一夏は剣を見つめ続ける。

今手にしている、雪片弐型。姉の手にしていた雪片に似た刀。

先ほど廊下であったときに、その姉が自分に言ったのだ。

『アスカと一緒にいることが多いようだが、一つ言っておく。お前はアスカと同じにならなくていいんだ』

『千冬姉、それってどういう……？』

『おそらく、だがな。アイツも同じことを思っているはずだ。お前にはお前の力がある。それを信じることだ』

『俺の力……』

『そら、分かったら早く行け。ノロノロしていると、アスカはいつまでもお前の先にいるぞ？』

雪片弐型を、大きく振るう。その切っ先に映ったのは、今度は一夏の姿。

自分を信じること。自分の力を見つけること。

それができなければ、きっとシンには追いつけない。ましてや追

い越すなんてできやしない。
ならば、シンと同等の訓練だけじゃ足りない。同量の訓練でさえ、追いつけるか分からないのだ。
対峙する二人の姿を見据え、剣を構える。そこに迷いはない。

「行くぞっ！――」

大きく踏み込み、剣を振りかぶったその時――
真横から、砲撃の重音が三人の間に割って入った。

◇

「今日の訓練は第三アリーナだよな？　一夏たちは先に行ってるみたいだし」
「うん。みんなで摸擬戦をするみたいだよ」

放課後になって、俺とシャルルは特訓のために第三アリーナに向かっていた。みんなに先に行ってもらったのには、ちょっとした理由がある。

「ねえ、シン。訓練の手伝いの話、僕でホントに良いの？」
「シャルルだから頼めるんだ。お世話になる」

今日から一夏たちとの訓練に加えて、シャルルに特訓を頼むことにしていた。学年別個人トーナメントを勝ち抜くための、言わば秘密特訓ってやつだ。各シルエットを使いこなすのと、それともう一つ考えてある奥の手。それができるようにするためには、シャルルの助けが必須になる。シャルルも快く承諾してくれたから、とりあえずは安心だ。
……唯一、シャルルには訓練の内容が筒抜けになるっていう穴が

あるんだけど。対シャルル戦、考えておかないといけないな。摸擬戦のデータを収集して、手っ取り早くシミュレーションでも組むのが一番か？　いや、それも少しまずい。持久戦が得意なシャルルだから、逆に対策をうたれた時が危ないだろう。新装備を使って新しい戦術に切り替えるのが良いか？　ダメだ。これは時間が足りないから現実的じゃない。うーん、何か別に方法がないか――

「し、シン。あんまりじっと見つめられると……」
「ん？　ああ、ゴメン――」
「アスカ！　デュノア！　ここにいたか！」

慌てた様子で、篠ノ乃が廊下の向こうから駆けてきた。あれ、一夏の訓練に合流してるはずじゃなかったっけ？

「篠ノ乃、どうしたんだよ？」
「先に行った三人が、ラウラと交戦している！　急げ！」
「ラウラっ！？　アイツ、性懲りもなくっ！」

十中八九、仕掛けてきたのはラウラからだ。三対一で、しかも、同じ専用機持ちを相手にけしかける。並大抵の自信じゃない。
第三アリーナ近づくごとに、騒ぎが大きくなっている。観客席のゲートに飛び込むと、ステージでは四つの機影が空中を舞っていた。

いくつもの青いビットが、黒い機体を取り囲む。でも、ラウラが右腕を掲げた途端に、包囲射撃をしようとする各機が動きを止めた。その隙をつくために近づいた凰（ファン）も、ラウラが上げた左腕に従うようピタリと静止する。真ん中から加速してきた一夏の攻撃をひらりと回避。右肩のレールカノンから放たれた砲弾が、白式を爆炎で包んだ。

明らかに一夏たちが圧されている。三人とも、攻撃のタイミングは合っていたはずだ。なのに、ラウラが腕を振るうだけで、三人はまるで身動きが取れなくなっている。

「くそっ、どうなってるんだよ！？」

「シン、あれはＡＩＣだよ。シュヴァルツィア・レーゲンの第三世代型兵器だ。慣性停止能力、まさかあそこまで完成してるなんて……」

「ようするに特殊武装なんだな？　分かった！　シャルル、ありがとう！」

「アスカ、待てっ！」

観客席を抜けて、ピットの中へ。くそっ、もたもたしてると三人ともやられる。一夏、セシリア、凰――

イグナイテッドを展開しながら、シルエットはソードを選択。ピットの入り口を開けようとするんだけど、またもピットは開かない。使用許可申請だとか、模擬戦闘中につき待機しろだとか……ああもうっ、ごちゃごちゃうるさい！　こっちは急いでるんだよ！

「もういいっ！　邪魔だっ！」

入り口の後方に飛んでいって、対艦刀を引き出す。

降りぬかれた刃が、そのきらめきをどんどん強くしていく。その切っ先をゲートに突きつけて、準備完了。

「シン！　ちょっとそれはダメ――」

「はあああっっっ！」

限界まで引き上げられた出力が、対艦刀の先にまでビームの刃を形作る。

瞬発力特化のスラスターを背負い、その勢いに任せたまま、無理やりにゲートに突っ込んだ。
刃が扉に衝突した瞬間、バリヤーの干渉が周囲に紫電を撒き散らす。
火を噴き続けるスラスター。次第に弱まる光の膜。聞こえてくる、ひび割れるような音。
特殊合金がへこみを作った次の瞬間、周りの壁ごと引きはがされて、ゲートは轟音と共にステージに投げ出された。

「一夏！　セシリア！　凰！」
「シン！」
「アンタ、またやったの！？」
「無茶なさいますわね、まったく」

戦闘を継続していたらしい四人が一斉にこっちを向いた。
みんなは……良かった。ダメージは負ってるけど、まだ機体は維持できてる。

「ラウラ、お前……！」
「ようやく来たか。こいつらでは準備運動にしかならなかったぞ？」
「これ以上、お前がみんなを傷つけるなら……」

対艦刀の大きな刃で、空中を何度も切り裂いた。頭の中は真っ白だ。
全身を赤く染めるソードシルエット。空いた片手でもう一本の対艦刀を掴んで、ラウラに近づいていく。
もうガマンの限界だ。堪忍袋の緒が切れた。トーナメントなんて気の長い話、していられるかっ……！

「叩き切って――」

「そこまでだお前達！」

俺の言葉を遮った、あの声。振り向いてみれば、間違いない。織斑先生だった。隣にはシャルルに篠ノ乃、山田先生までいる。

「アリーナを破壊されても困るのでな。決着をつけたかったら学年別トーナメントでやってもらおう。それから、トーナメントまでは私闘は一切禁止だ。ラウラ、いいな？」

「教官がそう、仰るのなら」

少し不満がありそうだったけど、素直にラウラは肯くと、スタスタと歩み去ってしまった。

「お前達も、それで良いな？」

「あ、ああ……」

「返事は『ハイ』だ。アスカ、お前はどうなんだ？」

「……了解であります」

はっきり言って俺の方は不満だらけだ。みんなを傷つけて、何も無しなんて……けど、ここで頭に血が上ったままじゃいけないってことも、一応理解していた。怒りとか憎しみだけで戦っちゃいけないって。それじゃ何にもならないって。まあ、やっぱり腹は立つんだけど。

仕方がないから、イグナイテッドの展開を解除。俺も入り口の方に歩いていこうとしたら、山田先生が立ちふさがった。困ったような笑顔で、どこかを指さしている。

「山田先生、どうかしたんですか？」

「あの、アスカくん、アレは……」

アレ？　不思議に思ってぐるりと首を回すと、そこには鉄の塊――さっきまでゲートと呼ばれていたもの――が転がっていた。それから、ちらほらと壁の破片。なんであんなものが転がって……はっ！？

ＩＳのプログラムも驚くだろう速度で、俺は自分がやったことを正確に整理し始める。

許可申請の不備。それにも関わらずアリーナに乱入。その結果の器物破損。

かろうじて戦闘行為は避けられたのが、救いなのか？

どっちにしろ、生徒指導室行きだよなあ……

迫り来る圧迫感に威圧感。心に忍び寄るのは焦燥感。

むんずと首根っこを捕まえられた。誰がやったのかなんて、見なくてもわかる。

「シン、俺たち先に戻ってるから……」

「こりない方ですわね」

「フン、バーカ」

「……今回は、私は何もしてないぞ？」

「アハハ……シン、後でね」

それぞれみんなが敬礼をして、俺の横を過ぎ去っていく。一夏、セシリア、凰、篠ノ乃、それにシャルル。さよならみんな。俺、みんなに会えて良かったよ――

「さあ、扉を壊したことはどのように説明してくれるつもりだ？」

怒りで真っ白だった目の前が、今度は絶望で真っ暗になった。

ねえ、ステラ。どうして俺はいつまでたっても成長しないんだろう

ね。

◇

お説教という名の束縛から開放された時には、既に空に月が昇っていた。空腹と疲労のせいでフラフラになりながら、なんとか食堂にたどり着く。扉を開ければ、一夏たちが座っている席が見えた。最後の力を振り絞って手を振ろうとしたけど、目の前にわっと押し寄せる人の波。たちまちに俺は呑み込まれた。

「アスカくん！　私と組んで！」
「ペアは是非とも私と！」
「何も言わなくていいから、ここにサインして！　幸せにするから！」

組む？　ペア？　何を言われているかわからないけど、今の俺にはそれを聞き返す気力も尽きていた。あれよあれよ、波間を漂う木の葉みたいに流されていく。けど、力なく弄ばれる俺の両手を誰かが引っ張り上げてくれた。暖かい手が二人分。いったい誰が？

「おいシン！？　しっかりしろ！　コラコラ、そこ、ルール違反だって」
「シン、大丈夫！？　ほら、ペン握ってちゃダメだよ！　サインしちゃダメっ！！」

一夏にシャルルだった。二人が俺を担ぎながら、人の波をかき分けて奥のテーブルに向かう。一夏も、セシリアも、凰も、みんな怪我が無さそうで良かった。もしあのまま戦闘が続いていたら、大怪我をしていたかもしれない。

「みんな、無事で良かった……」
「お前の方が無事じゃないぞ、シン。ほら、今メシが来るからな？」
「二回もアリーナのドアを壊す奴がいる？　ホント、バカね」
「あら鈴さん。先程までシンさんの心配をしていた方の発言とは思えませんわね？」
「べ、別にこんな奴の心配なんてしてないわよっ！」

セシリアと凰は仲良く喧嘩してるし、篠ノ乃とシャルルはそれを眺めながらお茶飲んでるし、いつも通りの光景だ。一夏が差し出してくれたお茶を飲むと、気力がみるみる回復してくる。仲間って良いものだ。飲み干すお茶も、俺の目頭も熱い。
あ、そうだ。ペアって何の話だったんだろう？

「みんな助かったよ、ありがとう。ところで、ペアって何のこと？」
「ああ、コレのことだ」

篠ノ乃がひらりと紙一枚を渡す。なになに、『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な摸擬戦闘を行うため――
「『二人組みでの参加を必須とする』、か。随分と急な話だな」
「それで、ペアをどうするかで話をしようと思って、ここに集まってるんだ」

食堂の賑わいもこれが原因らしい。ペア、か。いつものグループだったら、全部で六人。二人ずつで上手に組み合わせができるところなんだけど。
辺りでは女子がみんなこっちの発言に聞き耳を立てている。多分、貴重な男子生徒とペアを組みたいってことなんだろう。相も変わらず、俺たちは珍獣だ。はあ、どうしよう。

「なあ、シン。今回は俺とお前、別々で戦わないか？」
「え？　一夏、どうしてだ？」

俺にとって意外な申し出だった。二人組だったら、多分一夏とペアになるかなって思ってたのに。摸擬戦の回数も俺が一番多いし、セシリア戦で組んだ経験もあるから、一夏から誘ってくる気がしていたんだ。

一夏の表情を伺ってみれば、剣を握っている時と同じぐらい真剣な顔。それが真っ直ぐ俺を見ている。

「今日のこともそうだが……俺もいつまでもシンに頼ってられない。いつまでも誰かに守ってもらうだけじゃ駄目なんだ。だから、今回は俺と戦ってくれ」
「一夏……」

一夏の目に宿る強い意志。昔の俺もこんな風に真っ直ぐだったら、力を誤らないで済んだんだろうか。でも、これが一夏の強さなんだ。それなら、その強さを全力で迎え撃つのが俺のすべきことだ。軽々と追い抜ける背中じゃ、申し訳が立たない。

そうだろ？　アスラン。

「ああ。でもな、一夏。俺は絶対に負けない」
「今度こそ一撃、決めてやるぜ」

俺たちはふっと笑いながら、お互いのこぶしを突き出して叩き付け合う。一夏の本気、確かに受け取った。けど、俺は誰にも負ける気はない。

「はー、男って単純ね」

「ついていけませんわ」
「だが男子たるもの、こうでなくてはいかんぞ」
う……気持ちが盛り上がってたんだから、水を差さないでくれよ。こういうの、女子には分かんないんだろうな。アカデミーにいた時から、ルナも呆れてたっけか。単純？　ついていけない？　良いだろ、別に。
「さて、本題のペアは……って、うわあっ！」
「織斑くん！　私と私と！」
「ならアスカくんは私！」
「デュノアくーん！　お願ーい！」
俺と一夏が組まないことを聞いて、またもみんなが一斉に寄ってきた。みんなが来てくれるのはありがたいんだけど、そんな即決できないし……
ん、ペア？　ペアを組むってことになったら当然だけど、相方とは試合しないんだよな？　試合しないんだから、対策しなくても良いって事だよな？　手の内を見せても、秘密特訓の相手をしてもらってても、特に問題ないってことだよな？
「そうだ、その手があった！」
「うおっ！？」
「ひゃあっ！？」
突然大声を上げて立ち上がったせいか、周囲が軽い悲鳴をあげた。いけない、落ち着かないと……
軽く咳払いをして着席し、シャルルの方に向き直る。
「シャルル、俺と組んでくれないか？」

「え、僕と？」
「特訓の時もそうだったけど、シャルルじゃないとダメなんだ。頼む」
「う、うん……シンがそう言うなら喜んで」
「良かった。また明日からよろしくな」

しっかりと握手をきめて、交渉成立した。対シャルル用のシミュレーション作る手間も省けるし、これで心置きなく訓練もできるぞ。へっへーん、我ながら名案だったな！

「うう……やっぱりアスカくんと一緒か……」
「二人とも、すっごく仲良いもんね。アスカくんってやっぱり……」
「シャルル×シンか……コレは良いわね」

俺とシャルルのペアが決まると、囲んでいた女子の三分の二ぐらいが退いていった。残り三分の一はまだ、テーブルの三人も交えて熱い討論を交わしている。

「ここはクラスメイトのわたくしが！」
「セシリアばっかりずるいよ！　私もクラスメイト！」
「いや、幼馴染の私とでしょ！」
「うう、幼馴染は反則！　反対！」
「それを言うなら私はクラスメイトで幼馴染だ！　私と組め、一夏！」
「え、いや、あの、俺は」

すごい様相だ。これは時間かかりそうだな……ああ、そう言えば頼んでくれた食事、取りに行ってないや。一夏には悪いけど、先にいただいてるとしよう。

「ふふ、一夏はすごい人気者だね」
「だな。俺はシャルルがいてくれて良かったよ」

そう言うとシャルルはニッコリと笑って答えてくれた。よーし、訓練がんばるぞ！　いや、今日はお説教で台無しにしちゃったから……うん、明日からだな！

騒がしいテーブルを離れて、俺は意気揚々と食事を取りに行った。えーと、今日の定食は何だろな？

◇

『――目の前の光景が信じられない。部屋を間違えたのかと思ってドアの番号を見直してみたけど、間違いない。正真正銘、俺の部屋だった。

食堂で定食を食べ、風呂に入りに行き、戻ってきただけ。そう、特別なことなんてしていない。いつものように、俺のルームメイトが部屋で待っているはずだった。そのはずだったんだ。

寝食を共にしていたルームメイトが、部屋の真ん中にちょこんと座っている。視線を部屋全体に巡らしても、見えるのはいつもの目覚まし時計。制服。大事な携帯。やっぱり間違いじゃない。二つのベットもそのまま。俺たちの部屋だ。

大事な話があるって言ってた。どんな悩みだって聞いてやるって、答えた。

視線を前に戻す。金色の髪が眩しい、上品な佇まい。スポーツジャージを着ていても崩れない、その雰囲気。ただし、いつもと違うところがあった。

後ろでまとめていた金髪は今、しなやかに背中に伸びている。ジャージから浮き上がるボディーは、丸みを帯びた曲線的なラインを

描いていた。全身から香る、甘い匂い。

それらから導き出される結論は一つ。

「お、女の子……？」

「うん、そうなんだ。今まで黙っててゴメンね……」

胸に手を当てて、ほんのり顔を上気させて言った。柔らかな印象はそのままでも、その仕草が妙に心を揺さぶる。

「ねえ、健一。僕、本当は……女の子なんだ」

まさか、香菜が女の子だなんて――』

「結局ここまで気付かなかったのかよ、健一くん……嘘だろ？」

たまらずしおりも挟まずに本を閉じて、ベットの横に放り出す。

“ボクはホントはオンナのコっ！”――マユと約束した映画の原作。時間もあるし、ちょっとした気分転換になるだろうって思って読んだけど……甘かった。

香奈ちゃんが女の子だってことに、健一くんはまるで気がつかない。まあ、お話としてはそういう構成なんだろうけど、後で気付いたり、発覚するシーンが来ると思ってたのに……

気付かない。健一くんはひたすら気付かない。そりゃもう、見ているこっちが唖然とするぐらいに気付かない。

先輩の彰さん（言わずもがな鈍い）に相談すれば的外れなアドバイスをもらい、友達の昴輝くん（これまた鈍かった）とは変わらぬ

バカをやり、香菜ちゃんの胸を触れば『意外と肉ついてるな？』の一言で横っ面を叩かれる。香菜ちゃん、せめてコルセットぐらい付けておこうよ。健一くんはナチュラルにセクハラするラッキースケベなんだから。

まあとにかくだ。最終的に、悩みぬいた香菜ちゃんが告白するまで微塵も疑わなかったんだから、この鈍いのは筋金入りなんだろう。恐れ入った、健一くん。信じられねー。

こんな調子で物語は終盤に。いい加減読み進めるのが辛くなったので、続きはまた今度に……というか、映画まで取っておこうかという気持ちがふつふつと込み上げてくる。いや、ダメだ。事前知識もないまま映画でラストを観たら、その場でツッコミを入れないで座っていられる自信がない。

マユ、どうしてこんな映画選んだんだ？　お兄ちゃん分かんないよ……

「し、シン……頭を抱えたまま転げまわってどうしたの？」

「シャルル～……実はさ……」

俺は情けない声で、事の顛末を話し出した。最初はニコニコ笑っていたシャルルだったんだけど、話が“ボクはホントはオンナのコっ！”の中身に触れるのに併せて、その笑顔がドンドンと引きつっていった。シャルルにこんな顔をさせられるなんて、健一くんは本当にすごいな。

「――で、香菜ちゃんがついに自分の正体を告白したってわけ。な？　健一くん鈍いだろ？　こんな奴、いるわけないよなー」

「……僕の目の前にいる君は？」

「え？　シャルル、何か言った？」

「ううん、何でもないよ……コーヒー淹れるね」

なんだか重そうに額を押さえると、シャルルが棚の方へ向かっていった。コーヒーパックを探しているんだろう。でも、もう新しいパックを箱から出さなきゃいけなかった気がする。

「あれ、もうコーヒーパック無いのかな。新しいのはこの上にしまってある？」

「ああ、俺が取るよ。シャルルじゃ危ないから」

「大丈夫だよ。よっ、とっ」

「あ、コラ。危ないぞ」

棚に手の届かないシャルルが、爪先立ちをして奥に手を伸ばす。前にマユが同じことやって、危うく転びかけた。慌ててシャルルの傍に行ったら、予想通り。コーヒーパックの箱を掴んだ途端に、体勢を崩した。

「きゃっ！」

「ほら、だから言っただろ」

後ろに倒れかけたシャルルをキャッチ。シャルルの体を抱きかかえる俺の手は、シャルルの胸の辺りに……なんだ？　なんだか硬い感触が……鉄みたいな……コルセット？　どうしてコルセットなんてして――そうか！　分かったぞ！

「っ！　し、しし、シン……そこは……」

「シャルル、そんなに体型気にしてたのか？　別にシャルルだったら――」

「～～～～っ！　シンのばかーっ！！」

「ふぶへっ！」

バチンッ、とシャルルの平手が一線。避けることもできない俺の横っ面を引っぱたき、脳をぐるぐる揺らした。
急速に飛び去っていく記憶、暗転していく視界、そして薄れゆく意識。
かろうじて残っている思考で、俺はかつての上司に答えを求めていた。

アスラン。俺、何か悪いことした？　してないよな？　やっぱりそうだよな？
じゃあ、なんでシャルルは怒ったんだ？

◇

次の日の一コマ。

「アンタ、その顔どうしたの？　ま、どうせ女の子にでもやられたんでしょうけど」
「そんなわけないだろっ！　全然覚えてないんだけど……昨日突然、部屋で倒れちゃったらしいんだ」
「で、それがアンタの顔の紅葉とどう関係があるの？」
「それで、シャルルが介抱してくれたらしいんだよ。その時、気付けで一発強いのを打ったって言ってた」
「ふーん。私はてっきり、女の子に不用意なこと言って引っぱたかれたのかと」
「だからそんなわけないだろっ！　ただ……」
「ただ？」
「……何か、すっごい勘違いをしてた気がする」

第八話『明日になったら忘れるよ』（後書き）

どうも、ここまで読んでいただきありがとうございました。
みなさまの応援もあり、細々とですが活動させていただいてます。
死ぬほど感謝しています。返信は滞りがちですが、必ず返信はさせていただきます。なにせ作者、毎日のように皆様からのご感想を眺めてニヤニヤしていますから。

さて、本題です。今回『祝！１０万ＰＶ突破記念アンケート』を開催したいと思います。
アンケートのお題は『番外編日常パート、いったい誰を主役にする？』というものです。

以前、各キャラクターの日常も書いてほしいというご意見がありました。
そこで、近いうちにシン以外のキャラクターを主役とした日常パートを、番外編として書きたいと思っております。
アンケートの内容は『この番外編の主役を誰にするのか』ということです。
対象キャラクターは……シン以外なら、自由にしちゃいます。お一人様好きなキャラクターを一人、お答えください。
ただ、出て来られないキャラクター（レイ・ルナ・アスラン等）はカウントできないので、ご了承ください。

また、アンケートは、感想欄にてご感想と共にお答えいただきたいと思っております。感想乞食な作者はこうして、みなさまの声をいただきたいと思っていますので、お許しを。

締め切りは１１月１４日の０時までとさせていただきます。

長々と説明してしまい申し訳ありませんでした。

では、読者の皆様方に最大級の感謝を込めて。

第九話『強さと明日と』（前書き）

※以下の事にご注意ください。
・アンケートのご参加、誠にありがとうございました。次々回辺りに番外編の投稿となる予定です。
・第六話、クッキーを引く場面にて致命的なミスを発見したので、修正しました。シンの順番はシャルの前です。大変申し訳ありませんでした。

１１月１４日追記
・終盤をほんの少し加筆修正しました。まだ修正するかもしれません。

第九話『強さと明日と』

じめじめとした梅雨もあっという間に過ぎ去って、六月はいよいよ最後の週。学年別トーナメントの開始を待つことになった。
生徒は全員がトーナメントの準備で大忙し。この忙しさときたら、ミネルバの進水式並だ。あの時もデュランダル議長やアスハのお姫様とか、偉い人がいっぱい来てたんだよな。今回は何もなく済めばいいんだけど……多分この世界なら大丈夫だと、思いたい。
それに、ハプニングの心配ばかりしていられるわけじゃない。今度こそラウラを止めなきゃいけないし、一夏とも戦うんだから、しっかりしないと。葛城さんも今日は見に来ているらしいし。

「しかし、すげー人数だな……」
「政府関係者、研究所員、企業エージェント、スカウトまで人が来てるからね。一年の僕らには、あんまり関係ないことだけど」
「一夏、他の事に気を取られてると集中できないぞ？　機体のチェックも忘れるなよ？」
「おう、大丈夫だって」

今俺たちがいるのは男子更衣室。男子は三人だけだから、貸切のようにゆったりと着替えができる。変わりに女子はすし詰めらしいけど。あの人数を収容するのか……大変だな。少数の男子で良かったと思えることも、たまにはあるみたいだ。

「じゃあ、俺は箒のとこに行ってくる。二人ともまた後でな」
「ああ。一夏、俺とシャルルは絶対に負けないからな」
「俺と箒だって、負けるつもりはないぜ？」
「ふふっ。二人とも、まだ試合の予定も決まってないのに」

そう言って三人で笑い合うと、俺とシャルルは一夏のこぶしを叩いて、一夏もそれを受けて更衣室を出て行った。一夏は篠ノ乃とペアを組んだから、試合前の最終調整は他の場所でやるそうだ。試合日程が詳細に決まっていれば、こんなに早く移動しなくて済むんだけど……どうもトーナメントがペア形式に変更されたせいで、対戦表を作るシステムが役に立たないらしい。そのせいで、試合の当日になっても、試合の予定は分かっていなかった。準備も上手くできないのに、なんで仕様変更なんてしたんだろうな？

「は～あ。下手したらここで待ちぼうけか～……」
「シン、ずいぶん落ち着いてるね。試合前って、結構緊張すると思ってたんだけどな」
「えっと、俺はまあ、その、慣れてるから……」

『パイロットをしてたから、こんな状況には慣れてるんだ』ってのは……言えないよな、流石に。自慢するようなことじゃないし、言いたくないもない。

「ボーデヴィッヒさんのことは気になってないの？」
「ラウラのこと？　うん、今日は大丈夫。落ち着いてる」

前とは違う。緊張してないだけじゃない。感情的になってるわけでもない。
アカデミーにいた頃は、試験でＭＳに乗るたびに緊張もした。だけど、実戦になってからは逆に、そんな余裕も消え失せるぐらい……目の前の“敵”で、頭がいっぱいだったんだ。叩き潰してやる！　なぎ払ってやる！　そんなことしか考えられなかった。
今、ラウラにとって俺は“敵”なんだろうけど、俺にとって、ラウラは“敵”じゃない。叩き潰す必要も、なぎ払う必要もないんだ。ただ、これ以上ラウラが間違って力を振るうのを止めればいい。

そう考えると、自然と心は落ち着いてくる。怒りと憎しみで戦ったら、昔の俺と何一つ変わっていないんだから。

「俺のことより、シャルルは平気か？　緊張してないか？」

「僕？　……うん、そうだね。僕は緊張してるよ。だから……」

そう言うと、シャルルは俺の隣に座って、手を伸ばしてきた。

「はいっ」

「寝ちゃダメだからな？　試合前なんだし」

「うん、分かってる」

シャルルがうなされていたあの日以来、俺たちの間にできた習慣。毎日シャルルが寝付くまで、手を繋ぐこと。それ以外にも何かと、シャルルは俺と手を繋ぐことが多くなっていた。意外にシャルルは甘えたがりなんだよなあ……年は一つしか違わないのに、小さな弟ができたみたいだ。あ、弟って言えば、一夏もいるな。じゃあシャルルは末っ子だ。優しくて、甘えたがりで……うん、イメージぴったり。

「……ねえ、シン。一ついいかな？」

「ん？　どうした？」

手を握る力を少し強くして、シャルルが顔を向ける。レイが見せたのとそっくりな、あの笑顔だ。シャルルはこうやって笑うことが、最近は日を追う毎に増えていた。理由は良く分からないままだ。

「トーナメントが終ったら……大事な話があるんだ。聞いてくれる？」

この笑顔を見るたびに心臓が跳ねる。メサイアでのことを思い出して、あの時、レイに何を言えば良かったんだろうって……

「当たり前さ。もしシャルルに悩みがあるなら、俺はどんなことでも聞くよ。約束する」

「うん。じゃあ、約束」

それだけ言って、二人で手に込める力を強くした。

俺だってみんなに話せないことはいくらでも抱えてる。シャルルにも同じように、隠さなきゃいけないことがまだあって……きっと、どんな人にも多かれ少なかれ、そんなことはあって。

けど、今度こそ俺は……何か言わなきゃいけないって思えるから。

レイには言えなかったことを。

「対戦相手、そろそろ決まる頃だね」

「ラウラとは早く試合したいな。一夏と篠ノ乃とは、なるべく後で」

更衣室のモニターが変わるのを、首を長くして待つ。話し合わなきゃいけないこともほとんどないから、二人で黙って手を繋いだままだ。シャルルが落ち着くなら、全然構わないんだけど――おっと、モニターが変わった。トーナメント表だ。初回の相手は……いきなり、か。

「シンの気持ち、届いたみたいだよ」

「……ああ」

◇

アリーナに出れば、そこに待っていてのは漆黒を纏った少女。一回戦の対戦相手、ラウラだ。隣にいるのは……

「ハァハァ……シン×シャルルをこの目で見るためにボーデヴィッヒさんと組んだけど、まさかいきなり当たるなんて……私の気持ちが届いたのね」

……気にしないでおこう。ラウラも思いっきり引いてるし。

「……一戦目から当たるとは運が良い。ここで貴様を倒せば、後は一人だけだ」

「今日こそ止めてみせるさ。もうみんなを傷つけさせやしない」

言い終えた瞬間、試合開始のブザーが鳴り響いた。

すぐに俺とシャルルは散開して、それぞれ一対一の状況を作る。俺の相手は当然――こっちを追ってきた。ラウラだ。

最初に選んだのはフォースシルエット。高速戦闘仕様の機体でできるだけラウラをシャルルから引き剥がす。シャルルがこっちに来れるようになるまで、ラウラの足止めだ。

「威勢の良いのは口だけか？　ならばさっさと落ちろ」

六本のワイヤーブレードとレールカノンの砲撃が背後から追ってくる。

旋回、加速、緊急停止、また加速。多方向からの苛烈な攻撃を避けながら……これぐらいで十分だな。言われた通りに、落ちてやるさ。

「っ！？」

最後のブレードを回避して、ぐるりと向きを変えながら、地面に

急降下した。
背中の高機動スラスターを、巨大な砲塔の付いたものに変更。
空を駆けていた青い装甲が、黒い重厚な色に変わって、地面の上を滑るように移動する。

――ブラストシルエット・展開完了――

「いけえっ！」
「ちっ……！」

砲身が回転して、肩からミサイルを一斉掃射。八基のミサイルは歪な機動を描きながら、空中を舞っていたブレードを吹き飛ばしていく。一、二――浅い。ラウラが操作しきれなった二本のブレードをやっただけだ。流石に、一筋縄じゃいかない。

「この程度で私が止まると思っているのか？」
「ならこいつでどうだっ！」

地表を滑りながら、二つの砲身をラウラに突きつける。
ミサイルランチャー、レールガン、大口径ビーム砲を備えるブラストシルエットなら、射撃戦は圧倒的に有利だ。それに、利が働くのはそれだけじゃない。

ラウラのＩＳ『シュヴァルツェア・レーゲン』が備える特殊装備『ＡＩＣ』――ＩＳの動きを停止させてしまう、慣性停止結界。一度捕まってしまえば逃げようがない。だったら、最初から捕まらないように距離を取るだけだ。
ＡＩＣを使う際にラウラは必ず、両手を突き出す動作をする。ラウラと見合ってさえいれば、停止させられる前に撃ち抜くことも可能だ。

ラウラもそれを理解している。だから、うかつにＡＩＣを使うような真似はしない。

「射撃戦対応型か……パッケージの換装とは器用なことだ。だが、もう換装の隙は与えん。そのまま切り刻んでやる」

ラウラは二本のプラズマ手刀を展開させると、残り四本のワイヤーと同時に接近してきた。レールガンを弾き飛ばし、ビーム砲の波状攻撃を潜り抜け、俺を捉えきる。無防備な俺の懐に入り、勝ち誇った顔で両手を振り抜く――はずだった。

「なっ！？　馬鹿なっ！」

ラウラが驚愕の目を向ける。それもそうだろう。

両手のプラズマ手刀は俺の体に食い込む前に、盾と“サーベル”で止められていたんだから。

遅れたその反応を見逃さない。手刀を防いだ盾でラウラの腕を払いのけ、そのままもう一本、“背中のサーベル”を抜刀。勢いのままラウラの胴体に叩き付けた。

「ぐぁっ……！」

「遅いっ！」

サーベルが削り取った装甲の上に、胸部バルカンが打ち込まれていく。ラウラの体を蹴飛ばして離脱しながら、右手でライフルを手に取る。照準はワイヤーブレード。意識が操作に回っていないだろう遠く離れた一本を、緑の閃光が打ち抜いていった。胴体装甲損傷拡大の文字が視界によぎる。先制はいただいた。

「馬鹿な……！　換装の隙などなかったはずだっ！」

ラウラの表情が歪む。ダメージを負っただけじゃなくて、俺の装備が一瞬で変わったことが不可解で仕方がないようだ。
今イグナイテッドを包むのは、空に吸い込まれそうな青色の装甲。背中には高機動型スラスター。シルエットを変更したのは、ラウラが腕を振り上げたあの一瞬。

トーナメントまでの間シャルルと訓練してきたことは、インパルスの欠点でもあった『換装にかかる隙』を克服することだった。イグナイテッドが全距離に対応できても、戦艦の援護がないＩＳでの戦闘では、換装の隙が命取りになる。換装の機をうかがう以上に、隙を減らすことが肝心だった。それで参考にしたのが、シャルルのＩＳと戦い方だ。
シャルルの『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』は、大容量の拡張領域（バススロット）を備える専用機。さらにシャルルは、それを存分に活かすことのできる武装の『高速切替』が得意だった。
莫大な容量による換装装備の豊富さ、それを瞬時に量子変換、呼び出（コール）しするための時間短縮。二人でずっと訓練してきて、ようやく形になった。これでイグナイテッドの特性を最大限に引き出すことができる。

「認めるものか……あいつも、貴様もっ！　貴様の言う力などっ！」
「俺だけの力じゃないさ……それも分からないお前に、俺はっ！　俺たちは負けないっ！」

残った三本のワイヤーブレードを射出しながら、肩のレールカノンを撃ち出すラウラ。
冷静さを残していても、数の減ったワイヤーでは牽制も難しいはずだ。なら次に来るのは――

「終わりだっ！　私の目の前から消えろっ！」
「くっ！？」

突き出された両手が交差されて、俺の動きをピタリと止める。ＡＩＣに捕まったみたいだ。
一人なら脱出も難しいだろう。でも俺は、一人じゃない。一人で戦ってるわけじゃない。

ターゲットサイトが俺に向けられた。けど、発射の直前、ラウラの後方から機関銃が浴びせられる。上方に回避動作をしたところで、俺の全身に自由が戻ってきた。

「シン、待ったかなっ！？」
「助かったよ、シャルル。そっちは大丈夫だったか？」
「うん。彼女はまだ鼻息荒くしてるけど」
「そっか、ハハ……」

ちらりとセンサーを見遣る。食い入るようにこっちを見ているあの姿……やっぱり気にしないでおこう。うん、気にしちゃダメだ。
気を取り直して、もう一度サーベルを引き抜く。シャルルが来てくれたならもう遠慮はいらない。シャルルを信じて、二人で戦うだけだ。

「シン、切り込める？」
「ああ、任せてくれ」

そうシャルルに答えたとき、思わず俺は笑ってしまった。

切り込む……か。俺が前に出て、後ろであいつが援護してくれて……

こんなところまで、レイに似てなくていいのに。
でも、なんだか久しぶりの感覚だ。なら今回も思いっきり、頼ってもいいよな？

「行くぞ、シャルル！　援護してくれっ！」
「了解！　ベストを尽くそう！」

迫り来るワイヤーブレードは無視して、真っ直ぐ前にだけ飛び込んでいく。周囲のブレードはシャルルが撃ち落してくれるから、俺はラウラだけを見つめ、加速を増す。

「シンはやらせないっ！」
「だが、馬鹿正直に飛び込んできたところでっ！」
「はあああっ！」

再びプラズマ手刀の光が伸びて、俺とラウラは切り結んだ。右腕の手刀は盾で防ぎ、左腕はサーベルで応戦。縦、斜め、横にと幾筋も光が交差していく。

「この程度で、私がぁっ！」

苛立ちを募らせたまま、ラウラが強く吼えた。両手を力任せに叩きつけて、盾ごと俺の体を吹き飛ばす。すぐに肩のレールカノンがシャルルを砲撃。シャルルが回避に気を取られた隙に、ワイヤーブレードを一本だけ俺の足に絡めて、地面へと放り投げた。

「ちいっ！」
「貴様は後でいいっ！　まず目障りな骨董品からだっ！」
「シンっ！　くぁっ！」

ＡＩＣがシャルルを縛りつけ、レールカノンが次弾を装填する。
普通に援護に行っただけじゃ間に合わない。
でも、ラウラの意識がシャルルに行ったここがチャンスだ。
「間に合えよっ！」
地面に叩きつけられる前にワイヤーを切断。空中を旋回しながら、手にしていた盾とサーベルを放り捨てて、急加速をかける。
「ふふっ」
「勝負を諦めたか？　殊勝なことだ」
「違うよ、信じてるだけさ。シンは約束してくれたから」
「戯言を……消えろっ！」
火を噴くカノン砲。傍から見れば絶体絶命だろうその状況で。それでもシャルルは信じてくれている。俺を、俺との約束を。
俺は約束は守るさ。今度こそ、絶対に。
「僕のことを……守ってくれるって」
「うおおおっっっっ！！」
動けないシャルルの前に躍り出て、砲弾の直撃を浴びる。着弾の瞬間、黒煙が俺の全身を包んだ。激しい衝撃が俺の体を揺さぶる。ダメージはフェイズシフトが防いでくれてるけど、衝撃だけは吸収しきれない。それでも、この程度――
「はっ、身を挺してかばったかっ！？　だがこれで貴様は――」

「ほら、ね」
「――ぅあああっっっっ！！」
衝撃と黒煙を振りほどいて、スラスターの最大加速がラウラを正面に捉える。
俺が振りかぶっているのは、身の丈ほどもある巨大な大剣。ソードシルエットに搭載されている対艦刀が、その光の刃を生み出していっそう強く輝く。
換装することなしに、装備だけの呼び出し（コール）。
エネルギーの消費は甚大だけど、引き換えにされた必殺の一撃。
シャルルとの特訓で身に着けた正真正銘、最後の奥の手だ。
決めるのは今、ラウラが勝利を確信したこの瞬間。
俺を信じてくれたシャルルのために。
袈裟懸けに大剣を振り下ろした。
「うぉあああっっっっっ！！」
「ぐああっ！」
黒い装甲に食い込んでいく光の刃が、シールドエネルギーを瞬時に消しとばし、けたたましく損傷拡大のアラートを鳴らす。
最後に一押しして切り抜けると、ラウラの体が傾いて、地面に力なく落下していった。
俺たちの勝ちだ。
そう思ったとき、突然に異変は起きた。
「あああああっ！！！」
「っ！？　ラウラっ！？」

絶叫と共に、黒い装甲が電撃を纏い、ぐにゃぐにゃと形を変えていく。光の全てを呑み込むような漆黒の塊が、腕を挙げ、足を放り出し、歪に何かを形作っていく。

今まで一度だって見たことのない、奇妙で気色悪い光景だった。何が起きているのか分からなくて、思わず息を呑む。

地面に降り立ったのはさっきまでの機体じゃない。一筋の光も差さないだろう、真っ黒な機体だった。腕と足に着けられた申し訳程度の装甲。その手にしているのは、同じ真っ黒な刀。まるでそれは一夏の『雪片弐型』で――

「――っ！　なっ！？」

赤いセンサーアイが俺を捉え、居合いの構えのまま飛び込んでくる。刹那の一瞬、刀が振るわれて、対艦刀に食い込んでいく。速いなんてものじゃない。防御するのが精一杯だった。いや、まだ相手は構えを解いてない。不味い――

「くっ……でやあっ！」

咄嗟に大剣を投げつけて離脱したけど、剣は目の前で真っ二つにされた。

「シンっ！　今そっちに――」

「来ちゃダメだっ！　近寄ったらやられるっ！」

いったい何が起きたのか分からない。とにかく、ラウラを止めないと……くそっ！

シルエットをブラストに変更。砲塔からジャベリンを抜くと、その切っ先を目の前の黒に突きつける。間合いさえ取れれば――

「うおおおっ！」
「っ！？　一夏っ！？」

観客席のバリヤーを突き破って現れたのは、黒と対照的な純白。一夏の百式だ。
一夏が振るった刀をたやすくかわして、漆黒はまた居合いの構えから痛烈な一撃を浴びせる。白式は回避しきれないまま胴体に直撃を受け、上段の構えから叩き伏せられた。

「がっ……！」
「一夏ぁっ！！」

地面に投げ出された一夏を追って、観客席から篠ノ乃が飛んでくる。俺とシャルルも二人を追って地面に立てば、一夏は真っ直ぐに黒い機体を見つめて叫んでいた。
周りの何も見えていない。ひたすら黒を、怒りのまま見据えて、吠え立てている。

「どけっ！　あいつ、許さねえっ！　千冬姉のデータでっ！　くそっ、ぶっ飛ばしてやるっ！　放せっ、放せよっ！」

瞳に映る怒りと敵意。ラウラと、昔の俺と変わらない瞳だ。初めて見る、一夏の強い憤りの感情。それはとても危険なもので、きっと一夏は後悔する。

ああ、これは何か言わなきゃいけないな。

「放せ、箒！　邪魔をするって言うならお前も――」
「このっ！　この馬鹿――アスカっ！　何のつもりだっ！」

篠ノ乃の手が一夏を張り倒す前にその手を止めて、一夏の前に歩いていく。
篠ノ乃には悪いけど、これは俺の役目だ。
「一夏……」
「シンっ！　そこを退けよっ！」
深く息を吸い込んで、腹に力を入れて思い切り――
「食堂S定食三回分っ！！」
ペナルティの内容を叫んだ。
「……は、はあ？」
「食堂……？」
「S定食……？」
怒り狂っていた一夏を筆頭に、みんながぽかんと口を開ける。
「無理を聞くんだから、これぐらい当然だろ？　俺にシャルルに篠ノ乃に、あとセシリアと凰（ファン）の分もな」
「お、おいシン。どういうことだよ……？」
唖然とする一夏は、ようやく周りが見えてきたみたいだった。これなら話も聞けるようになっただろう。
「なあ一夏。もしお前があのまま突っ込んでいって負けたら、みん

なはどうなる？　もしあの黒いのがみんなを傷つけたら、お前はその時……何かできるのか？」
「っ！　それはっ……！」
「力が足りなかったって悔やんで、闇雲に強くなろうとして。結局……同じことを繰り返すだけなんじゃないか？」

きっと一夏なら分かってくれる。俺は信じてるから、こうやって話ができるんだ。

「一人で何でもできるって勘違いして、敵に向かって行って……それで大切な人が傷ついたら、何の意味もないんだ。たとえ敵を倒しても、みんなを守れなきゃ……そんな力があっても、辛いだけだ」
「……」
「俺はバカだったからさ。何を言われても、ぶん殴られても、そのことが分かんなくて……一つも守れなかった。でも、一夏は違うだろ？　お前は俺と違って、ずっと真っ直ぐなんだから」
「……俺は……」

力任せに握られていた刀が、少しずつ緩んでいく。
一夏は俺と違う。失っていないから、真っ直ぐでいられる。
まだ何も、失ってないんだ。
失わせない。そんな悲しい思い、俺だけで十分だ。

「一人で背負い込まなくて良いんだ。俺たちが……みんながいる。お前のことは俺が守る。みんなが守ってみせる。だから一夏も、少しずつできるようにすればいいんだ。それが分かるのも、できるのも、一夏の強さだ」
「俺の強さ……」

一夏は強い。それはただ、力があるってことじゃない。『力』を

持って、真っ直ぐでいられることだ。

「もう頭も冷えたよな？」

「あ、ああ……」

「行くんだろ？　俺は一夏を信じる。お前が俺を信じてくれたみたいに。」

「シン……」

「後ろには俺たちがいる。だから今は遠慮なく……」

一夏の胸を、ドンと強く叩いた。

「アイツをぶっ飛ばして来いっ！！」

一夏なら分かってくれる。一夏ならできる。レイに、ルナに、アスランに……みんなのおかげで、ようやく俺も言えるようになったんだ。みんなを信じていいんだ。頼っても良いんだって。

「……ああっ！　みんなありがとなっ！　行ってくるっ！」

そう言って笑うと、一夏は刀を強く握りなおして、空へと駆けていった。

空に昇る白の姿を見守りながら、俺は『生徒指導室行きの覚悟はしとけよ？』って言うのを忘れてたことに気付いて、思わず苦笑いをしてしまう。

一夏。無茶をするのはいいけど、大変なのはその後なんだぞ？

◇

（参ったな……やっぱりシンには敵わねーや）

空中で雪片弐型を構えながら、一夏は苦笑が収まらなかった。

気付かなかったのだ。世界一尊敬する姉も、越えたいと思った兄貴分も、自分の強さにとっくに気付いてくれたというのに、自分だけが。

信じることは、一人で思い込むことじゃない。真っ直ぐに、信頼をしてみせることだ。

それだけのことに気付かずに、頭に血を上らせていた。きっと今の今まで、ずっとだ。

甘く見ていたんだろう。シンのことを。簡単に追いつくと、追い越せると。

それがどれだけ遠いものかすら、見えていなかった。

シンの言葉の一つ一つが、殴られるよりよほど応えた。自分の幼さを痛感させられた。

あれほど姉に、強さというものを教えてもらっていたというのに。

けれども、もう間違えはしない。

誰かを守るために、どこまでも気高く、強くあり続けた姉と。

強さを貫くために、何が必要なのかを見せてくれた友と。

その強さを抱かせてくれる仲間達と。

みんなを守るために、自分も強くありたいと、心から思う。

そうでなければ、シンを追い越すことはできないのだから。

迷う必要はない。みんなが信じてくれているのだから。

今は、財布の心配だけをしていればいい。

「零落白夜――」

一夏が目の前の黒を睨みつけ、エネルギー刃を開放する。
雪片弐型の刃が細く鋭く、まるで一夏の意識に呼応するかのように変形していった。
日本刀――洗練された刃が形成され、居合いの構えを取る。

衝動に身を任す黒。対照的に静かな白。
そして、黒と白の激突。
黒い刃が鋭く切り込まれた。

それを弾いたのは、白い刃。

横になぎ払われた雪片弐型が相手の刀を吹き飛ばし、続けて頭上に構えられた刃が、まがい物の強さを断ち切った。
『一閃二断』。それはただの剣技ではない。
一閃には、自分の信じる強さを込めて。
二断には、自分を信じる仲間の思いを込めて。
一夏が今まで関わってきた全てに教えてもらった、強さだった。

「ガ、ガ……」

黒い影が離れ、中から出てきたのはどこにでもいる、弱さを持った少女。
崩れ落ちるラウラの体を抱きとめて、ひとつ大きなため息をつく一夏。

「俺も兄貴に勘弁してもらったから……ぶん殴るのは、止めといてやるよ」

そう言ってシンの方に顔を向け、また一夏は苦笑いを浮かべた。
シンが拳を突き出すのを見て、剣を握ったまま同じように拳を突き出してみせる。
まだ一夏は、笑っていた。
後になって厳しくも優しい姉に、首を掴まれ引きずられ、ぶん殴られることに気付かずに。

第九話『強さと明日と』（後書き）

どうも、ここまで読んでいただきありがとうございました。
誤字・脱字は是非ご指摘ください。
また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくて光の結社に入ってしまいます。
お気軽にご感想をください。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

第十話『君と生きる明日』（前書き）

※以下の事にご注意ください。

・感想の返信まで間に合いませんでした。必ず返信しますので、少しだけお待ちください。

・後日修正の可能性が大有りです。

第十話『君と生きる明日』

ラウラの一件のせいで、今日のトーナメントは中止が決定されたらしい。俺とシャルルは事情聴取、観客席から乱入してきた一夏は生徒指導室送り。それが終って俺たちは、ようやく食堂に戻ってこれた。

ラウラはあの後保健室に運ばれていったけど、命に別状はないそうだ。意識もすぐに戻ったらしくて、それを聞いて俺もほっとしている。明日になったら会いに行こう。今なら少し落ち着いて、話ができるかもしれない。

「ぐっ……一枚、二枚、三枚……」

ある意味、ラウラより重症なのはこっち。織斑先生からの魂の指導を受け、一夏は絶賛沈没中だ。片手は殴られた頭を押さえて、もう片方の手でお札をめくっている。

「S定食の……五人分×三食分……マジかよ……」

冷静になった頭が今になって、S定食三回分の恐怖を理解したみたいだ。

食堂での一番高価なメニューであるS定食。IS学園の学食は、学生にも手の届きやすい値段に設定されている。それにも関わらず一夏が嘆いているのは……理由は推して知るべし。スペシャルのSが付くというのは伊達じゃない。

「フン、勝手に突っ込んでいったお前が悪い」

「バカな兄貴の癖がうつったのかしらね」

「これで少しは反省するのでは？」

全員で腕を組みながら、冷たい視線を向ける女子三人組。トーナメントが中止になったせいで、今日は殊更機嫌が悪い。実力を見せる機会が無くなったのが、よほど気に入らないんだろう。でもみんな……それは奢ってもらう側の態度じゃないぞ？　それと凰（ファン）、バカな兄貴って誰のことだ？　いつもいつも人のことをバカ呼ばわりして……まあ、今はいいや。

「一夏、お前の定食代は俺が払うから。元気出せって、な？」
「ほら、一夏の好きな緑茶だよ？」
「うう……二人とも、ありがとな……」

シャルルと二人で、できる限りのフォローを入れる。篠ノ乃も、セシリアも凰も、優しい言葉の一つぐらいかけてやれば良いのに。

「アスカにデュノア、一夏をあまり甘やかすな。今日はそいつの自業自得だからな」

特に不機嫌なのが篠ノ乃だ。そんなにトーナメントが大事だったのか？　それは、一夏と一緒に気合が入ってたのは知ってたけど……もしかして、何か賭けでもしてた？　いや、篠ノ乃の性格からして、あんまりそういうことも無さそうだし……うーん、分かんねー。

「トーナメント中止……せっかくのチャンスが……」
「トトカルチョが……ビジネスチャンスが……」
「もっとシン×シャルルが見れると思ってたのに……」
「二人のプロマイド……予約してたのに……」

ため息を吐いてトボトボと食堂を出て行く集団。トーナメントの中止を聞いて、みんなショックを受けていた。けど、何だか試合に

出られなかったことが残念なわけじゃないみたいだ。プロマイドって、何のことだろう？

「あ、そう言えば。箒、先月の約束だが付き合っても良いぞ？」
「そうか。それは――何？　い、いい、今何と言った？」
「なっ！？」
「なんですって！？」
「いや、付き合っても良いって」

思い出したように言う一夏と、それを何度も聞きなおす篠ノ乃。それから慌てたように身を乗り出すセシリアに凰。俺の知らないところで話が進んでたみたいだ。へー、一夏そんな約束してたのか。知らなかった。あれ？　でもさ――

「どういうことですのっ！？」
「説明しなさいよっ！」
「つ、ついに私と一夏が……ああ、苦節何年だろうか――」
「なあ一夏、聞いていいか？」
「ん？　別に構わんが」

「篠ノ乃と付き合うって、何に？」

食堂にいたほぼ全員の頭が、まるで吸い込まれるように机にぶつかった。さっきまで騒いでいた三人も、隣で穏やかに笑っていたシャルルも、周りで話を聞いていた人たちも。
え？　みんな、どうしたの？　何かあったのか？

「信じられませんわ……まさかここまで……」
「こ、ここここ、この、このバカは……」
「落ち着け、篠ノ乃箒……もう私は木刀を振り回す必要はない……」

顔も上げないで机に突っ伏しながら、三人がブツブツと呟く。なんだか怖い光景だな……みんな、そんなことは止めてくれよ。ホラー映画みたいで怖いから。
シャルルはゆらりと顔を上げると、俺のことをまるで深海魚でも見るかのような目で見てきた。いや、俺は人間だから。コーディネイターだけど同じ人間だから。

「みんなどうしたんだ？　シャルルもどうしたんだよ？　なあ？」
「シン……君って実はこの世界の人間じゃなくて、遠い銀河ゲキニブ星からやって来た王子様なんじゃないかな？」
「へ？」

そんなわけないじゃないか。違う世界から来たってとこは合ってるけど。

「あのなあ、シン」

唯一頭を沈めなかった一夏も、俺のことを少し呆れるように眺めていた。一斉に上げられたみんなの顔が、一夏を見つめる。え？一夏は分かるのか？

「お、おい一夏。みんなどうしたんだ？」
「みんなも呆れるって。付き合うって言ったらさ――」

「――買い物だろ、多分」
「あ、そっか」

机が割れんばかりの勢いで、みんなの頭が叩きつけられた。

「「え？　え？　え？」」

もはや怪奇現象だ。今度は一夏にも理由が分からないらしい。俺たちの頭には今頃？マークが浮かんでいるんだろう。しょうがないだろ？　だって全然分かんないだから……

「シン、とりあえずここから出ようか」
「え？　でもまだ夕食が……」
「後にしてね」

シャルルは素早く俺の手を掴むと席を立って、出口に引っ張っていってしまった。唖然とする一夏を置いて。

「シャルル、一夏は……」
「ああいう風になりたい？」
「へ？」

食堂のドアを閉めた途端、中からもの凄い怒声と一夏の悲鳴が聞こえてきた。

「「「このゲキニブ星第二王子がああぁぁーーっ！！」」」
「シン、シャルル、助け――ぎゃあああああぁぁぁっ！」

中の惨状を想像してしまい、思わず身震いしてしまう俺。そんな……どうしてこんなことに……
買い物に付き合うってこういうことなのか？　そんな買い物、俺は嫌だ。

「もう……シンもみんなも、相変わらずなんだから……これじゃ……」

「ん？」
「言い出すことも、言えなくなっちゃうじゃない……」
「え？」

そう言ったシャルルの言葉は、どこか寂しそうだった。
手を引かれて後ろを歩いていたから、表情を見ることはできない。

「……シン、今日から大浴場が使えるんでしょ？　行ってきなよ。その間に僕も、準備するから」
「う、うん。じゃあ、風呂に入ってくる」
「うん、ありがとう」

そう言えば一夏の念願かなって、今日から大浴場の使用が解禁されたんだっけ。一番喜ぶだろう一夏が、あの惨状だけど。湯船には入れるのか？　傷がしみて痛そうだな……可哀想に。

あと、シャルルが言った準備って何のことだろう？　大事な話って、準備のいることなのかな？

◇

そんなわけで、俺は一人で風呂に入ってきた。大浴場なんだから当たり前だけど、一人で使うにはちょっと大きすぎだった。あの大きさなら、調子に乗って泳いでも平気だろうな。まあそんなこと置いといて、シャルルが待ってる部屋に戻るとしよう。

「シャルル、ただいま」
「あっ……おかえり、シン」

お互いに声を掛け合ってから俺は中に入っていく。部屋に座っていたのは、スポーツジャージを着た金髪の女の子で――へ？　ヤバイ、部屋間違えた！？

「ご、ゴメン！　部屋間違えたっ！」
「シン、待って！　部屋なんて間違えてないよっ！」
「そんなわけっ！な……い――」

――目の前の光景が信じられない。部屋を間違えたのかと思ってドアの番号を見直してみたけど、間違いない。正真正銘、俺の部屋だった。

食堂で定食を食べそこね、学園生活初の風呂に入りに行き、戻ってきただけ。そう、特別なことなんてしていない。いつものように、俺のルームメイトが部屋で待っているはずだった。そのはずだったんだ。

寝食を共にしていたルームメイトが、部屋の真ん中にちょこんと座っている。視線を部屋全体に巡らしても、見えるのはいつもの目覚まし時計。制服。大事な携帯。やっぱり間違いじゃない。二つのベットもそのまま。俺たちの部屋だ。

大事な話があるって言ってた。どんな悩みだって聞いてやるって、答えた。

視線を前に戻す。金色の髪が眩しい、上品な佇まい。スポーツジャージを着ていても崩れない、その雰囲気。ただし、いつもと違うところがあった。

後ろでまとめていた金髪は今、しなやかに背中に伸びている。ジャージから浮き上がるボディーは、丸みを帯びた曲線的なラインを描いていた。全身から香る、甘い匂い。

それらから導き出される結論は一つ。

「お、女の子……？」

「うん、そうなんだ。今まで黙っててゴメンね……」

胸に手を当てて、ほんのり顔を上気させて言った。柔らかな印象はそのままでも、その仕草が妙に心を揺さぶる。

「ねえ、シン。僕、本当は……女の子なんだ」

まさか、シャルルが女の子だなんて――

――ちょっと待てよ？　妙な既視感が……どこかで見た気が……じゃなくてっ！　そんなこと今はどうでもいいだろっ！？

深く深呼吸をする。大事な話だって言ってたんだ。どんな悩みでも聞いてやるって言ったんだ。慌てちゃダメだ。慌てちゃダメだ。慌てちゃダメだ。

「やっぱり、驚かせちゃったかな？」

「――いや、もう平気。だから――」

深呼吸を繰り返して、シャルルの前に座った。

「――話、聞かせてくれるか？」

「……うん」

◇

「僕が男のフリをしてたのは、父からの命令なんだ。デュノア社社長から、直接の命令」

シャルルが語り出したことは、耳を疑うような内容だった。

「僕は妾の子どもで……お母さんが亡くなったときに、引き取られたんだ。たまたまＩＳ適正があったから、テストパイロットをすることになって……」

自分の知らない世界の話。遠い、自分と関係ない話。そう思うことはいつだって、本当は自分のすぐ傍にあるのに。

「それから、経営危機に陥ったデュノア社の復興をかけて、僕が送り込まれたんだ。男子生徒としての広告塔の役割と、同じ男子生徒の機体データを盗む……スパイとしての役割で。ああ、もちろんデータは盗んでないから安心して」

また俺は、気付いてなかったんだ。

「それに、これでもう終わりだから。僕は本国に帰るよ。デュノア社は……今更、僕には関係ないことか」

理解できないことだらけだった。

家族ってなんだ？　いつも優しくて、温かくて、大事なものじゃないのか？

どうして親が、自分の子どもを苦しめるんだ？

どうして親が、子どもを実験動物みたいに扱えるんだ？

親って、子どもを守ってくれる存在じゃないのか？

それに、どうしてシャルルは――

「――どうして、俺に話したんだ？」

分からなかった。どうしてシャルルが、俺に話してくれたのか。

「俺はシャルルのことに気付いてなかった。データを盗む機会だって、いくらでもあった。なのに、どうして？」

「……懺悔、みたいなものかな。みんなをずっと騙してきて……もうそんなの嫌だって、思ったんだ」

話を始めたときから、シャルルはずっと表情を変えなかった。淡々と、何の感情もないように、自分の思いを押し込めるようにしか、話をしなかった。

「シンが言ってくれたんだよ？　自分の明日を選んでいいって。だから僕はこの道を選んだんだ。僕はフランスに帰るよ」

「そんな……ここにいればいいじゃないか！？　なのにどうして！？」

シャルルが首を横に振る。少し笑みを浮かべてるけど、無理をしてるのが見て取れた。

「ＩＳ学園にいれば、三年間は自由だろうね。でも、みんなを騙したままなんて耐えられないよ。僕のことを信じてくれてる人たちのことを……騙し続けるなんて」

「それでも、シャルルは言ったじゃないか！　みんなと一緒にいて、嬉しいって！　楽しいって言ったじゃないかっ！」

たまらずに声を荒げる俺を、シャルルが静かに見ている。
嬉しそうで、寂しそうで、胸の締め付けられる表情。
「……これが僕の運命だから。今まで、本当にありがとう」
シャルルはそう言って頭を下げた後、もう一度笑顔を作ってみせた。
初めてシャルルが来たあの日と、何一つ変わらない笑顔だ。
そしてそれに重なる親友の笑顔。レイが見せてくれた、最後の笑顔。

何を言えばいいのか、ようやく分かった気がした。

『レイの運命は変わらないのか？』

メサイアで議長に会って、話をしてもらって、どうしても分からなくて……だからレイに聞いたんだ。

『議長は運命を受け入れるのが幸せだって言ったけど、レイの運命は……』

アスランの言うことも、議長の言うことも、どっちかが正しくて、どっちかが間違ってるなんて思えなかった。両方とも納得できるところはあって、違って感じられることもあって……正直なところ、今でも分からない。そう簡単に答えが出るものじゃないし、簡単に結論付けちゃいけないことなんだと思う。
それでも、教えてもらったこと、分かったことはある。

誰だって自分の明日を生きていたいし、それを諦めたらいけないんだ。
生きている限り、明日はやってくるんだから。

『そろそろ出撃だぞ』

あの時笑ったレイに、俺は何も言ってやれなかった。答えも貰えなかった。
だけど今、俺は勝手に答えを言おうと思う。レイの分を、自分で勝手にだ。
レイ、怒らないでくれよ？　だって――

「……変わらないなら、切り開けばいいんだ」
「え？」

――もう俺は大切な人たちの、その明日を諦めたくないから。

「シャルル、諦めちゃダメだ。まだシャルルには明日があるんだから」

驚いた表情のシャルルを、まっすぐに見つめる。伝えたいことはこの際、思いっきり言ってしまおう。

「シャルルはここにいる。ここで明日を選べる。明日を生きていられるんだ。それを自分から捨てるなんて、そんなのダメだ」
「……」
「シャルルは……本当はどうしたいんだ？　誰かが言ったことなんて、運命なんて、今は気にしなくていいから。本当のことを言っていいんだ」

「……」
「俺は自分の意志でここにいる。みんなが後押ししてくれたことだけど、決めたのは俺自身だ。それと同じで、前にも言った通り、最後に決めるのはシャルルだ。他の誰でもないシャルル自身だ」

伝えたい。
伝えたいことが止まらない。
伝えたいから。
伝えたいことを。
伝えたい人に。

「誰にもすがらないで、シャルルが明日を選んで……それでいいんだ」

シャルルは俺の信じる、大切な人なんだから。

「でも、僕は……」
「大丈夫だから。俺は約束は守るさ。もしシャルルの明日を奪おうとする奴がいても――」

シャルルを信じる気持ちは、ずっと変わっていないから。

「――俺がシャルルを守るから。どんなことがあっても、絶対に」
「……っ！」

はっとした顔をした後、シャルルはうつむいた。手をぎゅっと握りしめて、肩を震わせながら。

「……僕は……僕は……」

ポタリと一つ、シャルルの手に雫が落ちてきらめいた。
「僕は、ここにいたい……」
「……うん」
雫がシャルルの言葉に重なるように、いくつも零れ落ちていく。
シャルルの気持ちを押し出すように、いくつもいくつも。
「僕はここにいたい……！」
「僕はここにいたい！　もっとみんなと一緒に笑っていたい！」
「もっとみんなで！　ずっとこの先も！　ずっと、シンと一緒に！
一緒に笑っていたい！　これからもずっと、ずっとずっと……僕はシンと一緒にいたいっ！　一緒に、いたいよ……」
涙の雨が、少しずつ収まっていった。顔を下に向けたまま、シャルルは言葉を紡いでいく。
「シン、本当にいいの……？」
「ああ」
「僕、今までずっとシンのこと裏切ってたんだよ？」
「気にするなよ。俺は気にしてない」
「これからずっと、シンに迷惑かけるかもしれないんだよ！？」
「シャルルがここにいる。俺はそれでいいさ」
シャルルの震えが止まった。袖で顔を何度もぬぐって、息を整えて、それから――
今まで見たことのない、初めての表情。
冷たい雨を吹き飛ばす、晴れ渡った空の下。

暖かな日溜りのように――

「うん！　約束っ！」

――シャルルが笑った。

「うん、約束する」

返事をしながら俺も笑った。シャルルと同じように、自然に笑えていた。

「のど渇いただろ？　たまには自販機で、飲み物買ってくるよ。シャルルは何がいい？」

「……シャルロット」

「え？」

立ち上がってドアに向かう俺を止めたのは、まだ赤い目をこすっているシャルルの言葉だった。

「シャルロット。お母さんがくれた、僕の本当の名前。二人でいるときだけでいいから、僕のことを呼んで。本当の、名前で」

「うん、分かった。じゃあシャルロット、何が飲みたい？」

「うん、シンにお任せするよ」

「了解だ」

敬礼を一つして、俺は部屋を後にした。廊下に出た時に深く息を吐いて、それから歩き出す。

これで良かったんだよな？　レイ……
俺って勝手だから、あんなこと言っちゃったけど、それでも良いよな？
ああ、さっきはお前が言ったこと真似させてもらった。
だって、お前のモノの言い方っていっつもクールでさ。それでいてはっきりしてて、頼りがいもあって。一々格好良いんだよ。
へへっ、こうやって褒めても、レイは涼しい顔してるんだもんな。人がせっかく褒めてるんだから、もっと喜べよ。

……ありがとう、レイ。お前がいてくれて良かった。
それと……ゴメンな。お前との約束、守れなくて。
でも、今度こそ守るから。約束は絶対に。
だから、またな。レイ……

◇

自販機でコーヒー牛乳といちごミルクを購入。パックを手にしながら、俺はシャルのことに考えを巡らしていた。

さて、シャルル――じゃなくてシャルロットか。じゃあシャルでいいよな？　ルナみたいに愛称で呼んで。
で、シャルにはここにいていいと言ったけど……現実問題として先送りするわけにもいかないし。とりあえず明日、こういうことにも詳しそうだから、葛城さんに相談かな。困った時の葛城さん頼みか……自重したいとは思うんだけどなあ。結局、自分では考えてないや。

「見つけたっ！　アスカくんよっ！」

「アスカくーんっ！」
「え？　みんな、どうしたの……？」
クラスメートが数人駆け寄ってきた。みんなの目がらんらんと輝いている。非常に嫌な予感しかしない、マジで。
「この後食堂に集合！　“アレ”持ってきてねっ！」
「もちろんデュノア君も一緒ね！」
「あ、あのさ。アレってもしかして……」
食堂に集合で、アレ。嫌な予感がするどころの騒ぎじゃない。
また誰かのトラウマが生まれる気が……

◇

「それではこれより！　第三回『ドキドキ！　マリンクッキー！！』を始めまーす！」
「「「「「「「イエーーーーーーーーイっ！！」」」」」」」
食堂の中央で開始の宣言。一斉に沸き立つ生徒一同。
嫌な予感が的中し、恐怖のゲームが再来してしまった。こんなことになるなら早く処分しとけばよかった……
「アンタたち……随分仲が良さそうね？」
「お二人とも、やっぱりその気が……」
「事情があるんだよ……放っておいてくれ」

参加者の中にいたセシリアと凰が、半眼で声をかけてきた。ジトーっとした視線が痛い。ついでに言えば二人だけの視線じゃなくて、周囲の視線全部が痛い。

理由？　今度は俺でも分かるさ。コレだ。

「シャル……もう大丈夫だよな？」

「うん」

「じゃあ、そろそろ離してくれないか？」

「ヤダ」

「はあ……いつまで繋いでればいいんだ？」

「ずっと」

「はあ……そうですか……」

「えへへっ」

部屋に戻ってから食堂にいるこの時まで、シャルは俺の手を握って離してくれない。こうも堂々と言われてしまうと、俺も何も言えなくて……みんなの視線で、針のむしろだ。ヒソヒソ声が心をチクチク刺して、居心地が悪い。それにさっきからフラッシュが連続でたかれて、眩しくてたまらない。うあ……シャルが元気になったのは嬉しいけど、コレはキツイ……

「嫌だ……もう語尾にマリンだけは嫌だ……俺はもう誰も信じねえ……」

「事故だったんだ、アレは……仕方がなかったんだ……」

俺とシャルを見ていないのは、隅っこでトラウマを再発させている二人ぐらいだ。ていうか誰だよ、一夏と篠ノ乃を呼んだの……二人とも来ちゃってるし……あ、しっかり順番を決めるくじ引きは引いてる。律儀だよな、あの二人は……

「ささ、アスカくんから引いてねっ！」
「ああ。えっと……四十一番だ」
「僕は……四十二番だね」

最後から一つ前と最後。俺とシャルは最初にゲームをしたときと同じ順番だ。四十人超の参加者なんだから、これは流石に当たらないだろうな。クジ運だけは良かったみたいで、ちょっと安心した。

「では、一番の方からどーぞっ！」
「えいっ！　マグロ、セーフだねっ！」

真ん中に置かれた箱から、一人ずつクッキーを引いていく。どうせ俺たちには回ってこないだろ……当たった人には可哀想だけど、罰ゲームの様子を見て笑わせてもらおう。

「……イカだ。まあ、まだ当たらないわよね」

一桁台。当りが出るには早いだろうな。

「今回は……クジラですわね」

二桁に入った。ゲームが長引いたほうが盛り上がるもんな。

「……私の勝ちだぞ！　イワシだ！」

二十番台。まだ半分だしな。それと篠ノ乃、おめでとう。

「サバだっ！　やっぱり俺はみんなを信じるっ！」

三十番台。一夏、今度は助かってよかったな。信じてくれるみた

いで良かった。

「さあ、最後はアスカくんとデュノアくんの一騎打ち！　愛し合う二人、勝負の行方は！？」

「……へ？」

気が付いたら、残りは俺とシャルだけになっていた。え？　嘘だろ？　あれだけ人数がいて……残り二人！？

「ほら、シン。行こうよ」

「ま、マジっ！？」

手を繋いだまま真ん中に歩いていくと、さっきまでより視線が俺たちに集中していく。

箱に書かれたサメの口が、俺にはとてつもなく大きく見えた。俺かシャルか……確立二分の一……

「さあアスカくん、どうぞっ！」

「迷うなっ！　俺はどんな罰ゲームでも……」

司会の子が嬉々として案内する。こりゃダメかもしれない。

半分諦めて、さめの口に手を突っ込んだ。

いくぞ、レイ！　援護してくれ！

中をごそごそとあさり、手に触れたものを掴んで引きずり出す。これは――

「――シャチ、だ。ってことは……」

「アスカくん、セーフ！　つまりデュノアくんの負けです！」

「あーあ、負けちゃったなあ」

周りから湧き上がる歓声。笑いながらシャルはサメのクッキーを取り出して、ポリポリかじり出す。助かったけど、罰ゲームはシャルか……なるべく、軽いものであってほしい。

「それではデュノアくんに罰ゲームを読み上げてもらいましょう！」

マイクを差し出され、シャルは箱の中を覗き込みながら罰ゲームの内容を発表し出した。何だろうな？　みんなの前でマリンダンスとかか？

「ええっとね。『前の順番の人に、海よりふっかーい――』

そこから先が言えないシャル。首から顔がみるみる赤くなって、てっぺんまで赤くなったとき、ようやく続きを口にした。

「『――ふっかーい、キス。キスの場所はもちろん、分かってるよな？』だって……」

時間が止まったように、食堂の音が消えた。

へー、罰ゲームはキスなのか。前の人……うあっ、俺だ。

アレ……待てよ？

キス……？

キス？

キッス！？

相手は――

「お、俺にぃっ!?」

「「「「「「キャーーーーーーーーーッ!!!!!」」」」」」

爆発する女子の歓声。食堂が消し飛ばないのが不思議なぐらいの衝撃が伝わっていく。

「アスカくんと、デュノアくんが、キス!?」
「ウソっ!?　信じらんないっ!」
「デジカメはっ!?　撮影用機材はどこっ!?」
「レコーダー持ってきましたっ!」
「お宝プロマイドだよっ!　一枚千五百円で予約開始っ!」
「生きてて良かった……あ、鼻血が……」

地に足がついている感覚がしない。ど、どうするっ!?　一夏たちに助けを――

「シン、トラウマを乗り越えて男は強くなるんだぜ?」
「乗り越えてみせろ、アスカ」
「せっかくの機会ですし、よろしかったのでは?」
「そうね。お似合いだわ」

俺たちを笑う気満々だった。くそっ、こんな危険物(クッキー)二度と買うもんかっ!　今度行くのは動物園にしてやるっ!

「アハハ……流石にちょっと、恥ずかしいね?」

手をぎゅっとしながら笑うシャル。ちょっと？　いやいやいやいや、俺はものすっごく恥ずかしいんだけど……そんな、何でシャルは平気なんだ？

「ねえ、シン……」

周りがまた静かになる。拾音マイクに囲まれながら上目遣いで、シャルが言った。

「僕とじゃ、嫌かな……？」

「煽り立てるようなことを言わないでくれっ！」

また大きく、女子の歓声があがった。顔に血が上って行ってるのがわかる。演技派のシャルは、罰ゲームにノリノリだった。

「もう……いつもはあんなに優しくしてくれるのに」

「誤解を招く言い方は止めてくれえっ！」

三度、女子の歓声。分かった。シャルも恥ずかしくて、少しおかしくなってるんだ。きっとそうだ。そうに違いない。そうじゃなければ……はっ！　そういうことかっ！

「ああっ！　キスっていっても、オデコとかほっぺとか、そういうところだよなっ！？　だよな、シャルっ！？」

「大丈夫。場所はもちろん……」

自分の唇に指を押し当てるシャル。それを今度は俺の唇に押し当てて――

「ここ、だからね？」
「〜〜〜〜っ！？　嘘だろおおおっ！？」
四度目の歓声で俺は腰を抜かしそうになった。顔は真っ赤なのを通り越して……今の俺なら変形して空を飛べるかもしれない。アスラン、俺を助けてくださいお願いですコノヤロー……頼みますよ、アスラン……
それともいっそ、気絶でもしちゃおうか？　そうすれば楽に――
「気絶しても、すぐに目を覚ましてあげるから……僕の王子様……」
――もうダメだ。シャルがおかしくなりすぎて、読心術まで使えるようになってる。
はやし立てる周りの声。早鐘のように打たれる心臓の爆音。
片手が俺の頬に添えられた。シャルの顔がどんどん寄せられて――

「シン・アスカはいるか？」

食堂に入ってきた声で、シャルの顔が止められる。みんなの視線の先にいたのはなんと、ラウラだった。とりあえず体をシャルから離そう……あ、捕まった。
コツコツとこっちに歩み寄ってくるラウラ。いったいどうしたんだろう？　もしかして助けてくれるのかな？
期待に満ちた視線を送ると、それに気付いたラウラは深々とお辞儀をした。無理だって？　やっぱり――
「今までの非礼を詫びたい。お兄様」

――お兄様？　へ？　おにいさま？　おにいちゃん？
みんなが一斉にポカンと口を開けた。もう俺の頭は状況に何一つ追いつけていない。
「ど、どういうことだ……？」
「織斑一夏が言っていた。シン・アスカは自分の兄のようであると。だから強いのだと。故に、私も今日から妹にさせてもらう」
「はあ！？　なんだそれ！？　一夏、お前何を言ったんだよ！？」
「俺だって、別に変なことは言ってねえぞっ！？」
慌てて自己弁護をする一夏。俺の知らないところで、何がどうなっているやら。
「お前が言ったことだろう？　私を守るとも、偉そうに。織斑一夏、わたしはまだお前に負けたつもりはないからな」
「ま、まあ確かにそう言ったけどよ……」
ラウラはそう言って、フンと鼻を鳴らして笑った。ああ、普通笑った顔、初めて見たな。自然に笑えるんじゃないか――
――ドカンッ！
突然、砲撃音が食堂を揺らした。
衝撃砲、だよな？　あの音は……
「せっかく良いところだったのに……シン、逃げよっか」
「へ？　逃げていいの？」
「逃げないと危ないから。じゃあ、ボーデヴィッヒさん。シンは連れて行くから」
「ああ。それではな、お兄様」

俺の手を引いたまま、みんなの中をするりと抜けて食堂の入り口に向かった。
呆然とする俺の目の前で繰り広げられる戦闘行為。三対一。女子三人対一夏だ。

「ところで一夏、私の分のS定食はないのか？」
「ラウラ！　何でお前の分まで払わなきゃいけねーんだよっ！？」
「一夏、アンタはいつまでも懲りないのねっ！？」
「ここで星に還して差し上げますわっ！」
「遠い宇宙で学びなおして来いっ！」
「何のことだ――うおぉあああああっ！！」

……可哀想な一夏。でも、一夏なら大丈夫だって信じてるから。
だから俺は手を出さない。手が出せないわけじゃないぞ？

「ねえ、シン。ほらっ」
「ん？　ああ、分かった」

シャルと二人で、みんなに向き直る。
片手は繋がれたまま。もう片方の手を、額に掲げて。
全員に聞こえるように大きな声で。俺とシャルの二人で言った。

「「みんな、また明日っ！」」

「あ、二人とも待ってよ！」
「キスシーンはっ！？」
「それはまた今度ね」
「今度でも嫌だっ！」

食堂を後にして、まだ手を繋いだまま、俺とシャルはずっと笑っていた。
みんなといられること、明日があること。
それが二人とも嬉しくてたまらなかった。

明日から、また騒がしくなるんだろうな――

――そう言えば、部屋に戻ったときに感じた、あの既視感は何だったんだ？　どこかで、全く同じ事を見た気が……いや、本で読んだ気が……まあ、思い出せないんだから大したことじゃないんだろ、きっと。

第十話『君と生きる明日』（後書き）

どうも、ここまで読んでいただきありがとうございました。
誤字・脱字は是非ご指摘ください。
また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくて会話のドッチボールをしてしまいます。
お気軽にご感想をください。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

番外編その一『今日のマユちゃん』（前書き）

※以下の事にご注意ください。
・今回は小ネタです。いつかちゃんとした番外編を書きますので、アンケートにご参加いただいた方々は、今しばらくお時間をください。本当にすみません。

番外編その一『今日のマユちゃん』

プルルルッ、プルルルッ、ピッ。

『もしもし、マユか？』

「うん！　お兄ちゃん、こんばんは～！」

『ああ、こんばんは。みんな元気にしてるか？　風邪ひいたりしてないよな？』

「大丈夫、マユもお父さんも、研究所のみんなも元気だよ！　お兄ちゃんも怪我とかしてないよね？」

『もちろんさ。まあ、毎日のように頭は叩かれてるけど……』

「あー！　お兄ちゃん、また授業中に居眠りしたんでしょ～。もー！　先生のお話はちゃんと聞かないとダメだよ！？」

『眠くなるから仕方ないだろ？　マユだって、理科とか算数とかやってると眠くならないのか？』

「マユはそんなことないですよ～だ。反省しないと、今日作ったクッキーあ～げない」

『はは、分かった分かった。明日から気をつけるよ。クッキーは家で作ったのか？』

「ううん、家庭科の授業で作ったの。ラッピングも完璧で、先生か

ら褒めてもらったもんね～」

『すごいじゃないか、マユ。それは明日貰うのが楽しみだな～』

「えへへ～。あ、でも、これから居眠りしちゃダメだからね？」

『大丈夫だって――ん、ああ。妹と電話してるんだ。顔がにやけてる？　余計なお世話だよっ！――ゴメン、マユ。ちょっとみんなに――』

「お兄ちゃんのお友達？」

『うん。今は食堂にいるからさ』

「お兄ちゃん、お友達とは仲良くしてる？　ケンカしたりはしてない？」

『ほとんどみんな女子だから、俺の方がからかわれてばっかりだよ。マユの方こそ、友達と仲良くはしてるか？』

「うん！　今度はみんなでカラオケに行こって約束してるの！」

『それなら良かった。何か困ったことがあったら言えよ？　俺が飛んでいって、一言言ってやるから』

「お兄ちゃん、過保護～。ふふ、でもありがとねっ！」

『過保護って、そんなことないだろ？』

「じゃあ、お兄ちゃんシスコンだ～」

『し、シスコンっ！？　こらマユっ！　そんな言葉どこで覚えた！――そこ、笑うなよっ！――』

「本に書いてあったよ？　妹のこと大好きな人のこと、シスコンって言うんだって。お兄ちゃんはマユのこと大好きだもんね？」

『そんな本読んだらダメだっ！　まったく……そりゃ、俺はマユのこと好きだぞ？　だって大切な妹なんだから……マユ、ちょっとゴメンな？――シャル、どうかした？　え、手？』

――ぎゅ～～――

『シャル、みんなの視線が痛いんだけど……はあ、仕方ないな――ああ、ゴメンな』

「またお友達？」

『ああ、大事な人なんだ――』

――ぎゅううう～～～～～♪――

『シャル、ちょっと強く握りすぎじゃないか？――それで、お兄ちゃんが妹のことを大事に思うのは当然だろ？』

「へへへ、そうだね。マユもお兄ちゃんのこと好き。マユは明日のデート、楽しみにしてるからね？」

『で、デートぉ？』

――ぎゅううう〜〜〜〜っ！――

『痛い、シャル。視線だけじゃなくて手が物理的に痛い。どうしたんだよ、もう――マユ、デートって言い方はなあ……』

「良いでしょ？　明日はお父さんも来れないから、二人きりなんだし。それともお兄ちゃん、マユとデートは嫌？」

『嫌じゃないよ。それじゃ、俺も張り切ってデートに――』

――ミシッ、ミシミシミシミシッ！――

『痛い痛い痛い！　マジで痛いから止めてくれシャル！』

「……ねえ、お兄ちゃん。シャルって人もしかして、お兄ちゃんの彼女？」

『か、彼女ぉ！？』

――ざわざわっ！――

「だってさっき大切な人って言ってたし、何だか仲良さそうだし」

『違うって！　俺とシャルはそんなんじゃな――』

――バキバキバキッ！――

『いだだだだだっ！　シャル、何で怒ってるんだよっ！？』

「……お兄ちゃんってやっぱり鈍いんだね」

『ハアハア……ゴメン、マユ、何か言った？』

「マユは何も言ってませ～ん。とにかく！　明日はしっかりエスコートしてよねっ！？」

『う、うん。明日は映画を観に行くんだよな？』

「うん！　“ボクはホントはオンナのコっ！”の公開初日だよ！明日行けば特典が貰えるの！」

『へ～、特典か。何が貰えるんだ？　ストラップとか？』

「もげろっ！　健一くん特大ぬいぐるみ！」

『も、もげ？　マユ、それってどういう……』

「えっとね、ちょっと待ってね？　確かこのチラシに……」

ごそごそ、ごそごそ。

「あ、あった。ええっと、『読者の皆様からのご要望にお応えして、遂にもげる健一くんのぬいぐるみが特大サイズで登場っ！　皆様、思う存分もいでやってくださいっ！　俺ももぐぜっ！』だって」

『ま、マユ……も、もげるのは、その、どこが……？』

「『※大変残念ながら、諸事情により健一くんからもぎ取れるのは頭部に変更されていますので、男性の方はご了承ください。だからといって、危険なので爆発もさせないでください。チクショウ！』

だって」

『あ、そうなんだ……アハハ……』

「楽しみだね！　貸した本、ちゃんと読んでくれた？」

『ああ。健一くん鈍かったよな～。何で香菜ちゃんのことに気付か……な……』

「？　お兄ちゃん？」

――ガチャンッ！――

ツー、ツー。

「あれ、切れちゃった。お兄ちゃん、どうしたのかな？」

プルルルッ、プルルルッ、ピッ。

「お兄ちゃん、今電話が切れちゃったけど、どうかしたの？」

『け、携帯落としちゃって……ま、マユ……ちょっと聞いていいかな……？』

「うん。けど、何を？」

『“ボクはホントはオンナのコっ！”の、あらすじを……』

「あ、お兄ちゃん、ホントはちゃんと読んでないんでしょ～？」

『いや、読んだから聞きたいんだ……頼むよ……』

「？　じゃあ、言うね？　えっと……『主人公の香菜ちゃんは高校一年生の女の子です。けど香菜ちゃんはお家の事情で男子校に通うことになりました』」

『……』

「『高校のルームメイトになったのは、健一くんっていう男の子です。女の子ってバレたら大変なので、香菜ちゃんは一生懸命に正体を隠します』」

「『でも鈍くてたまらない健一くんは、お友達の昴輝くんや先輩の彰さんと一緒に楽しく学校生活を送っています。香菜ちゃんの正体になんてちっとも気付きません』」

『昴輝くん……一夏……彰さんは……アスラン……』

「『それでも、香菜ちゃんのことをとっても大事にしてくれる健一くん。香菜ちゃんは健一くんを騙していることが辛くなってきます』」

『……』

「『健一くんはそんな香菜ちゃんの様子に、今はいない親友の俊彦くんの面影を見ていました』」

「俊彦くんが……レイ……」

「『そして最後！　遂に香菜ちゃんは自分が女の子であることを、健一くんに告白します！』」

『香菜ちゃんが……シャルで……』

「『健一くんはこれからずっと、香菜ちゃんを守ることを約束してくれるのでした！』っていうのがあらすじ」

『け、け、けけけけけ……お、おおおお……』

「お兄ちゃん、どうしたの？　変な声出したりして……」

『ゴメン、マユ、ちょっとだけ待っててくれ！――み、みんな。も、もしかしてだぞ？　俺って、いや、そんなわけないけど、俺って、そ、その、け、けけけ、健一くん並みに――』

――コックン――

――ピシピシピシピシッ！――

「お兄ちゃん？　ひびが入ったみたいな音がしたけど、大丈夫？」

『ダ、ダイジョウブダヨ？』

「なんでカタコトなの？」

『ソンナコトナイゾ？　ナアマユ、ドウシテコノホンヲエランダンダ？』

「？　マユがこの本好きだから。だって――」

「――健一くん、お兄ちゃんにそっくりなんだもん」

――ピシピシピシピシッ、パッキーンッ！――

「とっても優しくて、かっこよくて、でも呆れるぐらい鈍くて――あれ？　お兄ちゃん？　お兄ちゃんってば」

『――大変だ、シンが倒れたぞっ！　みんな、どうして放っておくんだよっ！？　自業自得っ！？　何のことだよっ！？　待ってろシン、今俺が保健室に運んでやるからな――』

「へ？　へ？　へ？」

『えっと、マユちゃん？　始めまして、僕はシンのクラスメートのシャルル・デュノア』

「あ、葛城マユです！　お兄ちゃんがいつもお世話になってます！」

『こちらこそ、シンにはいつもお世話になっています。それでシンは今運ばれていったから、今日はもう電話できないんだ。何か用件があったら、伝えておくね』

「運ばれたっ！？　お兄ちゃん、大丈夫なんですか！？」

『大丈夫。自分が鈍いことに気付いてショックを受けただけだから』

「あ、そうなんですか。なら心配しなくていいですね」

『そうだね。少しは反省するといいと思うよ』

「それじゃあ、後はお願いします」

『連絡は何かない？』

「大丈夫です。どうもありがとうございました！　えっと、シャルルさん、これからもお兄ちゃんをよろしくお願いします！」

『うん、こちらこそ。それじゃあマユちゃん、僕は失礼するね』

「はーい」

ピッ。

「――お兄ちゃん、やっぱり激鈍だなあ……」

「シャルルさんって多分……でもお兄ちゃんのことだから……あれだけ言っても、まだ気付かないんだろなあ……」

「ふふっ、マユもお兄ちゃんのこと好きだからね？」

「だから、また明日ね？　お兄ちゃん――」

番外編その一『今日のマユちゃん』（後書き）

どうも、ここまで読んでいただきありがとうございました。
誤字・脱字は是非ご指摘ください。
また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくて全速前進してしまいます。
お気軽にご感想をください。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

第十一話『明日から一週間』（前書き）

※以下の事にご注意ください
・ご感想の返信、もう一日だけお待ちください。すみません。
・ネタが暴走中です。もはや自分でも分かりません。
・三巻導入部ですが、引く作りになっておりません。

第十一話『明日から一週間』

寂しい、侘しい、物足りない。

シャルル・デュノア改め、シャルロット・デュノアは自室のベットでぬいぐるみを弄っていた。夜も更け、電気も消え、ルームメイトは既に寝入っている。それでも、シャルは寝付けないでいた。足りないのだ。温かかった、あの手が。

足りない、淋しい、堪らない。

文字通り手持ち無沙汰なシャルは、ベットのぬいぐるみを弄り続ける。ぬいぐるみの手を握っても、それでは落ち着かない。ぬいぐるみは手を握らせてくれても、自分の手を握り返してはくれない。優しい言葉をかけてはくれない。心を焦がす赤い瞳が、自分の姿を映してもくれない。

「寂しいよぉ……シン……」

想い人の名前を思わず口にするシャル。先日まで同室だったシン・アスカは、もうシャルの傍にはいなかった。自分の性別を公表したその日から、ルームメイトはラウラ・ボーデヴィッヒに変更されたのだ。

ラウラと一緒の部屋なのが嫌なわけでない。彼女も随分と丸くなり、年頃の女の子らしい面を覗かせるようになった。しかし、彼女はシンの代わりにはならない。同じ部屋で暮らすことが、いかに二人の時間を作り上げていたことか。後悔は先に立たなかった。

自分のことを、一人の女の子として見てほしい。もっと自分を見

ていてほしい。

その思いがシャルを決断させた。自分が女の子であることを意識して、シンが変わってくれたらいいと。だから自分の正体を公表した。たとえ部屋が分かれても、それならば納得がいった。

“ボクはホントはオンナのコっ！”の件もあり、シン本人も自分が鈍いということを自覚した。これは正に追い風であり、二人の関係を進める絶好の機会であった。

そして思ったとおりに、シンはシャルのことを女の子として見るようになった。

ただし、それだけだった。

自分のことを、大切な人だと言ってくれた。

そこまでだった。

『シャル、今までずっとゴメンな……俺、シャルのことに気付いてやれなくて……』

『シン……ううん、いいんだ。シンがいてくれれば、僕はもう……』

『シャル……俺は約束は守るよ。シャルのことを守る』

『シン……』

『だってシャルは、俺にとって大切な人だからな』

『……ねえ、シン。その先の言葉、今ここで欲しいな……』

『……へ？』

『……へ？』

盛大な誤算であった。シンはシャルの好意に全く気付いていなかったのだ。

映画を鑑賞し反省したと思いきや、シンの思考はシャルの想像を遥かに上回る超宇宙的な存在だった。

シンはずっと、『香菜ちゃんの正体に気が付かない健一くん』を非難していた。
非難していたのは『香菜ちゃんの好意に気が付かない健一くん』ではなかったのだ。
そして、自分が健一くん並みに鈍いことを自覚し、深く反省した。
『何故自分はシャルの正体に気付いてやれなかったのか』、と。
『何故シャルの好意に気付かなかったのか』という反省は、全くない。

つまり、シャルが好意を抱いていることは、シンは自覚していないのだ。
激鈍、ここに極まれり。

結果、シンとの関係はまるで進まず、二人の空間も失った。
周囲の女子も、自分達が付き合っているわけでないと知ってしまった。
ライバルが一気に増えた。ラウラもシンにべったりだ。
悪夢だった。
自分を夢の世界に導いてくれた手は、儚く消えていった。

「バカぁ……シンのバカバカバカバカぁ……」

涙をにじませて、ぬいぐるみの首をもぎ取る。シンから貰った『もげろっ！　健一くん特大ぬいぐるみ』だ。首をもいで、くっつけ、もいで、くっつけを繰り返す。
ぬいぐるみは何も答えてくれない。電池を入れて言う言葉は『どうして誰も、教えてくれなかったんだーっ！』だけだ。

自分の胸はこんなにも苦しいというのに。

シンは安穏と寝ているんだろう。
もげてしまえ、と思う。

心の雨雲を吹き飛ばしたシンは、また厄介な雨雲を連れてきた。
雨は降り続け、自分を濡らしている。
早く自分の想いに気付いてくれれば、雨は止むのに。
いっそ、自分の想いを伝えれば楽になるのだろうか？

でも、それはずるい。不公平だ。

シンにも同じように、やきもきして欲しい。自分を想って、雨に濡れてほしい。
ずぶ濡れになったところで、今度は自分が傘を差してあげよう。
そして笑顔で言おう。シンがくれた笑顔で。

『僕もシンのことが好き』と。

その時に二人の雨雲が晴れるから。
傘を放り捨て、歩き出せるから。
だから今はガマンしよう。二人で手を繋ぎ、水たまりを飛び越える日まで。

「でも、早くしてほしいなあ……風邪ひいちゃうよ……」

シャルはにじんだ目をこすり、もいだ首をきつく抱きしめた。

シンはいったいどんな夢を見ているのだろうか？
少しでも自分に関係のある夢であるのだろうか？
自分はどんな夢を見るのだろうか？
シンは夢に出てくれるのだろうか？

まどろみに落ちながら、いつまでもシャルの中からシンが離れることはなかった。

◇

うん、これは夢だ。夢に決まってる。
ミネルバのみんながいるんだから、夢に決まってる。
夢だ。夢なんだ。だから早く覚めてくれ。
じゃなきゃ、俺はこの後どうなるか分かったもんじゃない。

「ではこれより、被告人シン・アスカの裁判を始めたいと思う。タリア、よろしいかな？」
「はい、議長」
「タリア、今の私は裁判長だ。だが、ギルと呼んでくれて構わんよ」
「ギル……楽しそうね？」

法壇の席に着いているデュランダル議長、それからグラディス艦長が微笑を浮かべている。何で議長までここにいるんだ？　いやいや、そうじゃなくて……

「議長、質問してよろしいでしょうか？」
「何かね？　それと今の私は裁判長だ」
「……裁判長、どうして自分はここに立たされているのでありますか？」
「シン、それは君の裁判だからだよ」

優しく語りかけるような議長の話し方。でも今回ばかりは議長の

言っていることの意味が分からない。全くだ。理解の余地もない。
俺がいるのは法廷らしき場所だ。まず目の前に座っているのは、議長に艦長の二人。それから、左手の方向で涼しい顔をしているのがレイ。右手にいるのは、毅然とした態度で前を見据えているアスランだ。そして後ろにいるのは……

「シン、もげろ。な？」
「大丈夫だぞ～。もげたら俺たちが直してやるから」
「信じらんない。ねえ、お姉ちゃん」
「シン、アンタいつからそんな奴に……」
「「「「シン！　いい加減にしやがれ！」」」」

ヴィーノ、ヨウラン、メイリンにルナ。その他ミネルバクルーのみんなだ。口々に俺の悪口を言って……みんな、酷くないか？　じゃなくてっ！

「なんで俺が裁判にかけられてるんだよっ！？」

法廷いっぱいに響く大声で、俺は吠え立てた。いくら夢の中だからって、こんな横暴がまかり通ってたまるか！

「シン、法廷内では静粛にしろ。お前の罪状は検察である俺が説明する」
「れ、レイ！？　罪状ってなんだよ！？　どうしてお前がっ！？」
「気にするな。俺は気にしてない」
「こんの裏切り者がぁーーっ！」

書類を整えながら、さらりと言ってのけるレイ。おい、お前が味方をしてくれなきゃ誰が助けてくれるんだよ……なあ……

「安心しろ、シン。お前の無罪は俺が勝ち取ってみせる」
「アスランが弁護人！？　頼む、いや、頼みますアスランっ！」
「了解だ。アスラン・ザラ、出る！」

胸に光る弁護士バッジならぬＦＡＩＴＨバッジが眩しい。ちょっと口下手でうじうじする癖はあるけど、いざという時には決めてくれる人。アスラン、やっぱりアンタは頼りになるや。くそっ……目の前がにじんできた……でも後ろのみんなからのブーイングが怖いよ。

「ではさっそく裁判に入ろうか。レイ、起訴状の読み上げを頼む」
「はい、裁判長」

しっかり議長のことを裁判長と呼ぶレイ。こっちを一瞥すると、一回ため息を吐いてから長々と俺の罪状ってやつを説明し出した。

「被告人であるシン・アスカは同室であったシャルル・デュノア女子に対して過剰なスキンシップ・大変誤解を招きやすい甘言により、彼女の純情を弄んだとされている。これはれっきとした詐欺であり、検察はこれを立証するものである。本法廷は夢の中であり証人は呼ぶことができないが、証拠となる映像は用意したのでご覧になっていただこう」

言い終わるとレイはどこからかリモコンを取り出し、上から大きなモニターを下ろした。そこに映し出された映像は……俺のプライバシーなんて完全に無視したようなものだった。

『俺がシャルルを守るから。どんなことがあっても、絶対に』
『……うん』

『ねえ、シン。訓練の手伝いの話、僕でホントに良いの？』
『シャルルだから頼めるんだ。お世話になる』
『はあ……そうですか……』
『えへへっ』
『気絶しても、すぐに目を覚ましてあげるから……僕の王子様……』
何だこれ？　俺を晒しものにするのが目的なのか？　背中に感じる殺気は怖いし……悪夢だ。早く覚めてくれ。ていうか、俺がいつシャルを弄んだっていうんだ？　そんなことするわけないじゃないかっ！
「さて、被告人の意見を聞こう。シン、言いたいことはあるか？」
「あるに決まってるだろっ！　俺はシャルのことを傷つけたりしないっ！　絶対にだ！」
興奮して席をたたく俺を、レイは半眼で呆れたように見ていた。レイ、お前ってそんな表情したっけ？　随分と表情が豊かになった気が……
「男装中の彼女に気付かなかったことは？」
「それは……で、でも！　それはもうシャルも許してくれたことだ！」
「自分の事を棚に上げて健一くんを批判していたが……お前が健一くん並みに鈍いと気付いた後は？　お前は彼女に何を言った？」
「謝ったさ！　それから、シャルを守るって、そう言っただけだっ！　何がいけないんだよっ！？」
「……それだけなのが、いけないんだ」

レイと一緒に、法廷中のみんな（アスランを除く）が一斉にため息をついた。手にしていた書類を投げやりに放り、議長に向き直るレイ。

「――裁判長。このように、被告は自分の鈍感さが彼女を騙し、どれだけの精神的苦痛を与えているかにまるで気付いていません。即刻、有罪の判決を」

「ううむ。これは仕方がないかもしれないな……」

「何だよそれぇぇっ！？」

半分以上が嘆きになった言葉で必至に訴えても、みんなの白い目は変わらなかった。どうしよう……このままじゃ有罪に……

「裁判長、弁護人の陳述を許可させていただきたい」

「はっ！？　あ、アスラン！」

「ああ、許可しよう」

そうだ、この人が残っていた。赤服を颯爽と纏い、雄雄しく立つ姿は英雄のそれ。弁護人アスランだ。きっと俺の無罪を証明してくれるはずだ！

「まず、被告人の発言にシャルル女子を苦しめる意図はない！　さらに被告は自信の発言に責任を持とうとしており、シャルル女子もこれを認めている！　賞賛こそされ、どこに非難されることがあるでしょうか！？」

おお、普段の口下手からは想像もできない流暢さ。これは期待できるぞっ！

「被告の発言は、信頼する人間に対して当然のものと思われます！

決して嘘偽りではなく、詐欺として罰せられるものではない！
シャルル女子の感じている精神的苦痛はきっと別のことに要因があり、シン――被告のすべきことは、その精神的苦痛を除去するために奮闘することであるでしょう！　いかがですか、裁判長！？」

静まり返る法廷。これだけ理路整然と言われれば、いくらレイでもぐうの音も出ないに違いない。流石だアスラン。でも、どうしてだろう。法廷中のみんなが、今度はアスランに白い目を向けてるよ。

「――裁判長。弁護人の発言からお分かりの通り、彼は被告と同じぐらい鈍く、シャルル女子の心情を一切理解できていません。よって、発言における信頼性が一切ありません。弁護としては不十分でしょう」
「ああ、そのようだ」
「「なっ！？」」

俺とアスランの声が被る。そう言われて納得できるわけないだろっ！？　今言ったことのどこにおかしなとこがあったんだよっ！？

「裁判長っ！　検察の発言を認めるなんて――」
「君にはもうご退場願おうか、アスラン」
「なあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーっ！」
「あ、アスランっ！？　アスランっ！」

俺の呼ぶ声もむなしく、議長が木槌を鳴らした途端に大きな穴が出現。アスランの姿は穴に吸い込まれ影も形も無くなった。弁護人を強制退席させるって、デタラメすぎやしないか！？　なんて出来レースだよっ、コイツはっ！？
とにかく俺は四面楚歌になってしまった。もう誰も俺の味方をしてくれる人間はいない。後は判決が下されるだけだろうな……夢の

中なのに、どうしてこんなことに……

「被告に与えるべき刑罰は……これから一週間、毎晩のお説教にでもしましょうか。裁判長、判決を願います」

「そ、そんな……」

またお説教かよ……しかも一週間毎晩だなんて。ただでさえ現実で織斑先生に怒られてばっかりなのに、夢と現実の両方でお説教だなんて絶対に嫌だ。嫌だよ……俺が何をしたって言うんだ……

「シン、最後に何か言いたいことはあるかね？」

「あります……言わせてください」

うなだれた顔をなんとか上げる。夢の中だろうが、これだけは……納得できないことばかりだけど、これだけは言っておかなきゃいけない。

「どんなことがあったって！　何を言われたって！　俺はシャルを守るって約束したんだっ！　俺は今度こそ約束を守るんだっ！」

言い終わるとまた法廷は水を打ったように静かになって、それからため息を吐く声がいっぱい聞こえた。ど、どうしてみんな呆れてるんだよ？

「これが若さ、というものなのかな……？」

「シン、あなた……」

「そういうこと言うから勘違いさせるんだよ……」

「もう怒る気力もねーよ……」

「カッコいいこと言ってるのに……女の子の敵ね」

「肝心なところが足りてないのよ、シンってば」

やれやれとばかりに法廷中のみんなが頭を振った。俺、別におかしなこと言ってないよな？　このみんなの反応は何だ？

「よく言ったな、シン」

「え？　あ、アスラン？」

驚いて振り向けば、アスランが俺の後ろで微笑みながら立っていた。アスラン、よく無事で――いや、全然無事じゃないや。あちこち傷だらけだった。

「それだけの覚悟があるんだろう？　なら、これはお前が付けるべきじゃないのか？」

そう言ってアスランが外したのは……信念の、忠誠の、信頼の証。俺がもうなくしたと思ったもの。ＦＡＩＴＨバッジだった。

「それは……でも、アスラン。俺はもう……」

「シン、これは俺のバッジだ。シャルルと言ったな。彼女に渡せば、きっと喜ぶだろう」

「レイ！？　お前まで……」

検察席から歩いてきたレイが、自分のバッジを外した。受け取るのをためらっていた俺に、二人はバッジを握らせて肩に手を置く。二人とも優しく笑っていた。

「シン、自分の信念に忠誠を誓うんだ。今のお前にならその資格は――これを付ける資格はあるはずだ」

「俺たちはお前を信じるから渡す。だからお前も、自分が信じる人に渡せ。このバッジはそのためのものだ」

「アスラン……レイ……ああっ！　二人とも、ありがとう！」

二人のバッジを受け取る。一つを自分の襟に付けて、もう一つを堅く握りしめて。

みんなの眼差しが、今度は温かいものに変わっていた。そうか、みんな俺にこれを伝えるために……わざわざこんな芝居をして……

自分の信念に忠誠を誓う……俺、やってみせるよ。

席に戻る二人の背中はなんだか遠くに見えて、やっぱり格好良かった。アスランの背中は――ボロボロなのがちょっとだけ情けないけど……

「みんな、ありが――」

「では、裁判の続きを始めるぞ。被告人、席に着け」

「――へ？」

ぽかんと、口を大きく開けてしまった。え？　裁判、まだ続くの？　レイ、どういうこと？

「それとアスラン。この後あなたを被告として、オーブ代表から婚約詐欺の裁判を頼まれて――」

「シン……お前にならできる。俺は信じているからな……」

アスランはそう言い残すと、超人的な跳躍力で席を飛び越えて、またたく間に走り去ってしまった。　あれ？　アスラン、どこ行くんですか？　俺の弁護してくれるんじゃないの？

「裁判長、アスランが逃亡しました」

「なに、放っておけばいい。外はアーサーとハイネに警備を頼んでいる」
「了解です」
「あ、あんの裏切り者がぁーーーっ！」

俺の雄たけび空しく、弁護人は今度は自主退席しやがった。アスランめ……くそっ、俺はもうアンタを信じたりしないぞっ！　二度とするもんかっ！

「裁判長、判決をどうぞ」
「シン、君は有罪だよ」
「理不尽だあああああぁぁぁぁぁっーーー！！！」

判決が言い渡されて、またも俺の絶叫が法廷に空しく響いた。

◇

「お兄様、不機嫌なようだが……私の起こし方が悪かったか？」
「いや、今日だけは起こしてくれてありがとう」
「シン、夢見でも悪かったのか？」
「ああ、最悪だった」

食堂の席に座りながら、俺は未だに仏頂面をしていた。今日見た夢のあまりにも理不尽な内容、そして明日から一週間の悪夢を考えると、機嫌の良いはずがなかった。当たり前だけど、夢で貰ったFAITHバッジは無かったし……どっかの店にでも売ってるから、

明日にでも買って来いって言うのか？　まさかな。
　トーストに乱暴にかじりつき、コーヒーをがぶがぶと飲み干し、コーンスープをすする。流石に雰囲気が伝わるのか、一夏とラウラ以外に近寄ってくる生徒はほとんどいない。篠ノ乃、セシリア、凰（ファン）の三人ですら、同じテーブルにいても黙って食事を口に運んでいた。

「お兄様、今日は和食ではないのか？」
「いいだろ、別に。どうしてだよ？」
「それでは『お兄様、ほっぺにご飯粒付いてるよ？　もう、仕方ないな～』ができない」
「ぶはっ！　ごほっ、ごほっ！」

　ラウラが変なことを言ったせいで、気管にコーヒーが入ってしまった。むせ返る俺を、食堂のみんなが奇異の目で見ている。くそっ、目が覚めたら今度はこっちかよ。

「お兄様、大丈夫か？　待っていろ、私がきれいにしてやる」
「止めろっ！　俺の頬を掴むなっ！　顔を近づけるなっ！」

　ラウラが俺のことを『お兄様』と呼ぶようになってから、ずっとこの調子だ。ただ俺の呼び方が変わっただけならともかく……明らかにラウラの取る行動がおかしい。

　寝ている俺を馬乗りになって起こす。
　俺の分まで弁当を作ってくる。俺の箸は付いてない。
　昼食の時になって、二人で一つの箸で俺に弁当を食べさせようとする。
　廊下では無理やり腕を組もうとする。
　大人しいと思えば、一緒に風呂に入れとせがむ。
　挙句に夜にはベットに侵入しようとしてくる。

いったいどうなってる？　シャルが止めてくれていなければ、俺の身がもたない。今日こそ一言、きっちり言ってやるっ！
二、三度の咳払いをしてからラウラの方を向き、少し強めの口調で言い始めた。

「ラウラ、どういうつもりだ？」
「どういうつもりとは？」
「最近のおかしな行動のことだよっ！　どういうつもりだっ！？」
ラウラは不思議そうに首を傾げながら、さらりと言ってのけた。
「妹とはこういうものではないのか？　送られてきた本にはそう書いてあったぞ？」
「本？　その本って何のことだよ？」
「これのことだ」

そう言ってラウラがどこからか差し出した本は、全部で三冊。それぞれ表紙の文字に目を通していくと……

「『萌える妹入門』……何だこれ……』
「入門ということで、とても分かりやすく書いてあったな」
「『妹の社会哲学』……哲学って……」
「少し難解だったが、それも非常に参考になった」
「『妹百八式～兄を煩悩で満たす方法～』……おい……」
「過激な内容だったが……それさえマスターすれば、お兄様を劣情の波で押し流せるらしい」

ブチッ！　頭の奥で、何かが切れる音がした。

「どこのどいつだ、こんなもん渡した奴はっ！？」
「私がいたドイツの部隊からの贈り物だ」
「俺を劣情の波で押し流して、何をさせる気だあぁぁっ！」
「こういう時には何と言うのだったかな……そうそう、ここだ。『お兄様……お兄様になら私……何をされても……』」
「誰がするかあぁぁっ！！　そんな本を読むなあぁぁぁっ！！」

俺の怒りなんてどこ吹く風。ラウラは涼しい顔で本をめくり、おそらく記述されていただろう文句を朗読していた。息を切らす俺。みんなの好奇の目。今日の俺は夢から覚めても叫んでばっかりな気がする。

「はあはあ……どうしてこんな……」
「シンさん、あなた気付いていらっしゃらなくて？」
「はい？」

視線を移せば、セシリアは今日も優雅な金の長髪をなびかせていた。聞き返す俺のことを、もうすっかり見慣れてしまった白い目で見ている。篠ノ乃も、凰も。

「アスカ、お前がボーデヴィッヒといる時だがな……頬が緩みっぱなしだぞ？」
「何だかんだ言って、しっかり面倒見てるし……根っからのシスコンなのね……」
「……うそぉ？　一夏、ホントかっ！？」
「ああ、マジだ。どいつとドイツ……二人ともやるな……」

一夏にも聞いたんだから、本当のことなんだろう。俺は開いた口が塞がらなかった。確かに、お兄様って呼ばれるとこう、何て言うか嬉しい感じもするし、そう呼ばれると不思議と面倒見なくちゃっ

て気になるけど……

「しかし妹とは楽しいものだな。お兄様、明日はどう起こせばいい？　制服エプロンにフライパンはポイントが高いそうだが」

「もう好きにしてくれ……あれ、ところでシャルは？」

「まだ寝ているのではないか？」

いつもなら真っ先にラウラを諌めてくれるシャルがいない。辺りを見回してもいないし、そもそもシャルは必ず俺の隣に来るから、食堂にはいないみたいだ。寝坊？　珍しいこともあるんだな。そろそろ時間が無くなるけど、平気なのかな？　うーん……

「気になるし、ちょっと俺見てくるよ」

「おう、遅れるなよ？　千冬姉にどやされる」

「分かってるって」

何杯目かのコーヒーを飲み干してから、俺は食堂を後にした。同室だった一月のこともあって、シャルがいないと落ち着かない気もする。

◇

さて、シャルの部屋の前まで来てドアを叩いても返事が無かった。仕方ないから部屋に入ってみたんだけど……

「まだ寝てたのか……はあ……」

「ん……すぅ……」

シャルはまだ気持ち良さそうに寝息を立てていた。枕元には首の無いぬいぐるみが置いてあって、布団の中のシャルは何かを抱きしめた格好で寝ている。俺があげた『もげろっ！　健一くん特大ぬいぐるみ』の首を抱えているんだろう。止めてくれよ……なんだが罪悪感とかで胸が潰れそうになるから……

とにかく、これ以上首の無いぬいぐるみを見ていると気持ちが滅入るから、さっさとシャルを起こして首をくっ付けてもらおう。

「ほら、シャル。朝だぞ？　起きないと遅刻するぞ？」

「んん……？　あれ……シン……有罪になったんじゃ……」

寝ぼけてるのか？　シャルの口からありえない単語が聞こえてきた気がする。気のせいだよな？　アハハ……

「シャル、どんな夢見てたんだよ……」

「う～ん……シンのこと、訴える夢……」

ありえないけど、夢の中で俺を訴えたのはシャル本人だったらしい。これじゃあもう怒るに怒れない。はあ……何だったんだよ、あの夢は……

「いいから起きろ。遅刻しちゃうだろ？」

「ん～……」

薄目でこっちを見てから、ぬいぐるみの首に回していた手を片方、俺に向ける。シャルがこの動作をするってことは、いつもの――

「手、繋いでくれたら起きるよ……」

「やっぱり……ほら、起きろシャル～」

部屋が変わってからも、シャルが手を繋ぎたがるのは変わらなかった。シャルってなんだか、甘えたがりな妹みたいな気が……いけない、これ以上妹が増えても困る。

「おはようシン……僕のこと、起こしに来てくれたんだ」

少しずつ目が覚めてきたらしいシャルが、軽く伸びをして上体を起こした。俺が部屋で目にしていたスポーツジャージ姿とは打って変わって、女の子らしいパジャマ姿だ。猫のプリントがいっぱいで可愛らしい。

「おはようシャル。目、覚めたか？　早くしないとホントに遅刻するぞ？」

「うん……シンが毎日起こしに来てくれたら、遅刻しないよ」

手を繋いだままシャルがニコッと笑う。朝からそんな冗談を……

「前は一人で起きられただろ？　どうしたんだよ？」

「シンのせいだよ……？　もう……」

笑いながらもシャルの顔に赤みが差していった。あれ？　そんなに部屋暑い？　そう言えば、もう七月になるもんな。全体的に空調が利いてるから快適だけど。

「シャ～ル～。急がないと――」

「約束してくれないと、離さないもんねっ」

「うわっ！」

繋いだ手がグイと引っ張られて、俺はシャルのベットに沈み込んでいった。さらに俺のに布団を被せて、その上にシャルがのしかか

る。

「こらっ、シャル！　離れろっ！」
「ダメだよ、えへへっ」
「このーっ！」
「きゃっ、アハハハハっ！」

バタバタとベットの上で暴れまわる。枕を掴み、布団をかけて、二人で笑って。
こうやってじゃれあうのも……家族がいなくなってからいつ以来か分からない。ただ、オーブにいた時は、マユとこうやって遊ぶのが、とても幸せだったと思う。

そして今、大事な人と一緒にいて、俺は幸せだ。

「シン、もう降参？」
「分かった分かった。約束するから早く離れてくれって」
「へへ〜、約束だよっ？　明日から必ずねっ？」
「うん、約束する」

暴れまわったせいか、俺から離れたシャルの顔は真っ赤だった。朝からこんな運動するからだぞ？　全く、仕方がな――っておいっ！　そうじゃなくて時間はっ！？

時計に映った時間を見た途端に、俺とシャルの顔が青くなった。このままだと確実に出席簿に挨拶コースだ。

「シャル！　ち、遅刻する！」
「あ！　ご、ゴメン！　すぐ着替えるからね！」
「食堂に行ってるヒマもないぞっ！？　買い置きの食事、部屋から

もって来るから！」
「う、うん！　おく、遅れるよ～っ！」
「うあぁ～っ！」

シャルは傍の首を放り投げて、洗面所に駆け込んでいく。
俺は大慌てでシャルの部屋を出て、自分の部屋に向けて廊下を走り出した。

結局この後、俺とシャルは仲良く遅刻するはめになった。
授業には間に合わなくて、織斑先生には怒られ、クラスのみんなからの視線は辛くてたまらなかった。
教室に二人で入ったとき、何故だかシャルはニコニコ笑っていたけど……その内に笑顔のコツでも教えてもらおうかな。それに、起こしに行ったのに結局遅刻させちゃったから、明日何かお詫びでもしよう。いつもお世話になってるんだし。

第十一話『明日から一週間』（後書き）

どうも、ここまで読んでいただきありがとうございました。
誤字・脱字は是非ご指摘ください。
また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくて俺とお前の魂を超融合してしまいます。
お気軽にご感想をください。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

第十二話『明日？　一夏と二人で買い物に行くけど？』（前書き）

※以下の事にご注意ください。
・絶賛暴走中です。好き勝手してます。
・違和感の生じる箇所、是非ご指摘ください。
・誤字脱字、ツッコミは遠慮なくおっしゃってください。

第十二話『明日？　一夏と二人で買い物に行くけど？』

強い日差し。これから始まるだろう暑く、しかし爽やかな季節を感じさせるそれが街を照らす。通りの人たちが見上げるビルの窓も、足元のアスファルトも、日の光をいっぱいに受け止めていた。熱気と、青い空に、白い雲。俺たちの夏が来る。

「シン……」
「一夏……」

駅前に出たところで、俺と一夏は足を止めた。男が二人、誰も気に留める様子はない。

「篠ノ乃にやられた頭はもう平気なのか？」
「こぶはできたが、なんとかな。そっちこそ、シャルルにやられたらしい頬は？」
「こっちもなんとか。セシリアに蹴飛ばされた脚は？　ていうか理由は？」
「一応は動く。シンと二人で買い物に行くって言っただけなんだが……シンこそ理由は何だ？　ラウラにやられた頭はともかくとして……」
「俺も、一夏と二人で買い物に行くって言っただけだ。ラウラは……フライパンでゴンはもう止めさせよう。そうだ、凰（ファン）に殴られた腹は？」
「飯が食えるようになったから、大丈夫だろうな」

負傷状況と原因の確認。結局原因は良く分からないけど……この際些細なことは置いておこう。俺たちは今ようやく、珍獣の檻から脱出できたんだから。

「平和だな……久しぶりだ」
「ああ……嘘みたいだ」

たまの休日。俺と一夏は七月頭にある臨海学校の準備として、水着その他必要なものを取り揃えるために街に繰り出していた。二人で、だ。篠ノ乃も、セシリアも、凰も、ラウラも……シャルだっていない。正真正銘、男二人きりだ。

「今日は外が眩しいな……涙が出てきたぜ……」
「太陽の光が目にしみるな……へへっ……」

二人で目から溢れる魂の汗をぬぐう。今日一日は何も気兼ねする必要がない。篠ノ乃が木刀を振り回すことはない。セシリアが銃を乱射することもない。凰が衝撃砲で壁に穴を開けることもない。ラウラの言動に振り回されることもない。理由も知らないままシャルが怒り出すのに悩む必要もない。みんなから指をさされることもない。珍獣を見るような視線を浴びる必要もない。俺たちはそう、自由なんだ。檻から抜け出して自由の世界へと飛びたてるんだ。

「シンっ！」
「一夏っ！」

二人の間に、これ以上余計な言葉は必要なかった。お互いに肩を組み、天にこぶしを突き上げて笑い合う。

「「今日は思いっきり羽を伸ばすぞっ！」」

ショッピングモールに向けて、俺たちは機嫌よく歩き出すのだった。

◇

『『今日は思いっきり羽を伸ばすぞっ！』』

「お二人とも……肩を組んだまま歩き出しましたわね」
「男二人で……どういう神経してんのよ、アイツら……！」
「羽を伸ばすか……羽なんて今すぐもぎ取ってくれようか、一夏め……」
「誰のせいだと思ってるのさ……シンのバカぁ……」
「お兄様、フライパンは気に入らなかったようだな……今度はおたまにするか？」

街角にて肩を寄せ合う十代の乙女が五人。レシーバーから聞こえる音声に憤慨しつつ、こそこそと二人の男子の後を追っていた。彼女達を包む一種異様な空気のおかげで、周囲の人間は目を合わせようとはしない。彼女達も周りの人間など気にも留めない。彼女達の関心事は一夏とシンのことだけだった。

全員が握りしめているのは、前日刊行の『デイリーＩＳ学園（夕刊）』。トップ見出しには「シン・アスカ、やはり本命は織斑一夏か！？」の文字が躍っている。

更に記事には『本日夕方、一年一組のシン・アスカくんが、翌日同クラスの織斑一夏くんと二人きりで買い物に出かけるということが判明した。アスカくんは同室であったシャルル・デュノアさんとの交際疑惑が浮上していたが、デュノアさんが本当は女性であることを公表した後に交際を否定。アスカくんが男色家であるのではという疑惑は一層強くなっており、今回の買い物は二人の“デート”ではないかと噂されている――』という文章が続いていた。

要するに、彼女達はシンと一夏の“デート”を追跡に来ていたのだ。勿論、彼女達も本気で二人が付き合っているとは考えていない。しかし、自分達を差し置いて男同士で買い物に出かけるというのは、恋する乙女のプライドを著しく傷つけるものであったのだ。若干一名、考えていることが他と少しずれているが。

「盗聴器の調子は万全ですわよ！」
「コア・ネットワークは……アイツらステルスかけてるわね」
「前に予習で実践していたからな。そのままにしていたのだろう」
「とにかく二人を追おう。ラウラ、尾行の先導は任せたよ？」
「ああ、気取られるようなヘマはしない」
「「「「「ファイト、オーッ！」」」」」

全員で円陣を組み、それぞれの手を重ね合わせて気合を入れる。
うら若き乙女達の美しき友情で――

（絶対に出し抜いてみせますわ！　一夏さんとのデートは私がっ！）
（隙があったら振り切ってやる！　他の奴とデートなんてさせるかっての！）
（一夏とのデート！　一夏の隣は私のものだっ！　誰にも渡さんっ！）
（他のみんなは利用すれば良い！　最後にシンと笑うのは僕だっ！）
（兄の尾行は妹ポイントが高いらしいな。朝の失敗を取り返すとしよう）

――恋は戦い、愛は争い。勝者になるため、ライバルはどんな手段でも蹴落とす。友情は、表層の平和協定でしかなかった。やはり若干一名の考えていることが違うが。
そんなお互いの考えていることを知ってか知らずか、五人の女子達は仲良くショッピングモールへと歩いていくのだった。

◇

それにしても平和だ。男の二人部屋になっても、誰かしら（大概はラウラだ）が部屋にやって来るから、なかなか心の休まる時がなかったんだけど……平和だ。

「しかし、シャルルもいないのは珍しいよな。いつもシンと一緒だから、今日も来るかと思ってたんだが」

「男の買い物に連れまわすのも悪いからさ。俺たちの水着なんて見せても仕様がないし」

シャルがいないと妙な感じがするのも確かだけど、今日はそれより、外に出た開放感が心地良い。やっぱり周りが女子ばっかりなのは息苦しくもなる。アカデミーも船も、基本的に男が多かったから尚更だ。

「シャルルが女の子ってのは驚いたよな……バラして大丈夫だったのか？　家のこととか、結構深刻なんだろ？」

「ああ、そのことなんだけどさ。葛城さんに相談したら――」

そもそもシャルが男装なんてしていたのは、実家のデュノア社からスパイ活動をさせられていたせいだった。とりあえずＩＳ学園にいれば手出しは出来ないんだけど、それじゃ問題の解決にはならない。それで、相談して出た回答が……

「――『イグナイテッド』のデータ、渡しちまえって」

「はあっ！？　シン、それって良いのかよ！？　ＩＳの情報は下手

すりゃ国家機密レベルだろっ！？」
「そうなんだけど……葛城さんが言うには……」
一夏の驚きはもっともで。俺だって最初聞いたときは目玉が飛び出そうだった。だけど、流石は葛城さんとイグナイテッド。欠陥品の扱いは伊達じゃなかった。

『データが欲しい？　だったらそんなもんくれちまえ。お前さんのＩＳのデータなんざ、ウチの研究所以外じゃ役立たずだからな。装甲も、装備も、他の機体への技術転用なんてまるでできねー。とりあえず情報は小出しに渡しとけ。全部のデータが集まったら、電圧調整で装甲の色が変わるところまでは完成するからな。色が変わる意味？　ない。色が変わるだけだ。何の役に立ちもしねーよ。
機密事項だって？　ああ、国のお偉いさんもとっくにさじを投げてるから安心しろ。万が一にでも技術の解析ができたら、横流しをチラつかせて技術協力の強制だな。その時は向こうもウチも助かって一石二鳥だ。
デュノア社が潰れたら？　知るかっ！　娘を大事にしない親父の会社なんざ潰れちまえっ！　そしたらお前さんがそのお嬢ちゃん連れて、二人で俺の研究所に戻って来いっ！　二人ともウチで面倒見てやるっ！』

「――だってさ。メチャクチャな話だけど……」
「……葛城さん、良い人なんだな」

そう言った一夏の横顔には、少し寂しげな表情が浮かんでいた。
一夏には両親がいないらしい。ずっと姉の織斑先生と二人きりだって聞いていた。
シャルもそうだけど、どうして親が子どもを守ってくれないのか、俺には分からない。俺の両親は、俺とマユを守ってくれていた。だ

から俺もマユも、父さんと母さんが大好きだった。それが当たり前のはずなのに。

「一夏、ほら」

「ん？」

肩を組む手に力を込めて、暗い表情をした一夏の体を少し引き寄せる。

「俺がお前を守るから。だから、そんな顔するなって」

「……ああ、頼りにしてるぜ」

そう言うと一夏も腕に込めた力を強くして、空を仰いだ。結局、俺にはこんなことしか言えないんだけど。でも、約束は守るつもりだ。大事な仲間、友達なんだから。

◇

『俺がお前を守る。だから、そんな顔するなって』

『……ああ、頼りにしてるぜ』

「「「「「……」」」」」

盗聴器が拾った二人のセリフを聴く五人。それぞれが握ったこぶしには青筋が浮かび、骨がミシミシと音を立ててきしむ。周囲の空気が加速的に重みを増し、半径三メートル以内にはに虫一匹たりとも近づこうとしない。怖いからだ。彼女達の雰囲気が。

「わたくし、遂に目だけでなく耳までおかしくなったのかしら？」
「安心しなさいセシリア。私も一緒に病院に行くわ。アイツらを吹っ飛ばしてから」
「肩を組み……顔を寄せ……口説き文句……だと……？」
「シン、僕のことは？　ねえ、どうしてその流れから一夏に行くの？　ねえってば……」
「一夏め……私の舎弟の分際で、お兄様からあのような言葉を……」

嫉妬の炎が乙女五人の背景で静かに燃え上がった。嫉妬の対象が男同士であることに、彼女達はもはや疑問を持っていない。ただ『早くあの二人を引き剥がさなければ』という危機感だけが彼女達を突き動かしていた。今この時だけは、集いし五人の感情は一つだ。

五人の少女は通りを歩く人間を押しのけ（物理的にではない）、ショッピングモール内に入っていた二人の追跡を継続する。感情のおもむくままに。

◇

さて、少女達が二人を追ってきたショッピングモール『レゾナンス』の中は満員御礼。休日ということもあり、老若男女問わずのご盛況振りである。当然人の数が多いわけであり、そんな場所で鬼ごっこをしていると――

「ちっ、見失ったかっ！」
「くうっ、人が多すぎですわっ！」
「盗聴器もダメよっ！　どっかで引っ掛けていったみたい！」

――やはり見失った。尾行術を身に着けた人間がいたところで、

元気に行進するちびっこの行列の前には無力だったのだ。ちびっこたちが彼女達の前を横切り、その雰囲気に気圧され一斉に泣き出し、全員でなだめすかしたところで二人の姿は消えていた。

「まだ遠くには行ってないはずだよっ！」

「まずこのフロアを探すとするか」

きょろきょろと辺りを見回す挙動不審の五人。警備員さんに通報されないのも、彼女達の剣幕のなせる業か。きっと誰も関わり合いになりたくないのだろう。

（いたっ！　二人だっ！）

少したったところで、観光お土産品コーナーにて二人を発見。第一発見者はシャルロット・デュノアだ。もう一度周囲を見渡し、残りの四人がまだ二人に気付いていないことを確認すると、目を離さないように注意しつつも篠ノ乃箒に近づいていった。

「箒、手を組もう。残りの三人は引き離すよ」

「何っ！？　ど、どういうことだ！？」

「静かに。まだみんなは気付いてないから」

他の三人に気取られないように声を潜めたまま、シャルは自分の計画を箒に伝え始める。

「シンと一夏は見つけたよ。後はセシリア、鈴、ラウラをどこかに誘導して、その隙に僕たちで二人の前に出ればいい。邪魔さえなければ、お互い二人きりになんて簡単になれる」

「し、しかしだな……」

いくら競争相手を出し抜こうとは思っていても、そこは篠ノ乃箒。協力していた仲間を騙すというのは気が引けるものらしい。しかしためらう箒に、シャルはとどめの一言をぶつけた。

「一夏の隣、取られてもいいの？」

「――っ！？」

「箒なら一夏を連れて行きやすいはずだよ。どうするの？」

「……分かった。二人は私が見張るから、三人の誘導は頼む」

交渉が成立するや否や、シャルは箒に二人の場所を指差した後、素早く三人のもとへ駆けていく。

「みんな、二人を見つけたよっ！　これから屋上に上がるみたいだっ！」

「屋上っ！？　アイツら、何するつもりよっ！？」

「おのれ、お兄様を夕方の屋上に呼び出すのは私だっ！」

「すぐに追いますわよっ！」

流石は演技力に定評のあるシャルである。疑いもせずに怒涛の勢いでエスカレーターを駆け上がっていく三人を見送り、踵を返して箒のもとに戻ってきた。鮮やかなお手並みだ。

「二人はまだいる？」

「ああ。しかし、なぜ屋上だったんだ？」

「それならこういう理由」

そう言うとシャルは壁のポスターを指差した。ポスターの写真には龍の顔をした全身タイツのヒーローが決めポーズを取っている。

「『仮面リュータイツ、ヒーローショー』？　屋上で開始か……な

るほどな」
「三人には悪いけど、秘密結社『袖振り』にでも捕まっててもらおうか」
屋上まで上がらせてしまえば、戻るのにも時間がかかる。さらに下手にヒーローショーの場に現れてしまえば、人質役をやらされることもあるものだ。場の雰囲気、小さなお友達の夢をぶち壊す勇気がなければ、ヒーローショーに付き合う他はない。そうなれば時間稼ぎには十分だろう。シャルロット・デュノア、恐るべき頭脳プレーである。
「じゃあ行こうか。一夏の方はよろしくね」
「任せろ、もう手段は選ばん！　気絶させてでも一夏を引き剥がす！」
かなりの物騒な発言に周囲の買い物客は全員引いているのだが、やはり誰も声はかけようとしないし、警備員さんを呼ぼうともしない。警備員さんも目を逸らしているので、仕方のないことと言えば仕方のないことであるが。
二人は目指す観光お土産品コーナーに歩みを進める。紆余曲折はあったが、この先のデートを思うと二人の頬は染まり、胸は高鳴っていった。もう少し、もう少しだと。
「「二人とも――」」
『さあ、今日の目玉はコレ！　水族館限定販売の『ドキドキ！　マリンクッキー！！』です！　本日は特別にレゾナンスでも販売！』
「「なっ！？　ま、ママ、マリン……！？」」
いざ二人を呼ぼうとしたその声は、お土産コーナーから発せられた声に遮られた。マリンクッキーの名前を聞いた途端に、一夏とシ

ンの顔は青ざめていく。一夏もトラウマが残っているらしく、シンはシンでトラウマができていたようだ。

『パーティーゲームにぴったりですよ！　そこのお兄さん達、どうですかっ！？　とっても楽しいですよっ！？』

「「うわあああああっっっ！　もう嫌だあああああああっっっ！」」

『あら～、行っちゃいましたね～。このゲーム、やったことあるんでしょうね～。アハハハハハ～』

蒼白な顔面のまま、一夏とシンはそれぞれ明後日の方向に走り出してしまった。笑う接客のお姉さん、逃げた二人の様子におののく買い物客、そして呆然とするシャルを残して。

「どうしよう、箒！　二人とも逃げちゃったよ！――あれ、箒？」

返事をしてくれる人間はいなかった。トラウマを再発させた箒は顔を真っ赤にして逃げていったのだ。つまり、シャルは一人取り残されたということだ。

「そ、そんなぁ……」

計画も丸つぶれになり、がっくりと肩を落とすシャル。デートは夢のまた夢となりそうだった。

◇

「はあ……一夏、電話にも出ないな……」

携帯を閉じると、俺は大きくため息を吐いた。平和に買い物をしているはずだったのに、マリンクッキーって言葉を耳にしただけで俺たちは取り乱してしまった。挙句に一夏とはぐれて、連絡もつかない状態だ。

くそっ、何でアレが普通のショッピングモールに置いてあるんだよっ！？　今度は動物園に行くって言ったからか！？　マリンクッキーの呪いか！？

愚痴を言っていても始まらないのは分かってるんだけど、これだけ人が多いと探すのも一苦労なわけで…歩き回っているうちに、アクセサリーショップの前にまで来てしまった。確かにここに用事はあったけどさ……

「いいや、先に用事済ませちゃおっと」

一夏を探すのはいったん諦めて、俺は店のドアをくぐった。探し物、とりあえず見つかるといいんだけど……

端から順に回ろうとして角を曲がると、見慣れた姿がウインドウを覗き込んでいた。きれいな金色の髪をまとめいてて、でも一人だけで、肩を落として……見間違えるはずない。

「シャル？　こんなところで何してるんだ？」

「うわっ！　し、シン！？　どうしてここにっ！？」

振り向いたシャルはなんだか妙に慌てていた。俺がいることってそんなに驚くことか？

「買い物に行くって言ってただろ？　なんだ、シャルも来てたのか」

「え、えっと、そうなんだけど。そ、その、他のみんなとはぐれちゃって……」

「あ～、シャルもか。俺も一夏とはぐれちゃってさ……」

言い辛そうに顔を赤くして、目をそらす。どうやらシャルまで迷子になってるみたいだ。はあ……仕方ないや。

「とにかく、後でみんなを探そう。来てるのは篠ノ乃たちだよな？」

「う、うん。ねえ、シンはここに用事があるの？」

「ああ、探し物があるんだ。シャル、ちょっと付き合ってくれないか？」

「っ！？　う、うん！　もちろんっ！」

快くシャルが承諾してくれたから、店の中を二人で歩いて回る。ウインドウの中には金色やら銀色やらのアクセサリーがいっぱいだ。えっと、指輪……違う。腕輪……コレも違う。ネックレス……違うってば。

「シン、何を探してるの？」

「大事なものなんだ。買い戻すっていうのが変な話だけど……」

「？」

レイもアスランも、寝ている間に枕元に置いておくぐらいしてくれても良いのに……まあ夢の中の話だから、そんなわけにもいかないんだけど――っと。本当にあったよ……値段高いし。けど、仕方ないか。文句は夢の中で言うとしよう。

「すみません、これ二つください」

◇

お目当てのものを見つけたから、フロアの奥の休憩スペースで早速開封することにした。休憩スペースは意外に人が少なくて、ちっちゃな女の子が一人でブリックパックのジュースを飲んでいる。

「羽……かな。きれいな形だね、バッジなの？」

「うん、ＦＡＩＴＨバッジって言うんだ」

シャルと二人でベンチに座りながら、買ってきた二つの箱を開ける。

ＦＡＩＴＨバッジ――議長がくれた特務隊の証。そしてレイ、アスランがくれた信頼の証。

今度こそ、自分の信念に忠誠を誓って。信頼を貫くための証だ。

「信念・忠誠・信頼の意味があって……大事なものなんだけど……」

問題なのは……どっちがアスランのバッジだ？　二つの箱を前にして、一生懸命にらっめこをする俺。シャルにはアスランのバッジなんて、絶対に渡したくない。でも簡単に見分けがつくもんじゃないしなあ……

「ねえシン。こっちのバッジ傷が付いてるよ？　ほら」

「え？　ああ、ホントだ。それならコレがアスランのだな。間違いないや」

羽の真ん中に刻まれた、何かを刺し貫いたような傷跡。俺がつけたのか、それとも夢でアスランがつけたのか……どっちにしてもおかしな話で、苦笑するしかなった。

「？」

「いや、何でもない。じゃあこっちがシャルの分。はい、シャル」

「えっ？　ぼ、僕に？」
「俺、いつもお世話になってるからさ」
「で、でも、その、いいの？」

手渡した箱をじっと見つめるシャル。ちょっと受け取るのをためらうようで、顔も赤くしている。あれ？　ちょっと意味を誤解してるかも。さっき俺、ベラベラ変なこと言ったし……

「えっと、さっきは信念とか忠誠とか色々言ったけど、別にシャルは気にしなくていいから。俺がシャルのことを信じてるから渡すだけで……その、シャルに受け取って欲しいんだ。シャルがそれを着けてくれたら、俺も嬉しいなって」
「……うん。シン、ありがとう」

箱を抱きしめて、シャルの顔がほころんだ。

「僕、大切にするから……」

シャルは気に入ってくれたみたいだった。
レイ。お前の言う通り、シャルが喜んでくれたよ。そこはお礼言わないとな？

「さあて、それじゃあみんなを探しに行こうか――シャル、どうかした？」

ベンチから立ち上がろうとした俺の手をシャルが握って、また腰を下ろさせた。片手は箱を抱きしめたままで、上目遣いで俺を見つめている。またいつもとシャルの様子が違っていて――アレだ。一番この雰囲気に近かったのは、確か……

「シン、僕のこと信じてくれるんだよね？」
「ああ」
「信じてくれるから、コレをくれたんだよね？」
「あ、ああ」
「じゃあ……僕からも、受け取ってくれるよね？　信頼の……証……」
「え、あ、うん……」

言い終わるとシャルは箱を置いて、俺の頬に手を添えると――

「へ？　しゃ、シャル？」
「すぐ終るから、じっとしててね……」

そのままベンチに俺の体を倒し、覆いかぶさるように身を乗り出した。

脳内でコンディション・レッドが発令される。ヤバイ、あの時と――マリンクッキーの罰ゲームの時と同じだ。シャルがおかしい。顔は真っ赤なのに、妙にノリノリだ。

「シャル、待ってくれっ！　な、何をする気だよっ！？」
「シンに受け取ってもらうだけだよ？　僕の、信頼……」

そう言いながらシャルは唇に指を当てて微笑んだ。え？　信頼の証って罰ゲームの続き？　俺、前よりもっと心の準備ができてないよ？

「いや、そんなっ！　いきなりそんなこと言われてもっ！」
「シンこそ急だったじゃない、もう……僕の胸、こんな風にして」
頼むからそんな潤んだ目で見ないでくれ。俺の方こそ心臓が破裂しそうだから。
はっと視線を移動させれば、ジュースを飲んでいた女の子が顔を真っ赤にしてこっちを眺めていた。そうだ、あの子に助けを呼んでもらおう！
俺は縋り付くような視線を女の子に送ると、女の子は力いっぱいうなずいて走り出していった。思いは言葉を超えるらしい。よっし、後は時間さえ稼げればっ！
「シャル、ほら、こ、心の準備があるからさ！　少し待ってくれないかっ！？」
「すぐにあの子は帰ってくるから大丈夫だよ？　ほら……」
はっ！？　俺の考えてること筒抜け！？　いやでも、助けを呼んでくれって頼んだから平気なはずだ！　ほら、ドタドタと走ってくる足音が……ドタドタ？
足音のする方に目をやったら、女の子がお友達をいっぱい連れて来てた。ダメだ、全然通じてなかったよっ！　ギャラリーが増えただけじゃないかっ！　興奮する女の子達の声をＢＧＭに、シャルの顔が寄せられて――ああ、もうダメだ――
『迷子センターよりお知らせします。ＩＳ学園よりお越しの、シン・アスカ様。ＩＳ学園よりお越しの、シン・アスカ様』
ピンポンパンポン、と軽快なメロディと共にアナウンスが鳴り響

き、シャルの顔が止められた。迷子センターから、俺に？　いったい誰が――

『妹様がこちらに――あっ、ダメですよ！　マイクを取ったらっ！――』

天井のスピーカーからは何か争うような物音が聞こえてくる。ていうか、妹？　マユじゃないよな？　なら、それってやっぱり――

『お兄様、どこにいる！？　私はここだっ！　早くお兄様が来てくれなければ、私は寂しくて泣いてしまうぞっ！　お兄様の傍にいなければ、私の胸は張り裂けそうだっ！』

一瞬が永遠に感じられそうなぐらい、気が遠くなった。この声、ラウラだ……嘘だろ？　まさかここまでやるなんて……あの奇妙な本、さっさと燃やしておけば良かったんだ……変なこと吹き込んだりして……

「はあ……また良いところだったのに、ラウラってば……」

『お兄様っ！　私はお兄様がいれば幸せなんだっ！　心が温かくなるんだっ！』

「しゃ、シャル……早く迎えにいかないと、このままじゃ……」

『だから早くっ！　早く来て私を力いっぱい抱きしめてくれっ！』

「うん、行こっか。みんなも集まってると思うよ」

『お兄様っ！　お兄様っ！　お兄様ーーーっ！』

◇

結局、自由の休日だと思っていたのは最初だけ。実際はいつも通り、みんなに振り回される一日だった。

ラウラを迎えにいって、迷子センターの人に叱られて（何で俺が叱られるんだよ……）、屋上のヒーローショーから帰ってきた一夏たち（全員、ショーの中で悪の怪人『四枚舌』に捕まっていたらしい）と合流して、みんなの買い物に付き合って……最後に俺と一夏は、駅前のクレープをおごらされて。

いつもと変わらない一日だ。みんなが騒がしくて、俺と一夏がとばっちりを食って……幸せな、一日だ。疲労はマジで半端じゃないけど。

「お兄様、食べないのか？　甘いものは苦手だったか？」

「……この状態でどうやって食べるんだよ」

「シン。はい、あーん」

「シャル、冗談はよしてくれ……」

夕暮れの中、駅前からの帰り道。左手はラウラと、右手はシャルと手を繋ぎながら道を歩く。両手が塞がった状態でクレープなんて持てないし、だからといって口に運んでもらうなんて真似はちょっと、いや大分気が引ける。

一夏の方は……篠ノ乃、凰、セシリアの三人が囲んで大暴れしてる。ゴメン一夏。助けられそうもないや。

「僕は本気。だってシン、その状態じゃ食べられないじゃない。ほら、ストロベリーアイス、美味しいよ？　ラウラのよりね」
「むっ、お兄様！　こっちはクッキー&クリームだっ！　シャルロットのよりずっと美味いぞっ！」

二人が俺の顔にクレープを突きつける。アイス入りのクレープが俺の口に運ばれる前に、左右の頬につめたい感触を残していった。

「こらっ、二人ともっ！　顔が汚れたじゃないかっ！」
「そうか。なら私が――」
「きれいにしてあげるからね？」

叱りつける俺の言葉に反省する様子もなし。二人が手を前に引き、俺の体を前のめりにする。そのまま俺の両頬に自分の顔を寄せると――

「「んっ」」

アイスで汚れた場所を、二人が口付けた。

「うわっ！　二人とも、何するんだよっ！？」
「ふふっ。シン、顔真っ赤だ」
「お兄様、嬉しそうだぞ？」
「シャルもラウラもそうだろっ！　全く、仕方がないな……」

周囲の景色と一緒で、俺たち三人はみんな真っ赤だった。だけどラウラに指摘されたように、俺の顔は緩んでいたと思う。こうやって大事な人たちと一緒にいることが、何より幸せだって思えるから。
疲れは溜まったし、財布の中身も軽くなったけど――いつまでもこんな風にいられたら。明日が来ることが、どれだけ嬉しいことだ

ろう。俺は幸せをかみ締めて、学園までの道を歩いていった。

ただ……まだ一日が終ったわけじゃないことに、今の俺は全く気付いていなかった。この日は、これぐらいで済む一日じゃなかったんだ。

第十二話『明日？　一夏と二人で買い物に行くけど？』（後書き）

どうも、ここまで読んでいただきありがとうございました。
誤字・脱字は是非ご指摘ください。
また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくて裏サイバー流に手を出してしまいます。
お気軽にご感想をください。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

番外編その二『今日の織斑先生』（前書き）

※以下の事にご注意ください

・小ネタ二番です。でもギャグじゃなくてちょっと重めです。

・第十二話の夜のお話です。

番外編その二『今日の織斑先生』

プルルルッ、プルルルッ、ピッ。

『はい、こちら日本ＩＳ技術開発研究所・主任研究員の葛城です』

「こんばんは、私はＩＳ学園教員の織斑千冬と申します」

『ああ、織斑先生――ならお互い、堅苦しく話す必要はねーな。いつもご贔屓どうも。どうかしたんですかい？』

「そう言ってもらえるとこちらも助かる。単刀直入に言えば、シン・アスカのことだ」

『シン？　ああ、今日のレゾナンスでのことか……もうモールの方から連絡が来たよ。妹がどうとかわけの分からんこと言ってたが……』

「ある生徒がアスカのことを兄と慕っていてな。今回それが行き過ぎて、買い物の際に不祥事を起こしたそうだ」

『はあ？　なんだそりゃ？』

「私も詳しいことは知らないから本人に聞いてくれ。こちらでも注意をしておいたが、そちらからも一応注意を願いたい。妙なクレームの処理に時間は割きたくないんだ」

『よく分からんが分かった。とりあえず言っておくとする。しっかしフランスのお嬢ちゃんの話といい、アイツは何をしてるんだかな

あ……』

「アスカの周りには自然と人が集まる。私の弟も含めて、あいつを慕う人間は多い」

『ああ、織斑先生の弟さんと言えば、ＶＴシステムを止めたあの生徒さんか。シンの話を聞く限り、仲良くやってるみたいだな。礼を言わせてもらうぜ』

「こちらもだ。アスカも一夏もまだ未熟な生徒同士だが、不肖の弟が世話になっている」

『そうか。ウチでも娘の面倒は良く見てくれたからなあ……で、聞きたいのはそこんところの話か。何が聞きたい？　シンの昔話か？』

「……察しが良いな」

『弟の話が出たからな。大方、シンと一緒にいることが多いから心配なんだろう？　別に、シンは心配するような奴じゃない。問題行動は多いかもしれないが、安心しとけ』

「どことも知れない軍事訓練を受けている生徒を、放っておけと？」

『……何の話だ？』

「私が軍の教官を務めていたこともあるのは、あなたも知っているだろう」

『学園に提出した資料の通りだ。アイツは入学一ヶ月前にウチに来た遠縁の親戚で、たまたま研究所のＩＳを動かしたから、テストパ

イロットをやってもらってるだけだ』

「ミリタリー趣味があるとは書いていなかったぞ？　私に向ける敬礼だが、手の内側がこちらに見えないように角度を調整していた。なかなか知っていることでもないし、とっさに敬礼をしても出来るものじゃない」

『たまたま本でも読んで知ってたんだろ』

「ナイフの使い方はどう説明してくれる？　素人は二動作で相手の頚動脈を切りつけて刃を返すなどできん。人を相手に訓練をしなければ、絶対にだ」

『……今度は回りくどいな。何が言いたい？』

「聞かせてもらいたいだけだ。シン・アスカが過去に何をしていたのかを。提出された資料に書いていないことをな」

『理由はなんだ？　アイツが弟さんに危害を加えるとでも？』

「そうは言わんが、万が一ということもある。生徒の安全を預かる身としては……あれだけの力だ。私には知っておく必要がある」

『ああ、そうだろうな。だがな、信頼している人間を疑われたとあっちゃ、こっちもいい気分がしねーよ』

「気分を害することは謝ろう。しかし、やはり放ってはおけん。この話は私個人の秘密にしておく。決して口外しないことを約束する」

『虫の良い話だが……いいだろう。言っておくが、俺もシンのこと

を全部知ってるわけじゃない。アイツが話してくれたことを教えられるだけだし、その中でも話せないことはある。一応、これでも研究所の主任なんでな』

「分かった。では、話してもらいたい……アスカはいったい何者だ？」

『同じ人間だよ。ただ本人曰く、遺伝子は随分いじってるらしい。アイツはまるで気にしてねーけどな』

「それは軍事用か？　身体能力が常人の領域ではないぞ？」

『いや、そうじゃない。詳しいことは分からねーが、アイツがいたところじゃ当たり前だったらしい。ただ、それでも問題は多かったらしいがな』

「問題？」

『こっちも分からん。言えることは、アイツは超人でもなんでもない民間人だったってことだ。他と変わりない、ごく普通の子どもだったんだよ』

「それが何故、軍に入隊したんだ？」

『こっからハードになるぞ？　……シンがいた国は、中立国だったらしい。ところがだな、アイツが十二歳の時に戦争になって……家族が目の前で吹っ飛ばされたそうだ。バラバラにな』

「――っ！？」

『その後戦争が終結。身寄りがないアイツは軍に入隊した。守ってくれる人間もいない。守る力もない。だから、大切なものを守る力が欲しかったって、言ってたぜ？』

「そういうことか……」

『それで済めばいいんだけどな。まだ終っちゃいねーんだ。アイツは軍のパイロットになった。しかもとびっきりのエースにだ。自分でも、強くなったって思ったらしい』

「……それで？」

『また戦争になった。パイロットになったんだ。当然戦場に出るよな？　俺たちから見ればまだ子どもの、アイツがだ』

「その戦争は、どうなった……？」

『世界ってのは残酷だよな……負けたんだよ、シンは。友達も、上官も、帰る国も、理想も、守りたかったもの全部、アイツは何もかも……全部無くした。俺のところに来たのは、ちょうどその直後だ』

「……」

『アイツについて聞いたことがあるのは、こんなところだ。信じられねーよな？　でも、誰が何を言おうが、これがアイツにとっての現実だったんだ』

「……ああ」

『それでも、今のシンは笑ってるんだ。ウチに来た時はな……本当

に、笑わなかったんだ。表情も変わるし、話もできる。だけど、笑ったところなんて見られなかった。ウチの娘と一緒にいて……入学のちょっと前に、ようやく笑えるようになった』

「……」

『……もう十分か？』

「ああ……ありがとう。そうか……どうりで強いわけだ」

『アイツは今、前を向いてるんだ。だから、その邪魔をするようなことはしないでもらいたい』

「こんな話を聞けば、邪魔をする気もしないさ」

『そりゃあ良かった』

「ふっ……だからと言って、アスカの不祥事を見逃したりはしないぞ？　問題児であるのに変わりはないんだからな」

『おいおい、ちったあ許してやってくれよ。本人に悪気はないんだろ？』

「そうはいかん。教員である以上、注意は公正にしないとな」

『へいへい、お堅いことで』

「それに、アスカが絡むと他の女子生徒と妙な騒ぎになる。これもそちらから注意してくれ」

『女子生徒ぉ？　ああ、それも勘弁してやってくれよ。色々あったせいか……どうにもシンの奴はマトモな『恋愛』っていう感覚が抜け落ちてるみたいなんだ。今のアイツは直接『好きだ！』だの『愛してる！』だの言われても、寝込みを襲われても気付かないだろーよ』

「しかしだな、女子にとっては迷惑この上ないぞ？」

『シンの心のリハビリだと思って、ガマンさせてくれ。じきに真っ当な感覚が戻ってくると思うから』

「刃傷沙汰にならなければ良いがな」

『……分かった。無駄だと思うが、こっちでも言っておく』

「ああ、頼んだぞ」

『それじゃあ、最後に一言だけ言っておく。俺はシンのことを信じてるんだ。だから、お前さんもアイツのことを信じてやってほしい。』

「……任せろ。女性関係以外は信じるさ」

『……アイツ、本当に大丈夫なのか？』

「なるべくこちらでも気をつける。それではな」

『ああ。今度、女房の墓参りに来てくれ。友達が来れば、アイツも喜ぶ』

「そうさせてもらおう」

ピッ。

「まさか、こんな理由だとは……少し軽率だったか……」

「……信じる、か。私が一夏に言った言葉だというのに、これでは姉の立つ瀬がないな」

「ならば、私もアスカのことを信じるとしよ――」

――……バタバタバタッ！

『ねえねえ、知ってるっ！？　今ボーデヴィッヒさんとデュノアさんがお風呂でアスカくんを人質に立てこもってるらしいよっ！？』

『ホントにっ！？　早速観に行かなきゃっ！　カメラ、カメラ！』

『アスカくんの裸が見れるかもっ！　キャーーーッ！』

『今度のプロマイドは二千円は付くわねっ！』

バタバタバタッ！……――

「……」

「……やはり信用はできんな、あいつは……」

番外編その二『今日の織斑先生』（後書き）

どうも、ここまで読んでいただきありがとうございました。
誤字・脱字は是非ご指摘ください。
また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくて地下デュエルに参加してしまいます。
お気軽にご感想をください。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

番外編その三『今日の箒・セシリア・鈴』（前書き）

※以下の事にご注意ください

・小ネタ三番目です。時系列的に番外編その二のちょっと前あたりですかね。

・絶賛暴走中です。

番外編その三『今日の箒・セシリア・鈴』

ガヤガヤ。

「「「……」」」

「その……なんだ、今日のことはすまなかった」

「……まあ、許してあげるわよ。シャルロットも謝ったしね」

「わたくし達も同じことをしたでしょうし」

「すまない……恩に着る」

「それにしても……シャルロットさんは見境がなくなってきましたわね」

「部屋が変わってからよね？」

「ああ、おそらく危機意識が芽生えたんだろう。甘言に乗せられた私が言えることではないが……」

「シンのことを取られる、ってことか。一月同居して、トーナメントのペアも一緒だったもんね～」

「男子という扱いでしたから、ライバルはほとんどいませんでしたし。つまりは独占状態だったと」

「その間、かなりアスカに甘えていたようだからな。二人で手を繋

いでいる写真が販売・流通していたぐらいだ。そうだ、カードにもなっているぞ？」

「カードのことも知ってるわよ。最後は堂々と手ぇ繋いでたしね……ああ、今もそうだったわね」

「あれでお付き合いをされていないというのが信じられませんわ」

「手を繋ぐぐらいではアスカは気付かないさ。一夏といいアスカといい……ＩＳを動かせる男子は鈍いという法則でもあるのか？」

「ならもうこれ以上増えないわね。アイツらの鈍さは恐竜並みだから」

「そうですわね。あの二人なら刺されでもしない限り、絶対に気付きませんわ」

「……最近の様子を見ると、シャルロットは本当に刺しかねんぞ」

「……多分平気でしょ。シンが他の子と付き合いでもしなきゃ」

「……それでしたらラウラさんのことがありますわよ？」

「ラウラ？　あれは妹ごっこで遊んでいるだけではないのか？　本気だとは……」

「そうお思いでしたら、コレをご覧になるとよろしいですわ」

「何コレ？『萌える妹入門』って、ラウラが持ってた本じゃない。どうしたの？」

「ラウラさんが置いていったものをたまたま拾っただけですわ。とにかく、今日のことは覚えていますわよね？」

「迷子センターからの放送か。大方アレも、この本に書いてあったのだろうと思っていたが……違うのか？」

「半分正解で、半分間違いですわ。このページをご覧になれば分かりますわよ」

「なになに……『上級編シチュエーション五十七番。買い物に行ったお兄ちゃんを尾行して見失った時。迷子センターに行き、そこのアナウンスからお兄ちゃんに自分の気持ちを思いっきり叫びましょう。恥ずかしがってはいけません。胸の内を全てさらけ出すのです。そうすればきっとお兄ちゃんはやって来て、妹のあなたを力いっぱい抱きしめてくれることでしょう』……何よそれ……」

「ピンポイントで本に書いてるではないか。セシリア、どういうことだ？」

「お二人とも、お気づきにならなくて？　食堂でラウラさんがシンさんにこれらの本を見せた時がありましたわよね？」

「ああ、シンがキレたあの時ね。覚えてるわよ、それが？」

「あの時も本を読んで、その中に書いてあるセリフを口にしていたが……」

「そう、本に書いてあるセリフを読み上げていましたわ」

「あっ、そういうことかっ！　うっわー……じゃあ、ラウラってシンのこと……」

「鈴、どういうことだ？　まだ私には分からないぞ……」

「箒、今開いたページに読み上げるようなセリフ書いてある？」

「――っ！　そうか、なるほどな……」

「お二人とも気付きましたわね。このページには『自分の胸の内をさらせ』としか書いてありませんわ。今日ラウラさんが叫んだことは、そのままラウラさんの気持ちなのでしょうね」

「ラウラがね～。まあ確かに、シンと一緒にいるようになってから随分と性格が変わった気がするけど」

「摸擬戦での一件もわたくしたちに謝罪をしましたし。シンさん、ラウラさんに振り回されても邪険に扱うことは絶対にありませんしね」

「……アスカは本当に凄いな。これだけ周囲の人間を引き付けるとは」

「面倒見がいいからなのかしらね。いや、それだけじゃないか」

「シンさんの強さのなせる業でしょうか」

「ああ……アスカは強い。私たちではまるで敵わないだろうな」

「この前は一対一でもラウラに勝ってたわよね？　あたし達が三人

がかりでもどっこいだったってのに。どういう強さしてんのよ」
「心の方もだ。ただ力があるというだけで、一夏があれほどにまで人を慕うわけがない。私とペアを組んでいた時も、一夏の目には私は映っていなかったよ」
「ということは、一夏さんに振り向いてもらうには……」
「シンに勝てるようにならなきゃいけないってことか……はあ……」
「悔しい話だがな。一夏の隣を奪うのは当分先になりそうだ」
「一夏さんと同じように、わたくしも稽古をつけてもらう側にまわりましょうか」
「セシリア、そんなことしてると激鈍星王子様に惚れちゃうわよ？　シャルロットみたいにね」
「……鈴さん、あなたは自分が作った手料理を前に他の男性に『俺が守るから』などとのたまう王子様とお付き合いしたいとお思いになって？」
「……ゴメン、あたしが悪かった」
「全く……本当に性質が悪いな。アレが女だったら、今頃一夏と何を見せ付けられたことか――」
――……バタバタバタッ！
「箒、セシリア、鈴っ！　大変だ、助けてくれっ！　シンが、シン

がっ！」

「あれ、一夏じゃん」

「風呂に行ったのではないのか？」

「シンさんがどうかしまして？」

「風呂に行ったよっ！　そうしたら――」

◇

『『イエイ、風呂。イエイ、風呂っと』』

ガラッ。

『『ん？　何だコレ…箱ぉ？』』

ガタッ、ガタッ。

『随分でかいな……』

『しかも何だか動いてるし……』

『シン、箱の外にカードがあるぜ？』

『ホントだ。何か書いてある、どれどれ――』

『おに……シンに箱をプレゼントします。
変なモノは入っていません。開けたら爆発なんてしませんよ？
何も起きないから早く開けてください。

ＰＳ．一夏は外に出ていろ』

『『……』』

『一夏、コレ外に放り出すから手伝ってくれ』

『ああ、ガッテンだ』

ガタガタガタガタガタガタッ！

『……おいシン、この箱怒ってるぜ？』

『はあ……分かった、今開けるから。悪いけど一夏は外で待っててくれ。もし何かあったら、すぐに助けを呼んでくれると……』

『分かったが……気をつけろよ？』

『爆発はしないだろうな。ただ、もっと危険なモノが入ってる気がする……』

ガラッ。

『シン、大丈夫なのか？　すぐ助けを呼べとは言ったが……』

――ガタンッ！　バタッ！――

『お兄様っ！　プレゼントだ、好きにしていいぞっ！』

『やっぱり危険物じゃないかっ！――って、うわあああああっ！
ラウラ、その格好は何だっ！？　服っ、服はっ！？』

『風呂場に服を着て入る奴がどこにいる？　お兄様の心を吹き飛ばすのにそんなものは不要だっ！』

『ここはまだ脱衣所だっ！　くそっ、鍵が開かないっ！？　一夏、一夏ぁっ！　早く助けを――』

『待ってろ！　すぐに誰か――』

――ガタンッ！　バタッ！――

『ラウラ、そうはさせないよっ！』

『おのれシャルロットかっ！？　お兄様は渡さんぞっ！』

『シャル！？　良かった、早くラウラを――って何でシャルがここにいるんだあああっ！　しかも服っ！　シャル、服を着てくれっ！』

『あ、え、えっと、僕がいるのはラウラの見張りだからだよっ！
大丈夫っ！　お風呂の中でも一緒にいるから、安心してっ！』

『安心できるわけないだろっ！？　二人ともこっちににじり寄らないでくれっ！　俺の服に手をかけないでくれっ！　一夏ぁっ、早く助けを――うわあああああああああああああっ！！』

――ドッスン！　バッタン！――

『シンっ！？　シーーーーーーーーーンっ！！』

◇

「――っていうわけだっ！　このままじゃシンが風呂場に浮かんじまうっ！」

「「「……」」」

「一瞬でもアスカに勝ちたいと思った自分が情けなくなったぞ」

「右に同じね」

「左に同じですわ」

「お前ら何を悠長に言ってるんだよ！？　頼むっ、俺だけじゃ止められねえっ！」

「ハイハイ分かったわよ……ったく、手間のかかる奴ね……」

「仕方ありませんわね……まあ、今日のクレープのお礼といたしましょうか」

「そうだな。囚われの王子を助けに行くとしよう」

「ありがとうみんな！　さあ、行くぜっ！」

「「「おおっ！」」」

番外編その三『今日の箒・セシリア・鈴』（後書き）

どうも、ここまで読んでいただきありがとうございました。
誤字・脱字は是非ご指摘ください。
また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくてサテライトを脱出してしまいます。
お気軽にご感想をください。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1524v/

IS〈インフィニット・ストラトス〉　シン・アスカの激闘

2011年11月28日23時51分発行